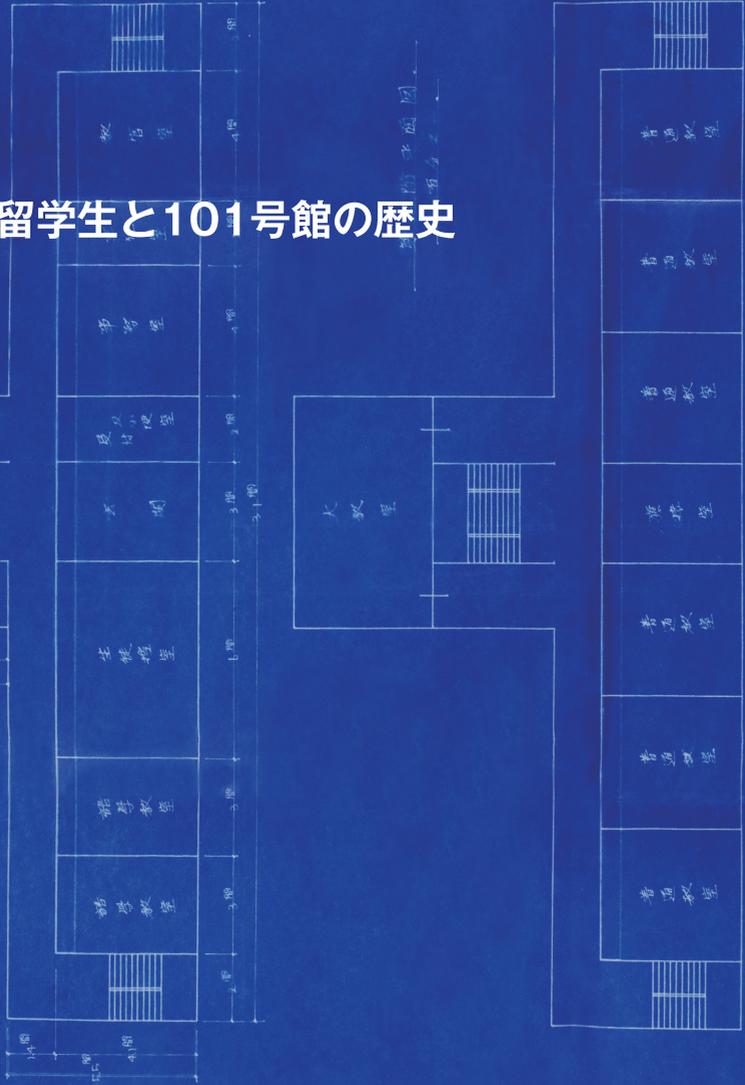


East Asian Academy For New Liberal Arts
Joint research and education program
by The University of Tokyo and Peking University

一高中国人留学生と101号館の歴史

宇野瑞木 編

時設
商等科
教室



EAA Forum 17



EAA Booklet - 26

East Asian Academy For New Liberal Arts
Joint research and education program
by The University of Tokyo and Peking University

一高中国人留学生と101号館の歴史

宇野瑞木 編

E A A

表紙：特設高等科教室平面図（駒場博物館蔵（6）A-26）

口絵：特設高等科教室の外観写真（駒場博物館蔵（12）Z-15-14）



1936年に一高の「特設高等科教室」（通称「特高館」）として建てられた101号館。

なお表紙の青図は、その最初の設計図。初期段階では、正面玄関のアーチをなす突き出た構造がなく、代わりに正面奥に図画教室が設計されていた。この図画教室の部分は、昭和9年作成の実行案の青図（駒場博物館蔵(6)A-3）でも「将来増築予定」として残されていた。これらの青図からは、留学生のための講義棟が当初のように構想されていたか、窺い知ることができる。ちなみに、現在EAAのオフィスがある1階右側には、事務室や主任室が配置されていた。

Contents

はじめに 中島隆博 iii

開会の辞 太田邦史 v

総論 宇野瑞木 1

第Ⅰ部 講演記録

1 中国人日本留学の歴史に思うこと 大里浩秋 17

2 駒場での留学体験——東大は開かれている 汪婉 31

第Ⅱ部 パネル発表論文

1 一高の中国人留学生教育の制度的変遷 韓立冬 43

2 狩野亨吉文書の清国留学生資料——朶寮建設のことなど 田村隆 61

3 服部宇之吉と京師大学堂の留学生派遣事業 薩日娜 75

4 中国人留学生と明治時代の東京遊学案内書 孫安石 99

5 森卷吉と中国人留学生 高原智史 113

6 橋田邦彦——森卷吉の次の一高校長 岡本拓司 125

閉会の辞に代えて——東アジア藝文書院と一高プロジェクト 石井剛 133

あとがき 宇野瑞木 141

執筆者プロフィール 145

はじめに

中島隆博

東京大学東アジア藝文書院（EAA）は、東京大学と北京大学という2つの大学が共同で教育と研究の現場に新しい地平を開き、それによって30年後の世界を担う人材を育成しようという強い望みのもと、2019年4月にスタートしました。

ただ、これは急に思いついた望みではなく、まさに歴史を振り返っていきますと、このシンポジウムのテーマである一高に留学してきた中国人の先輩方の思いも酌んで、わたしたちの活動が出来上がっているのはいうまでもありません。そうした思いのもと、EAAでは「一高プロジェクト」を立ち上げ、様々な方のご協力を得ながら活動を行ってまいりました。

加えて、その東アジア藝文書院のスタッフの皆様方も献身的にサポートをしてくださいました。多くの方々の努力によって、この会が成立したということを楽しんでいます。

そしてその記録としての本ブックレットの刊行が、日中を軸としながら、さらに東アジアの新しい学問のあり方、それを共に創造するような機会になればと願っております。

東京大学東アジア藝文書院長
中島隆博

開会の辞

太田邦史

昨年度、東京大学の教養学部は創立70周年を迎えました。この70周年を記念する行事の1つとして、「一高中国人留学生と101号館の歴史展」が開催されることになりました。これに併せて、このシンポジウムが昨年春に企画されておりました。ところが、皆さんご存じのとおり、あいにくのコロナ禍の影響でシンポジウムが中止となってしまいました。企画展のほうも多くの方に見ていただく機会がなくなりました。

しかしながら、その間に、ウェブコンテンツとしてショートドキュメンタリー動画ができています。この動画には、一高から時計台まで行く地下のトンネルの映像なども含まれています。これは一例ですが、このように一高プロジェクトについての進捗がかなりあったと聞いております。

そして、本日、オンライン開催とはなりましたが、やはり「一高中国人留学生と101号館の歴史」という今回のシンポジウムを開催する運びとなりました。今回は、昨年来の念願でございました北京大学の汪婉先生、神奈川大学名誉教授の大里浩秋先生のご講演者をはじめとして、日中韓のパネリストの先生方にご討論いただくことになりました。

さて、新型コロナウイルス感染症の拡大が最初に確認されておりましたのが武漢であったために、残念なことにこの1年間、中国への国際社会からのまなざしというものには厳しいものがあったということになっています。しかし、このようなときだからこそ、わが国と中国との間の親密な交流の歴史を振り返り、今後の両国の交流を考えていく価値があるのだと私は考えております。

本シンポジウムのテーマの中心となる駒場の101号館ですが、日中の親密

な交流の象徴的な建物になっています。1936年に第一高等学校において中国人留学生が学ぶ特設高等科専用の講義棟として、この建物が建てられました。駒場には、ほかにも特設高等科専用の建物が、特別教室というのができまして、例えば宿舎寮というのができました。これは以前「明寮」と呼ばれていて、駒場寮で使われていました。学生時代に私のサークルの部屋が明寮にあり、明寮のイメージというのは大変懐かしく思い出することができます。

しかし、駒場寮は廃寮となってしまいましたので、当時の特設高等科の面影を知ることができるのは、もはやこの101号館だけとなってしまっています。旧制高等学校である一高というのは、東京大学の教養学部のリベラルアーツ教育の土台をつくったものです。また、今日でも教養学部は東京大学の中で最も国際色が強い学部でありまして、PEAKという英語だけで修ることができるコースも設置されています。

また、北京大学と東京大学が協力して、東アジア藝文書院の活動が行われておりますけれども、その駒場オフィスは奇しくもこの101号館に設置されています。このような背景を考えますと、この駒場の教養学部と中国との間には、長きにわたり深い縁が存在しているように感じています。

本シンポジウムでは、汪婉先生、大里先生のご講演や、パネリストの先生方との討議を通じまして、駒場で育まりました日中の教育交流の歴史を学び、活発なご議論を頂きたいと思います。

本シンポジウムを通じまして、今後、日中両国の交流と東アジア独自のリベラルアーツの展開が進むことを祈念いたしまして、私のごあいさつとさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

2021年3月17日

東京大学教養学部長・総合文化研究科長

太田邦史

総論

宇野瑞木

2021年3月17日、Zoom ウェビナーにてEAA 国際シンポジウム「一高中国人留学生と101号館の歴史」が開催された。本書は、本シンポジウムで日中両国から登壇した12名による講演、発表、ディスカッションの内容を論文集としてまとめたものである。

本シンポジウムは、2019年の東京大学教養学部創立70周年の記念事業の一環として東京大学東アジア藝文書院（EAA）で企画された同名の展示会にあわせて、2020年3月に対面での開催が予定されていた。しかしCOVID-19の感染拡大により、展示については一部実現したものの¹、シンポジウムは延期となった。その後、完全オンラインという形ではあるが、一年越しで開催が実現したのが本シンポジウムである。怪我の功名というべきか、時間がかかった分、多くの方に関心を持っていただくことができ、当日は日中両国から参加者100名を超える盛会となった。ここに、その記録としてブックレットを刊行できることを心より嬉しく思う。

¹ EAAの企画展示「一高中国人留学生と101号館の歴史展」の会場は、東京大学駒場キャンパスの101号館エントランス（会場1）及び駒場図書館1階展示コーナー（会場2）で開催予定であったが、2020年2月7日より会場1のみ展示が実現した（現在も展示中）。その後、両会場の展示はEAAのHPにてWeb公開した（<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/projects/first-high-school-materials-archive/exhibition-101-history/>、及び、<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/projects/first-high-school-materials-archive/exhibition-101-history2/>）。

1. 「101号館」の歴史から——「一高プロジェクト」の発足

2019年4月に、東京大学と北京大学の共同教育研究プロジェクトとして創設された東アジア藝文書院（EAA）では、旧制第一高等学校（以下、「一高」と略称）における中国人留学生受け入れの歴史について調査・公開、及び再検討するための「一高プロジェクト」が進められてきた。この度のシンポジウムも、そのプロジェクトの一環として位置づけられるものである。

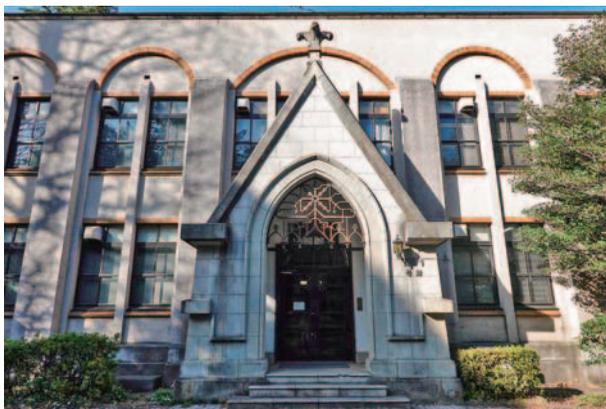
この活動のきっかけは、東京大学の駒場キャンパス内に建つ「101号館」という建物とEAAとの出会い、より正確に言えば、EAA駒場オフィスが「101号館」に入居したことにある²。

EAAが本格始動に向けて準備をしていた2019年2月頃、春の明るい陽射しが差し込むオフィスで、ふと現EAA副院長の石井剛氏から、この建物についての意外な歴史が告げられた。それは、現在わたしたちがいるこの建物が、「特設高等科」という一高の中国人留学生専用の課程のために建てられた校舎であったという事実である。そして、勿論、EAAがこの建物に入居したことは全くの偶然であるけれども、EAAが、これからここを拠点として日中で手を携えて新しい学問としての東アジア発のリベラルアーツを構想し、ともに30年後の世界を担う人材を育成していくことを目標に掲げる以上、この建物に刻まれた歴史をどう受け止めるのか、自らに問う必要があるのではないかと語られたのである。この時の問いかけの言葉が、後に「一高プロジェクト」と名付けられる活動へとつながることとなる。このあたりの経緯については、石井剛氏の「閉会の辞に代えて」も参照頂きたい。

日清戦争以後、清国では、中国文明の影響下にあった国の中で西欧近代の学問をいち早く消化したように見えた日本へ留学することの利点が注目されるようになった。清末政府は、教育視察を日本に派遣し、日本の「学制」とその後の教育制度を参照する政策を打ち出す³。明治37年（1904）に「奏定学堂章程」を公布し、日本型教育体制を確立させ、北京大学の前身である京師大学堂を拠点に近代式大学の体制を整えるべく計画的に日本へ留学させることを定めた。薩日娜氏の論考では、これまで明らかにされていなかった

² EAAの本郷オフィスは本郷キャンパスの東洋文化研究所内に入居した。

³ 汪婉『清末中国対日教育視察の研究』（汲古書院、1998年）参照。



「101号館」(かつての「特設高等科教室」)正面玄関(宋舒揚撮影)

その留学生派遣事業において日中の架橋をした服部宇之吉の活躍に焦点が当てられている。

一高では、文部省より明治36年(1903)に京師大学堂からの留学生31名についての教養教育に関する一切の事務を委嘱され、1904年1月には南寮に入寮させ、翌月より授業も開始している。さらに、明治40年(1907)には、文部省は清国の要請により、毎年数10名の清国留学生を一高に入学させ、卒業後は帝国大学に進学させることを定めた。一高は、これを受けて翌年より留学生の予備教育を行うための一ヶ年の課程「特設予科」を設置、ここに至って一高における中国人留学生受け入れが常態化し、以後昭和7年(1932)に「予科」が廃止されるまで、中国からの留学生延べ800名以上を修了させたのである。この「予科」が廃止されるに伴い、同年に創設されたのが留学生専用の三年間の課程「特設高等科」であった(その後、1937年には「附属予科」も創設)。「特設高等科」は、定員を文理各30名とし、一高の終焉を迎えるまで200余名を迎え入れた。「特設高等科」の卒業生には、直接日本の各大学へと進学する途が開かれていた。

この「特設高等科」の専用校舎として、昭和10年(1935)に一高が駒場へ移転する際に建てられたのが「特設高等科教室」、すなわち、101号館であった。正確には1935年から着工され、1936年に竣工している。この翌年7月7日には盧溝橋事件(七七事変)が勃発し、9月18日の新学期には、特高生58名中39名が欠席した(満洲からの留学生36名中13名が欠席)⁴。日

本が日中戦争、さらに太平洋戦争へと突き進み、軍国主義体制を強化していく中で、特高生たちは一高生としての誇りを抱きながらも、抗日の意識も併せ持つ複雑な状況を抱えこんでいた。もちろん、中国人留学生とはいっても、中華民国と「満洲国」、モンゴルや一部台湾、さらに1944年からはフィリピン等南洋からの特別留学生も受け入れており⁵、当然ながら外務省・文部省の待遇は様ではなかったはずである⁶。学校側も、一高生として安全確保と生活管理という形をとりながらも、他方で通信・移動面にわたり管理監視体制を敷いていったことが伺える⁷。また、1942年以降は、学外から憲兵が中国共産党の地下活動に与した特高生などを拘引・連行することもあった。敗戦の後には、韓半島からの留学生も特高生とし、学制の改正に基づき、1950年の一高終焉とともに特設高等科は1932年からの約18年にわたる歴史に幕を下ろすこととなった。

1945年5月25日の大空襲で駒場キャンパスは焼夷弾投下を受け、特高生たちにも馴染み深かった嚶鳴堂や特高生専用の物理学・生物学・化学特別教室等の建物も焼失した。現在、特設高等科生に直接まつわる建物は101号館しか残っていない。その101号館は、戦後は教務棟となり、教養学部が創設されたのちは「教養学部本部」として使用されるようになった。

1954年2月の『教養学部報』には、一高の歴史の教員から教養学部教授になった藤木邦彦（1907-1993年）が、「教養学部本部」が「特高館」と呼ばれる由来について説明する記事を寄せている。藤木は、それが戦時中の「思想警察」とは関係ないし「特別高級な」という意味でもない、と冗談めかして書いているが、その書きぶりからも、この建物が終戦頃まで「特設高

⁴ 北京一高同窓会『嚶鳴 1995-2005 合訂本』（2006年1月）5号（1997年2月）の年表による。本資料は荒川雪氏より提供頂いた。ここに深謝申し上げる。

⁵ 例えば、1944年の特設高等科生119人の内訳は、中華民国64人、満洲53人、日本（台湾）1人、フィリピン1人であった（藤木文書3-2-2『昭和十九年度特設高等科及附属予科生徒名簿』）。

⁶ 東京帝国大学における中華民国と「満洲国」の留学生の待遇の違いについては、大里浩秋氏の論考を参照いただきたい。

⁷ 駒場博物館所蔵「藤木文書」の調査による。展示パンフレット『もうひとつの一高——戦時下の一高留学生課長・藤木邦彦と留学生たち』（2022年3月刊行予定）参照。

等科生」のための教室であった事実がすっかり忘れ去られてしまった状況が伺える。また 1944 年から一高の留学生課長に加え生徒主事も兼任し、日中両方の生徒の面倒をみた藤木が、「特高館こそは、善隣友好の精神を象徴する、ひとつのささやかな記念碑ともいい得る」と断言している点が印象深い⁸。この「善隣」という言葉は、田村隆氏の論考で言及されているように、一高が初めて清国から留学生 8 名を聴講生として受け入れた 1899 年（明治 32 年）の入学式式辞で、狩野亨吉校長が「善隣ノ道」として一高生に呼びかけた言葉でもあった⁹。

「101 号館」は、明治 30 年代から始まった一高の中国人留学生受け入れの歴史の終着点であり、東アジアの激動の近現代史を生きた証人でもある。いま、この建物に沈殿する中国人留学生の記録と記憶に耳を澄ますこと、そして一高から教養学部へと向かう歴史の叙述から抜け落ちてしまった中国人留学生の歴史を位置づけ直すこと、そこからの真摯な学びを得ることをもって、ようやくわたしたちの目指す学問の形や未来をも足元から構想できるのではないだろうか——このような思いから「一高プロジェクト」は発足したのである。

2. さまざまな「出会い」に導かれて——建物、人、そして資料

こうして「101 号館」という建物との出会いにより始まった「一高プロジェクト」は、その後、さまざまな人、そして資料との「出会い」に導かれて、思わぬ展開を遂げていくことになった。

先述のように、101 号館自体が空襲を免れた数少ない一高時代の建物として貴重な史料であるが、当時の資料に基づいた地道な調査研究が不可欠となるのは言うまでもない。一高プロジェクトはそうした資料探しと専門家へのインタビューから始まった。

その嚆矢は、2019 年 3 月の北京訪問であった。鮮やかな黄色の連翹^{れんぎょう}や白

⁸ 藤木邦彦「かつての善隣友好の場——東京大学教養学部本部」（『教養学部報』28 号、1954 年 2 月）。

⁹ 「殊ニ今年ハ初メテ支那ノ留学生ヲ本校ニ入学セシメタル際ナレハ尤モ注意シテ善隣ノ道ヲ欠クコトナカラントヲ務メヨ」と見える。田村隆氏論文参照。

木蓮が咲き誇る北京大学構内の、柳の若葉の色が目優しい未名湖畔で、EAA キックオフシンポジウムが開催され、当時 EAA 特任研究員であった趙斉氏が、専門の建築学の見地も取り入れた特設予科・特設高等科の歴史についての発表を中国語で行った。翌日、その趙斉氏に伴い、本書にも執筆いただいた、『近代日本の中国留学生予備教育』（北京語言大学出版社、2015年）の著者の韓立冬氏にインタビューするため、北京語言大学に赴いた。幸運にも、筆者もそのインタビューに同席する機会を得、語言大学の学生カフェで、二人のお話を興味深く伺ったことを懐かしく思い出す。

その後、趙斉氏が EAA を離れられ、筆者は偶々インタビューに同席したということで、そのあとを引き継ぐ形となった。これも「出会い」としか言いようがない。筆者自身の専門はもともと日中古典文学であり、古典籍を触ることには慣れているが、近現代資料を扱ったことはなく、知識も恥ずかしいほどに乏しいものであった。そこに4月より一高の研究を専門とする東京大学大学院総合文化研究科博士課程の高原智史氏を EAA のリサーチアシスタントとして迎えたことで、本プロジェクトは本格始動となったのである。

また、駒場に眠る新資料との出会いが得られたことは、本プロジェクトにおいてひときわ幸運な出来事であった。高原氏が加入して間もない頃、折よく教養学部歴史学部会に所持者不明のままに保管されてきた一高時代の留学生関連の資料があるとの情報を得た。5月頃であっただろうか、歴史学部会の山口輝臣氏のご厚意により、高原氏とともに早速その資料を閲覧しに伺った¹⁰。段ボール2箱の中に雑然と詰め込まれた文書類であったが、ひと箱分は留学生資料ではなく、満蒙関係の出版物の校正原稿の束であった。したがって実質残りのひと箱分のみが、一見して特設高等科時代の校務書類や書簡を含む貴重な資料群ということがわかった。その後、有り難いことに、この留学生関連資料の整理作業を EAA で請け負う運びとなり、駒場博物館の折茂克哉氏のサポートを受けて、博物館内に文書を運び込み、高原氏と二人で目録作成を開始した。文書整理の作業にあたっては、折茂氏の他に、駒場図書館蔵の一高校長・狩野亨吉文書を調査整理する科研費（当時は、基盤研究 C「狩野亨吉文書の調査を中心とした近代日本の知的ネットワークに関する

¹⁰ この資料を保管していた経緯については山口輝臣氏の「東京大学駒場博物館所蔵「藤木文書」の来歴」（『日本歴史』888号、2022年5月刊行予定）参照。

る基礎研究]を遂行中の田村隆氏(東京大学大学院総合文化研究科准教授)からも、その具体的な方法や注意点について丁寧な指南をいただいた。折茂氏と田村氏には、以後も、わたしたちのプロジェクトに継続的に助言いただいている。

やがて、目録作成作業の中で、文書の持ち主が、先述の1943年から1945年頃に一高の留学生課長をしていた藤木邦彦氏であることが明らかになった。2019年秋口には、幸いなことに、ご子息・成彦氏との連絡がつき、その年末には駒場博物館へと寄贈いただくことができた¹¹。これが、現在駒場博物館に所蔵されている「藤木文書」である。寄贈が叶った後、コロナ禍で整理作業が中断したままになっていたが、2021年6月からは、新たにメンバーを迎えて、「藤木文書アーカイヴ」プロジェクトとして本格的に調査・公開に向けて動き出した。本プロジェクトの現在のメンバーは、筆者と高原氏の他に、横山雄大氏(東京大学大学院総合文化研究科博士課程)、日隈脩一郎氏(同大学院教育学研究科博士課程)、小手川将氏(同大学院総合文化研究科博士課程)、宋舒揚氏(当時、同大学院総合文化研究科博士課程研究生)、高山花子氏(EAA特任助教)の7名および顧問の石井氏、田村氏、折茂氏の3名であり、藤木文書の2021年度末の公開に向けての整理作業と並行して、駒場博物館にて、2022年3月22日から6月24日までの会期で藤木文書を中心とした企画展示「もうひとつの一高——戦時下の一高留学生課長・藤木邦彦氏と留学生たち」を開催する準備を進めているところである。詳細については、EAAのHPを確認いただければ幸いである。

また、2019年6月には、神奈川大学の中国人日本留学生史研究会に高原氏と共に初めて参加し、大変温かく迎え入れていただいた。1990年代から続くこの研究会は、中国人日本留学生史研究の分野の一大拠点となっており、本研究会を主宰されてきた大里浩秋氏、孫安石氏をはじめ、ここで知己を得た留学生史や日中関係史の研究者の方々からは、その後折につけ専門的な見地から助言を頂戴している。このご縁から、本シンポジウムでも大里氏、孫氏にご登壇いただくことができ、大変有り難く思う。

¹¹ 藤木成彦氏には、その後も大いに協力いただいております。2021年4月6日にはインタビューも実施した。ブログ記事「藤木成彦氏インタビュー——「藤木文書」調査へ向けて」(<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/hujikishigehiko>)参照。

さらに、2019年7月に松本市の旧制高等学校記念館で毎年開催されている夏季教育セミナーに参加したのをきっかけに、旧制高等学校研究をされている先生方からも、折につけ貴重な示唆・指導をいただいている。2021年7月には、オンラインながら「藤木文書アーカイヴ」の共同発表の機会も賜った¹²。

3. 展示「一高中国人留学生と101号館の歴史展」とWebコンテンツ拡充、映像制作へ

さて、先述のように、初年度の2019年の後半からは、本シンポジウムのタイトルにもなっている2020年春の展示に向けて、本格的な準備に取り掛かった。

2019年が教養学部70周年の年であったことで、わたしたちの展示は、その事業の一環として位置づけていただけたことも幸運な巡りあわせであった。特に、本書にも寄稿くださった太田邦史氏（当時、総合文化研究科長）には、「一高プロジェクト」への深いご理解を賜り、様々な場面でご支援いただいた。

また展示準備に向けては、EAAメンバーの筆者と高原氏に加えて、宋氏、そして田村氏とその科研メンバーの川下俊文氏（大学院総合文化研究科博士課程）、鶴田奈月氏（大学院総合文化研究科博士課程）が調査・執筆に携わり、パンフレットの編集・刊行にあたっては、高山氏に多大な協力を得た。なおパンフレットの中国語訳は、宋氏が手掛けてくれ



日本語版パンフレット

¹² EAA「藤木文書アーカイヴ」共同発表「新資料の紹介——戦時下の一高留学生課長・藤木邦彦と留学生たち」（松本市旧制高等学校記念館主催「第25回夏期教育セミナー」、オンライン開催、2021年8月28日）。

た。現在、日本語・中国語版ともにEAAのHPよりダウンロードできるようになっている。

しかし、前述のように、COVID-19の感染拡大状況の収束が見通せない中で、せっかくの展示を多くの方にご覧いただくことができない状況が続いていた。こうした状況下でEAAでは、2020年末よりウェブコンテンツとしてプロジェクトのページを開設、拡充する方向へと舵を切った。これも怪我の功名というべきものであろう。EAAのウェブコンテンツの中に「一高プロジェクト」という専用ページを設け、そこで会場1と会場2ともにウェブ展示を実現することができたのである（現在、日本語と中国語でご覧いただけるようになっている。Webサイトは注1参照）。

さらにコロナ禍の状況は、映像制作という思わぬ方面にも展開を遂げさせた。実際にはなかなか足を運んでいただけない展示会場を紹介するため、17分ほどのショートドキュメンタリーを制作したのである（中国語と英語の字幕版もEAAのWebサイトで公開中である）。これをきっかけに、映像制作については、2020年11月より高山氏、小手川氏、日隈氏、高原氏の4名を中心に「映像制作ワークショップ」が始動し、駒場という場所性をモチーフに、一高生と現代の大学院生の内面を交錯させた本格的な映画『籠城』の制作という壮大なプロジェクトへと発展していくこととなった（2022年3月公開予定）。この動向についてもEAAのホームページを参照いただければ幸いである。

4. 本書の構成

以上のように思わぬ広がりや深まりを見せてきた「一高プロジェクト」において、2021年3月の時点で総括された場が、まさに今回のシンポジウムであった。

本書は、基本的にこのシンポジウムの構成に従って記録した内容となっている。

まず、EAA院長・中島隆博氏の「はじめに」、そして「開会の辞」として教養学部長・総合文化研究科長の太田邦史氏により教養学部の前史としての一高時代の日中交流の歴史や本シンポジウムの意義についてお話し頂いた内容を収録している。

続いて、第Ⅰ部【講演記録】では、2つの講演を収めた。一人目の大里浩秋氏は「中国人日本留学の歴史に思うこと」と題された講演において、東京大学文書館の『支那留学関係』『留学生関係』『留学生関係書類』をもとに、1920年代より「対支文化事業」の一環として東京帝国大学が中国人留学生受け入れを実施してきた際の外務省・文部省とのやり取りが丁寧に検証された。特に、満州事変以後、「満洲国」留学生と「中華民国」留学生の待遇の乖離が拡大した状況について明らかにされた点など、特設高等科の問題を考える上でも重要な視座を提供するものである。

二人目の講演者の汪婉氏は「駒場での留学体験——東大は開かれている」と題し、ご自身が下放青年を経験された後に、1989年から1996年まで総合文化研究科に留学されたこと、特に中国史研究の並木頼寿氏のゼミで学ばれた思い出や、駒場が各国からの留学生が多く国際色豊かな雰囲気だったことなどを回想された。このゼミには、孫安石氏もおられたという。汪氏は、長年、中日外交の最前線に立たれながら、ご自身の研究学問の意義を問いただててこられた。その汪氏からの東京大学の今後のアジアへの向き合い方と社会的役割への提言は、一層の重みを感じられるものであった。

第Ⅱ部【パネル発表論文】では、パネル「特設予科・特設高等科及び当時の中国人留学生について」での議論に基づく6名分の論考が収録されている。

一番目の韓立冬氏の論考「一高の中国人留学生教育の制度的変遷」では、一高特設予科・高等科の沿革について概説するものである。韓氏によれば、一高における留学生受け入れの歴史は、(1)特設予科成立以前の中国人留学生受け入れ(1899-1907年)、(2)「五校特約」下の特設予科(1908-1922年)、(3)「対支文化事業」に組み込まれた特設予科(1923-1932年)、(4)「対支文化事業」下の特設高等科(1932-1945年)の4段階に分けられるという。その上で各時期の日中の情勢や制度的変遷の影響下での志願者や入学者の増減、質の変化などについての検討を行っており、わたしたちの調査活動の土台を成す研究成果である。

二番目は、田村隆氏の「狩野亨吉文書の清国留学生資料」と題された論考である。「狩野亨吉文書」とは、明治31年から39年まで一高の校長を務めた狩野亨吉(1865-1942年)が残した校務文書、書簡、日記、授業ノートな

どからなる資料で、現在駒場図書館に所蔵されている。狩野は、一高に清国留学生を初めて迎え入れた時の校長であった。田村氏は、この「狩野亭吉文書」の調査に、2017年以來、科学研究費補助金を活用したプロジェクトにおいて継続的に取り組んできた。その成果が、昨秋に東京大学デジタルアーカイブズ構築事業の一環としてデジタル公開された「第一高等学校関係文書」と「清国留学生関係文書」である。本稿ではそれらを参照することで、叢寮建設に関する従来の認識を見直し、その具体的活用例を示した。

三番目の薩日娜氏の「服部宇之吉と京師大学堂の留学生派遣事業」では、日清戦争の敗北と洋務運動への反省から「日本の教育」が清末中国の教育モデルとなる中で創設された京師大学堂において推進された日本への留学生派遣事業に着目している。特に、氏は東京大学駒場図書館蔵の一部未公開の服部関係資料と北京大学所蔵資料を対照することにより、この留学生派遣事業において、京師大学堂に1902年に「総教習」として招聘された服部宇之吉(1867-1939年)が大きな貢献を果たしたことを明らかにした。さらに数学の近代化における留日学生の中国での貢献を論じた。本稿の日中双方の資料を突き合わせる手法は、他の学術分野の近代化プロセスの解明においても応用可能であろう。また元留日学生が中心となり設立した中国数学会が、中国における欧米の科学用語の訳語を定めていたことは、EAAでも重要なテーマとなる欧米の思想・学問の翻訳と循環の好例として注目される。

四番目は、孫安石氏の「中国人留学生と明治時代の東京遊学案内書」である。孫氏は、中国からの日本留学がピークを迎えた20世紀の初頭に、留学生たちが参考にした留学案内書に着目した。中でも広く読まれた章宗祥編の『日本遊学指南』について、実はその内容の多くが明治期に発行された日本国内の東京上京者への案内書である下村泰大編『東京留学案内』と少年園編『東京遊学案内』に拠っていたという興味深い事実を明らかにした。その上で章宗祥編の『日本遊学指南』の内容を検討・紹介し、中国人留学生史研究の先駆者・さねとうけいしゅうが扱っていなかった資料も視野にいれながら、新たな知見を示した。

五番目の高原智史氏の「森卷吉と中国人留学生」と題された論考では、特設高等科設立(1932年)と一高の駒場移転(1935年)の時に一高校長であった森卷吉(在任1929-1937年)とその時代の日中学生の交流に着目されている。森と中国人留学生との関わりは、1904年の森の大学卒業直後、一

高の清国官費留学生の英語教師への着任から始まることを確認した上で、留学生教育に多大な関心を有していた森校長の入学式式辞の草稿や、当時の茶話会に関する寮日誌の記録などから一高内部の言説を分析した。高原氏によれば、一高生からは寮生活の共同を通じて日中融和が可能とする言説が抽出できるが、留学生に必ずしも共有されうる価値観ではなかったという。エリート養成校である一高において、中国人留学生という他者を制度的に抱えたことからくる軋轢を明らかにした点は特筆すべきであろう。

最後に岡本拓司氏は、「橋田邦彦——森卷吉の次の一高校長」と題し、森卷吉の後に、1937年から一高校長となった医学者の橋田邦彦を取り上げ、彼の科学と「日本の把握」「東洋の精神」を結びつける言説が当時の時代状況に歓迎されたことを指摘した。また、そうした橋田校長の言動に対して当時の一高生は懐疑的な反応を示したという興味深いエピソードも紹介している。またシンポジウムでは、一方で、一高の教員たちが掲げた「善隣」「友邦」という融和を促す言葉の響きには、先進国が後進国を先導するという意識があったことも鋭く指摘していた。

以上を踏まえ、「閉会の辞に代えて」として、一高プロジェクトの発起人である石井氏より、改めてEAAにおける本プロジェクト発足の経緯やその意義・課題について論じていただいた。石井氏は、一高の駒場移転後、日中戦争へと突き進んでいった当時の「時代の無意識」と、一高の教養教育・学問との関係を「負の遺産」も含めて引き受けることなしに未来を描くことはできないと強調された。それは無論、EAAの営みもまた「時代の無意識」と無関係ではいられないことを意味するのであり、だからこそ、わたしたちは歴史からの真摯な学びによって、新しい未来への軌道を描くための構想力を得ようと努力しなければならないのである。

本シンポジウムでは、一高における中国人受け入れの歴史を中心にしつつも、1900年代初頭から1930、40年代に至るまでの時期の動向について議論がなされた。その中では、当然ながら「中国人」の意味も時期によって多様かつ複雑であること、時代状況と一高教育の関係を常に批判的に検討していく視点が不可欠であること、また一高のみならず国内外の資料の広がりも視野に入れて問題を多角的に見つめていくこと、そうした資料の総合的な活用や共同研究の重要性等が共有されたように思う。

5. おわりに

本書に記録されたシンポジウムは、「101号館」という中国人留学生たちが学舎とした歴史の光と影が刻まれたこの場所を機縁として、一高における中国人留学生の受け入れの歴史に日中双方から光を当て、共に真摯に学びを得たいと考えて企画されたものであった。そして、EAAの一高プロジェクトが、これまで多くの方々との出会いとご支援があってこそ可能になったものであることを実感する場ともなった。改めて、ここまで関わってくださったすべての方々に心から感謝の意を表したい。

第 I 部

【講演記録】

大里浩秋

汪 婉

1

中国人日本留学の歴史に思うこと

大里浩秋

はじめに

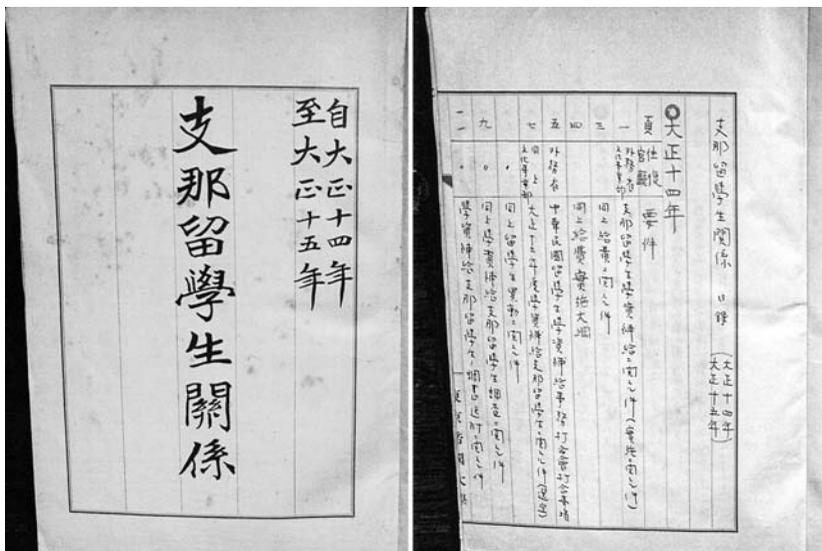
1964年に入学して3年間東大教養学部にて在籍中、三鷹寮の寮委員をやって大学厚生課が置かれていた101号館に相談に行ったことがあります。その頃は101号館がかつて一高の中国人留学生の教室として建てられ使われていたことを知らなかったのですが、そこが今や留学生の歩みを振り返り新たな交流を進める場所としてよみがえったこと、うれしい限りです。思い起こせば駒場在籍中に、自らの留学時の体験を素材にした魯迅の作品、とくに「藤野先生」を読んでいろいろ考えさせられたことが、中国人日本留学の歴史に興味を持つきっかけになり、その後さねとうけいしゅうさんを始めとする先行研究の影響を受けて関心を深めることになりました。

時を経て、神奈川大の同僚になった孫安石さんと共に留学史研究会を開き、中国からの留学生を含む同好の士と学び合って20年を経過しました。参加者それぞれの関心から発する研究の成果に学ぶことが多く、それで長く続けることになったのですが、私の関心はといえば、中国人の日本留学さらには日本人の中国留学を通して近代以降の日中関係のありようを考えようとするところにあります。今回の報告を準備する過程で、東京帝国大学の中国人留学生受け入れに関する原資料や一高における留学生に関する論考を読む機会があり、また、二高、三高についても東北大と京都大に保存する関連資

料や論考を閲覧する機会があり、さらには、他の官立学校についても同様に論考や資料があることを知り、これまで官立学校の留学関係の研究をおざなりにしてきた私としては、遅まきながらこの方面の資料を読んでいこうと考えています。

東京帝国大学の中国人留学関係文書を読む

さて、東京大学文書館には中国人留学関係文書が多量に保存されていますが、私が目にして興味を覚えたのは明治 35 年（1902）から大正 14 年（1925）までの資料を綴った『諸向雑件』^{しよむきざっけん}と大正 14 年から昭和 18 年（1943）まで、タイトルを『支那留学生関係』『留学生関係』『留学生関係書類』と変えつつ綴った文書類でした。そのうち前者の内容は、中国のさまざまな団体から出された「東京帝国大学参観願」や中国側からの留学生数や留学希望に関する問い合わせなど雑多で、興味を引いたのは、関東大震災の「罹災中華民國学生帰国者一覧表」（大正 12 年）や浙江省教育庁々長の依頼で調査した「浙江省留日官費生調査票」（大正 14 年）などですが、文書中に後者にある



大正 14、15 年版『支那留学生関係』表紙部分

同目録の一部

ような外務省や文部省とのやり取りの記録はなさそうで、文書量も後者と比べてかなり少ないことからすると、それは明治から大正までの大学およびその周辺の留学に関する取り組みの質と量を反映していると思えるので、以下には、後者を取り上げてその内容を紹介すると共に若干のコメントを加えたいと思います。

1) 『支那留学生関係』大正 14、15 年版の出だしに大正 13 年 (1924) 12 月付外務大臣幣原喜重郎「支那留学生学資補給に関する件」と外務省文化事業部 (以下、外務省)「対支文化事業に就て」を載せているのは、東京帝国大学 (以下、東大) が外務省の方針に沿って中国人留学を受け入れるべく、その関係文書を 1 年ごとに保存し始めたことを示しています。上述二篇のうちの「対支文化事業に就て」には、外務省が一連の中国に向けた文化事業を実施し、その事業の一つとして中国人留学生の学資補給を打ち出した経緯について詳しく述べられていますが、ここでは私の理解するところでごく簡単にふれることにします。

日本が、1900 年から翌年にかけて中国で起こった排外運動である義和団事件を西洋列強と共に出兵・鎮圧して得た賠償金を主な財源として、1900 年代初頭に多くの中国人留学生を受け入れたのがアメリカを始めとする西洋諸国もその受け入れに力を入れることで減少したことや、10 年代になると中国に二十一か条など強硬な要求を押しつけたことで多くの中国人の反発を招いたのを挽回すべく、20 年代になって外務省は文化・教育面から中国への影響力を増そうと考え本腰を入れて留学生への学費補給についても取り組みだしたというわけです。

外務省がこの政策を実施する大正 14 年 (1925) 4 月、文部省担当者と東大を含む在京の官立大学・私立大学や一高など計 18 校の関係者を集めて「支那留学生給費実施大綱」実施の徹底化を図っていて、そこで前年に公布された中華民国教育部令「日本対支文化事業留学生学費補助費配布辦法」に基づき、毎月 70 円の学資を支給する学生定数を 320 名とし、それを省ごとに一定数ずつ割り当てて選出することが確認され、また選出された留学生を受け入れる資格を持つ学校として東大など官公立大学 15 校、私立大学 8 校、官公立専門学校 94 校 (その中に一高から八高までを含む)、私立専門学校 16 校の名前が確認されています。このように中国側の主導で該当者を決め

る補給を「一般補給」と呼んで実施した他に、「特選補給」と「選抜補給」がありました。前者は、専門教育を終えてさらに研究に従事しようとする成績優秀者に、後者は、特選に準じて成績が優秀で学費不足に悩む者に人数を制限して支給することにし、支給を希望する学生について在籍する学校や団体が選考して外務省と文部省に推薦し、その中から文部省が選出して一定額を補給するというものでした。そして、一般補給を中心にして三つの補給制度を始めて5年経った昭和5年1月現在で外務省が発行した「昭和四年度学費支給支那留学生調」によると、一般補給を受けている留学生の学校別、省別の人数表や選抜補給生の省別人数表を置いた後に、学校別の補給生の名簿が続き、その先頭に置かれた東大には25名の一般補給生の他に、3名の選抜補給生、5名の特選補給生の氏名と各補給額が書かれています。その後ろに他の官公立大学、私立大学、専門学校や一高などが並び、さらに病院、農事試験場、伝染病研究所（東大付属）その他さまざまな団体が並んでいて、それぞれに人数はまちまちながら給費生が在籍していることが分かります。

こうして、補給制度の開始から5年ほどの経過を東大の『支那留学生関係』の資料で追うだけでは、外務省の補給政策が順調に定着しつつあると読めるのですが、さにあらずで、この件に関する中国側担当者との協議は最初から対立含みで、双方が納得した内容で実施されたものではありませんでした。その経緯を阿部洋氏『対支文化事業の研究』（汲古書院、2004年）を参考にしつつ私なりに跡付けてみますと、中国側の考えは、義和団賠償金はそもそも列強の圧力で支払わされたもので中国に返還するのが筋なのに、その金を使って留学生の学費補助を宣伝するのはけしからんとするものであり、せめて中国側の主導で補給対象者を決める「一般補給」は許せるとしても、日本側が勝手に決めるやり方である「選抜補給」には反対でした。

しかし、選抜補給を含めた上述のような補給のやり方が数年間採用されている間に、中国の政権が北京政府から蒋介石南京政府に代わり中国側の賠償金返還の声が一層強まって、1930年には一般補給の欠員を今後は補充しない方針を決め、さらに満洲事変の勃発とそれに続く満洲国の建国により中国側の対応はますます厳しくなって、年を追うごとに一般補給生は少なくなり、37年には姿を消しました。それに対して外務省が採ったのは、選抜補給生を予算の可能な限り増やして義和団賠償金を使った留学生支援策をとに

かく維持することでしたが、こうした両国の外交対立に発する補給方針のしばしばの変更を伝える資料は、留学生受け入れの当事者である東大に保存されている文書中にはどうも見当たらないようなのです。

以上でお話ししたように、外務省の指導の下中国人を受け入れた状況は特種東大に限らず、他の学校や団体にも共通する内容を含んでいたわけですが、以下には東大の状況に絞って見ていくことにします。

2) 東大の留学生関係文書は、昭和6年(1931)までは『支那留学生関係』(以下、A)、7年から10年版までは「支那」の二字を除いて『留学生関係』(以下、B)のタイトルに代わっています。それは、昭和6年に満洲事変が起きて翌年に「満洲国」が建国されたことや、時には少数ながら他国からの留学生について扱う文書もあり得ることを考慮してのことでしょうが、タイトルを代えたからといって扱う対象がほぼ中国人の留学に関することには変わっていません。さらに昭和11年版から17・18年版までは『留学生関係書類』(以下、C)と題していますが、これも内容のほとんどは中国人関係であるのは変わりません。なお昭和19、20年については、それまでのように大学としてひとまとめにしては保存されなかった可能性があります。その時期の総長だった内田祥三が個人的に保管していた文書中にCに関連する内容が含まれているので、それによって終戦年までの状況を一定程度たどることが出来ます(所澤潤「東京帝国大学における大東亜戦争後半期の外国人留学生受け入れ状況——外国学生指導委員会の活動を中心に」『東京大学文書館紀要』第10号、1992年3月、参照)。

3) それらの文書を概観すると、A、B、およびCの昭和15年(1940)までの文書の大半を占めるのは、補給に関する外務省側、さらには文部省側と大学当局とのやり取りの記録です。補給生の選出は毎年実施され、大学としては学部ごとに「特選、選抜」の二つについて希望する留学生を募り、彼らの日頃の成績に加え思想傾向を加味して推薦者を決め、それを外務省・文部省に通知して採用の可否は外務省から届いたようです。さらに1年ないし2年が経つと補給の期限が来てその延期を希望する者への再選考があり、また欠員が出た時には補充選考があり、さらに卒業して帰国する者、病気で入院す

る者への補給の可否についても（おそらくは一般補給生を含めて）外務省側とのやり取りが必要でした。こうした手間ひまは、留学生本人にとっても負担を覚えることだったでしょうが、大学側の教職員にとっては外務省による留学生の管理の多くを代行しつつ日常的な各種指導を担うという二重の負担を強いられたと思います（なお、昭和16年以降の留学生受け入れについては4）で触れます）。この際思い浮かぶのは、明治末年の留学生の管理は清国公使館に置かれた清国游学日本学生監督処がその大部分を担い、留学先の学校には学生の出欠や成績を問い合わせる程度にとどまったことです。この明治期、さらには大正期までの中国側による留学生の管理と、外務省を主とする昭和期の日本側のそれとは興味を覚える比較対象ですが、それは今後の課題にします（明治期の中国側の留学生管理については、大里『『官報』を読む』『中国人日本留学史研究の現段階』、御茶の水書房、2002年、参照）。

4) ここで、各年度で印象に残った文書を拾っていきます。

a) 大正14・15年（1925・26）

卒業生の「本邦内地修学旅行」、在校生の「内地研修旅行」を始めました。費用は外務省対支文化事業から出て、留学生にとっては見聞を広める機会となり、指導教官にとっては授業以外の場で留学生に接する機会になったはずで、双方とも積極的にこの機会を利用したと受け取れる感想文が残されていて、少なくとも昭和12年春までは続けられたことが文書から確認できます。

b) 昭和5年（1930）

11月、総長主催、各学部長出席の下で「中華民國留学生談話会」が開かれました。大学としては準備万端の開催となったものの参加は72名の留学生中25名に留まったようです。

c) 昭和6年（1931）

この年は、外務省が5年から始めた日本人を中国に派遣する留学制度「在華本邦補給生」派遣の2年目で、その第三種補給生に東大から4名の応募があり、その応募書類が収録されています。第一種は小学校卒業程度、第二種は旧制中学卒業程度、第三種は大学を卒業して研究職に就いた程度の日本人

に補給金を出して、それぞれに日中関係に役立つ人材に育成しようとねらった制度で、この時は農学部卒で同学部の副手を務める鈴木辰雄のみが採用されて2年間留学したようですが、外務省は義和団賠償金を使って中国人の日本留学を援助すると同時に日本人の中国留学をも奨励したことになります(大里「在華本邦補給生、第一種から第三種まで」、『中国研究月報』2007年9月号、参照)。

d) 昭和7年(1932)

前年に起こった満洲事変以後の留學生の動静について外務省の問い合わせが数回あり、各学部で「満洲事変発生後に於ける中国留學生の動静概況」「留學生の動揺に対して採りたる措置並に其の結果」をまとめ、留學生一人一人の帰国の有無、帰国していない學生の学習態度を調べて「在学中国學生個別調査表」を作成して、外務省に報告しています。その報告では、在籍166名中80名が帰国したとある一方で、「大体に於て甚しき動揺を見ず。事件に無關心なるが如く學業に専心し學友間の融和も良好」とするのは、矛盾した報告になっていると感じます。

外務省・文部省経由で、中華民国政府派遣の実習生を本邦の工場や大学で受け入れてほしいとの要望が伝えられ、東大からは医学部に11名、農学部には9名、工学部、理学部に各1名がすでに実習していると報告しています。こうした本科生、大学院生の留学とは違う資格で「生徒」と総称されて受け入れられている存在があったことは、理系の学部が受け入れに積極的だったことを示す事例として注目してよいのではないかと思います。

e) 昭和8年(1933)

文部省の要請による「満洲国及び中華民国留學生数調査」報告は、満洲国と中華民国に分けた上で省別、学部別にし、さらに学部別では「院生、本科生、選科聴講生・専攻生、実科聴講生」に分けた詳細な記録で、次年以降も同じ形式で調査記録を作っています。それまでは中華民国留學生として一括して扱っていたのが、満洲国の成立を機にそうは処理できなくなったことを内外に気付かせる記録になっています。

f) 昭和9年(1934)

外務省あて9月の「本邦留学満洲国及中華民国学生の卒業帰国後に於ける状況調査報告」は明治以来の留学生の帰国後の動向を調査したもので、この種調査の始まりといえるものですが、なぜ時間をさかのぼってまで卒業生の動向を調査することを外務省が指示したかといえば、彼らの帰国後の影響力を利用する機会が今後増えるのではないかと考えたからではないかと思えます。ところがこの報告では、帰国後の動向は不明と答える学部が多い中で、医学部の卒業生の勤務先は書かれているのがかなりの数に上り、農学部はそれに次いでいるのです。このことが何を意味するか、おそらくはこの2学部は専攻分野がはっきりしていて実習生の受け入れもあり、帰国後の就職先も把握しやすい点があったのではないのでしょうか。

g) 昭和10年(1935)

満洲国文教部補助留学生募集が実施されて、外務省補給等を受けていない学生への満洲国としての支援を開始し、それに伴い留学生の履歴、出欠、素行調査を依頼してきて、その調査報告を行っています。

また、満洲駐日大使館から総長あての書簡によると、東京のみで1000名を超える留学生がおり、満洲国留日学生会館が建設されてそこをベースに学生の校外指導を行っており、東大にも留学生会支部があると書かれています。さらには、満洲国の留学生名簿『満洲国留日学生録』が駐日満洲国大使館作成で発行されて、昭和18年の分まで続いているのは、留学生派遣に満洲国が力を入れていることを感じさせる動きです。

h) 昭和11年(1936)

2月、外務省から総長あてに、これまで給費生と本邦学生との懇話会費を支給してきたが今年から廃止する、しかし貴学に対しては今まで通りに「訓育費」の名義で補給する、との通知があったのは、東大を特別扱いにしている例だと受け取れます。

5月、本郷元富士署の要請で在籍外国人講師学生の名簿を作成し提出しています。それによると、外国人講師は中国人を含む14名で、留学生は数人を除いて中華民国が満洲国に属する中国人ですが、そこで注目すべきは、医学部には本科生1名、選科生2名を除いて専攻生が74名いることであり、

さらには、この期に警察の要請で大学が留学生の現住所を伝えていることです。

6月には、この年の選抜補給生選考試験を受けようとして他の留学生に阻止される事件があり自分の意志で受けるのをやめた学生も多数出ました。受けるのをやめた学生の言い分は、今年の受験はそれまでと違って専門試験でなく日本語の能力を問う試験で実施されたが、中華民国留学生は學術の研究が主で日本語は従である以上日本語試験のみで判断されるのはおかしいというものでした。日頃感じてきた留学生の補給制度にまつわる不満がこのような形で表面化したのかもしれませんが。なお、試験を阻止された留学生は再試験を願い出てそれを認められたようです。

文部次官あて10月12日付報告「満支両国人学生生徒の取り扱いに関する件」は、「留学生異動及夏季休業明けの就学状況」と題して、中華民国留学生については、満洲事変以来の音信不通、学資の途絶等で夏休みに入るや帰国が続出し、219名の在籍者中在留者は11名のみであり、満洲国留学生は、平常と異なることなく夏休みで帰国した者もすでに戻っており、留日学生会東京帝大分会を結成し、相互に親睦連絡を図り平穩に勉学中、と伝えています。同じ学校に在籍しながら中華民国留学生と満洲国留学生が置かれた境遇の乖離はますます広がったと言えるようです。

i) 昭和12年(1937)

文部省の「留学生施設及団体に関する」問い合わせに対し、7月、東大は、留学生教育のための特別の制度や施設については、農学部に於ける特別講習会、医学部に於ける専攻生の受け入れと医学講習科、伝染病研究所の研究生受け入れをあげ、留学生の修学への便宜としては内地見学旅行をあげ、学校内外における留学生団体としては中華民国留日東京帝大医学部同学会、中華民国東京帝大同学会（未公認）、満洲国留日学生会があると回答しています。

8月、盧溝橋事件後の「満支両国学生生徒取扱に関する件」での文部次官名の問い合わせに対して、各学部ともほぼ帰国したが、医学部のみは在習者の方が多くと回答しています。また、総長名の報告では、「本学に於ては平時本部庶務課外事掛、学生課並に各部局間に緊密なる連絡を採り、満支留学生の動向につき各関係方面より深甚なる注意を払ふと共に、留学生の心情に

関しては懇切に相談に応じつつ、他面其の言動に対し充分なる監視を為し居れり」としています。そして9月には、外務省から9月以降の補給学費は授業に出ているかどうかで支出を決めるので至急調査するよう指示が出されてその調査を行っています。

j) 昭和13年(1938)

文部省の7月5日付の通知「選抜留学生の選定並学費補給要綱」には、9月分から実施するとして、満洲国留学生については同国政府、大使館の推薦が必要、中華民国留学生については、当面は臨時政府、維新政府、蒙疆連合委員会の推薦が必要であり、選抜されても「操行又は成績不良者」は学費支給を停止する、とあります。前年の日中戦争勃発により従来の中華民国政府に代わって組織された複数の地方政府とでもいべき組織に留学事務の代替わりをさせたこととなります。

11月14日付け外務省から総長あての「特選留学生蔣天勳に対する学費取止め件」には、当該学生が昭和10年渡日以来、「不敬事実、外課事実、造言蜚語せし事実」があり検挙送検されたとの通知があったので、学費補給を取りやめ、12年4月から補給した学費全額を返納させるので指導教授から本人にその旨伝えてほしい、とあります。

k) 昭和14年(1939)

寺内部隊特務部総務課長名の依頼「本学卒業中華民国人調」への2月23日付報告は、昭和9年の外務省あての報告同様、学部ごと明治以来の卒業生につき、在籍年、出身地を記したもので、法学部39名、医学部10名、工学部56名、文学部26名、理学部17名、農学部39名、経済学部44名についての名簿になっていますが、軍関係からの調査依頼は初めてのようです。また、興亜院華北連絡部が11月に事務処理上必要があると依頼してきた同じく大学開設以来の中国人卒業生名簿については、翌年1月に送付しています。

l) 昭和16年(1941)

この年5月に中華民国留学生に関する事務は外務省より興亜院に移管、今後留学生の入学に関しては興亜院の紹介者を有する者に限り入学願書を受理

すると伝えられました。まもなく、興亜院文化部長名義で中華民国華北政務委員会教育総署が直轄する学校の教員6名を9月から1年間留学させたいとの依頼が届きました。それへの東大からの諾否の返答は文書には見当たらないのですが、だまって受け入れるしかなかったと推量されます。

日華学会の要請で毎年実施している留学生調査では、この年在学生、卒業生の他に「在籍者にして事変後帰国中のもの」として院生41名、本科生1名、選科生9名の名前が列記されています。

m) 昭和17・18年(1942・43)

調査掛名の作成年月不詳の「本邦留学満洲国及中華民国学生の帰国後に於ける状況調」が、この年の文書中に綴じられています。昭和9年と14年にも同様の調査報告が作られています。この調査がいつこの依頼で行われたものかは不明で、あるいは大学が独自に調査して作成したかもしれないと思えるほどに詳しい内容になっていて、昭和9年と14年には大学院生・本科生の卒業者に絞って調査されているのに対し、この調査では院生・本科生のみか医学部に在籍した専攻生なども含まれて卒業の有無を記す欄もあって、卒業生・修了生はもちろんですが、退学・依頼退学、除籍、除名の留学生についても記入しており、前2回より大幅に増えた人数になっています(法学部60名、医学部126名、工学部68名、文学部67名、理学部19名、農学部307名)。しかしなぜか、満州事変以来帰国したままもどって来なくて除籍処分になったはずの多数の留学生については取り上げていません。

17年7月8日付の農学部の「大学院学生に関する異動報告」には、12年4月から13年4月、あるいは13年4月から14年4月まで在籍した学生計41名が「攻究料未納に付除籍す」と書かれています。事の詳細は不明です。

17年11月より中華民国留学生に関する事務は大東亜省において取り扱うので、今後同国の留学生の入学に関しては大東亜省支那事務局の紹介を有する者に限り願書を受け付けることになったとされました。そのためか、17、18年には、16年の興亜院管轄時期と同様それ以前にはなかったような各種の推薦による留学が受け入れられています。例えば、中華民国(汪兆銘政権)大使館付き武官1名は、経済学の研究をするだけでなく「日華一体の実現に協力しつつある」人物であるとの推薦文があり、加えて大本営陸軍報道

部長の推薦もあって、学費免除で経済学部聴講生になっています。また、「満洲国留学教官派遣に関する件」によると、満洲国の何らかの教育機関で教職についていた複数の中国人や日本人が「留学教官」という名目で、いくつかの学部の聴講生になることが書かれています。

こうした、昭和13年ごろに始まり16年にはさらに顕在化した留学生受入れ状況の変化に対応するためでしょう、17年には半年以上をかけて各学部1名の教員(委員)に事務方数名(幹事)を加えて計17回の会議を行った内容が、「外国人留学生取扱に関する調査委員会記録」にまとめられています。そこに載る「委員会の目的」の一部を引用しつつ紹介しますと、「今回大東亜共栄圏の樹立を見、同地域よりの入学志願者も相当増加すべく、我国としても、此等共栄圏内各国の指導者たらんとする者に対して適切なる教育を付与することは必要事なり」、また共栄圏外の国からも留学を志願する者が増える傾向にあるので、彼らすべてに我国文化の真相を理解させることは「国策上きわめて重要事である」、そこで、我が国の学生教育に支障ない限り、一般外国人留学生志願者の入学条件を適度に緩和する方策を検討し、「併せて、従来動もすれば留学生中却って我が国に対し悪感情を懐持し、其帰国後、国際親善上悪影響を及ぼせし实例も少からざりしに鑑み、外国人留学生在学中の指導監督改善方をも審議立案」するのが目的だとしています。また、この委員会で検討されたうちの入学選考についてみると、次のようです。「学内に一中央機関を設置し、左〔つぎ〕の事項に関する選考を行はしむ。(1) 来歴、人物、思想、健康等、(2) 各学部には前記(1)の選考に合格したる者に対し、当該学部の修学に必要な一般の素養に就き筆記、口述及其他適當なる方法に依る選考を行ひ、入学の許否を決す、(3) 各学部に指導監督機関を設置し、前記中央機関と連絡して指導監督の完璧を期することとす。」それまでと違うのは、中央機関を設け各学部には指導監督機関を設けて、選考と入学後の監督に完璧を期すとしたところでしょうか。その他委員会で検討された内容は多岐にわたっていますが、ここでは触れません。

ところで、先に触れた所澤潤氏の紹介文は、調査委員会でまとめた改正内容が18年6月1日から施行されたこと、調査委員会の後に設置された外国人留学生指導委員会の19年5月の会議で外国人留学生の来日を見合わせることについて話が進んでいたこと、20年の外国人留学生の入学許可者が少なく

とも1名あったことなど、Cでは触れていないその後の動きを教えてくださいますが、調査委員会が17年に集中して進めた改革論議は、敗戦に向かう過程でそれを一つとして実現させるまでに至らなかったこととなります。

結びに代えて

今回のシンポの報告を依頼されてすぐに思いついたのは、中国人日本留学史を研究して日頃感じてきたことをざっくばらんにお話ししようというものでした。具体的には、中国人の日本留学が始まった明治後期における中国側の派遣事情や日本側の受け入れ事情についてお話しし、中国人の日本留学が他国への留学と違って決してエリート留学とばかりは言えない多種多様な目的によって実行されたことにこそ特徴があり、ゆえに中国人日本留学は苦労も波乱も多い興味深い研究テーマであることを事例をあげて話し、その後の時期についても、幾度かの外交対立や戦争を経てこれもまた他の国への留学とは違う展開があったことを取り上げて話せればと思ったのです。しかし、コロナ禍が収まらずに開催が延期されているうちに、それよりもせつかく駒場で開くシンポでの報告なのだから東大に関わるテーマにした方がいいと考えるようになって、東大文書館でコピーさせてもらったまま手つかずにしてきた資料に急遽目を通してお話することにした次第です。

不十分な報告であるのは承知していますが、大正末年から昭和20年までの東大における中国人留学生受入れ状況の一旦なりとも伝えられたならば幸いで、報告の不足は、一高での中国人留学生の歴史を調べ始めた皆さんの刺激を受けつつ今後補っていければと思います。

駒場での留学体験

東大は開かれている

汪婉

本日は東京大学東アジア藝文書院（EAA）主催の国際シンポジウム、「一高中国人留学生と101号館の歴史」に参加させていただき、ありがとうございます。教養学部は2019年に設立70周年を迎え、この記念すべき年にEAAがスタートし、本来、対面のシンポジウムが2020年3月に開催する予定でしたが、COVID-19の発生が原因で1年延期の開催となりました。

歴史展やショートドキュメンタリーも含めて、先ほどEAAの副院長でいらっしゃる石井剛先生、宇野瑞木さん（特任助教）が紹介してくださいましたように、大変な準備作業でした。このシンポジウムのためにご尽力されてきました、太田邦史先生（総合文化研究科長）をはじめとする総合文化研究科の方々、中島隆博先生（EAA院長）をはじめとする東アジア藝文書院の関係者の方々に敬意を表したいと思います。

ショートドキュメンタリーを拝見しました。明治32年（1899）、一高は初めて清国より留学生8名を受け入れ、その後、昭和7年（1932）まで中国からの留学生、延べ800名以上が卒業しました。そして、駒場博物館に所蔵されている、一高が駒場に移転してきた昭和10年（1935）前後の史料も大変貴重なものだと思います。

中国人日本留学史研究は私の専門分野ではありませんが、本日のシンポジウムを貴重な機会として、大里浩秋先生をはじめ専門家の皆さんから大いに勉強したいと思います。先ほど大里先生のご講演を拝聴しました。中日関係

を暗雲が覆った時代における留学生の派遣と受け入れの実証研究も含めて、大変貴重な研究内容だと思います。大里先生の生涯現役での素晴らしい研究姿勢に圧倒されます。

2020年1月に石井剛先生からシンポジウム参加のご要請を頂いたとき、ためらいがありました。まず、中国人日本留学史研究が私の専門分野ではないことがございます。また、私は長い間中国大使館に勤めていました。2006年に夫が駐マレーシア大使、2008年に駐韓国大使、2010年に駐日本大使に任命され、2019年5月まで勤務しました。私も大使夫人として、参事官として中国駐日本大使館で仕事をしていました。おそらく10年以上は専門分野の学術研究を継続できない状況でした。そこで、石井先生、宇野さんと相談しました結果、本日の話のテーマを「駒場での留学体験——東大は開かれている」と決めました。本日ご発表の専門家の皆さんの学術内容とはかなり異なりますので、ご了承ください。

本日の話は、主に2013年10月に石井洋二郎先生（当時の総合文化研究科長）、地域文化専攻の村田雄二郎教授のご要請で、駒場で行われた講演会の内容と、2014年4月に羽田正先生（当時の副学長）のご要請で、平成26年度東京大学入学式に出席した際の祝辞をベースに整理した内容です。入学式での祝辞は、羽田正先生が1字1句、目を通してくださり、表現上の細部まで直してくださいました。私の人生の中で、東京大学の入学式で祝辞を述べさせていただくことはこの上ない光栄なことでした。

1. 駒場キャンパスでの6年間（1989-1996年）

私は1989年の冬学期に、研究生として駒場の大学院総合文化研究科地域文化研究専攻に入り、1990年4月から1996年3月までに修士課程、博士課程を修了し、博士学位を取得しました。

20世紀、80年代に留学に来た中国人留学生といえ、小学校、中学校、高校時代のほとんどを文化大革命の中で過ごし、「知識が無用だ」と言われる時代に、まともな勉強ができず、高校卒業後、農村に「下放」された世代です。1977年に鄧小平の指示により大学の入試、試験制度が復活した際に、文化大革命の10年間待たされた高校卒業生が一斉に受験生となり、激烈な競争を経てようやく大学に入りました。その多くは、今度は「四つの近代

化」政策の後押しを受けて、海外に留学しました。私もそうした世代の一人です。

1990年4月に修士課程に入学しますと、自分より一回りも年下の正真正銘の東大生たちと一緒に勉強するようになりました。彼らの多くは日本の受験有名校の出身者で、難関の中学校、高校を経て東大に入り、さらに大学院にまで進んだエリートでした。

「なぜ本郷ではなく、駒場の総合文化研究科に入ったのか」とわたしが質問しますと、「今まで学んできたものは、1つの専門の学問の中だけでは処理できないことがいろいろあって、ここではそういうことを全部取りまとめて、何か新しいものを見つけられるのではないか」というような意味の話をしてくれまして、本当にうらやましくてたまりませんでした。と同時に、このように優れた仲間から学問的な刺激を受けることのできる東京大学の環境は、大変素晴らしいと強く感じました。さらに、文革の10年間で失ったものの多さを改めて痛感し、この10年間の知的空白に、急いでいろんなものを詰め込もうとして必死でした。学ぶことに対する貪欲さ、知的飢餓感は、おそらく同じ時期の中国人留学生がみな感じていたと思います。

ふり返ってみると、東京大学のリベラルな学問環境の中で6年間の留学生生活を過ごせたことは、自分にとってかけがえのない幸運であり、いままでの人生の中で最も知識を学んだ貴重な6年間であり、研究を進める上で大きな糧を得ることができました。東大生にとって何より貴重なのは、大学での学習、研究を通じて自分の中にある力の大きな可能性を確認できることであり、その後の人生の中で、いかなる困難に遭遇しても、自らの力を発揮できるのだという自信をもらえることです。

駒場は開かれている——「国際的」

6年間も留学生生活を過ごした駒場について感想を述べさせていただきます。一外国人留学生から見れば、本郷がアカデミックな雰囲気に溢れているのに対して、駒場は自由で開放的な雰囲気に満ちていました。駒場は開かれている——「国際的」、これは駒場の理念の1つとも言えるべきものだから、教育体系の特色として現れているだけでなく、キャンパスそのものも国際的な色彩が濃いです。キャンパスを歩いていますと声高に英語、フランス語、中国語、韓国語をしゃべり合う多彩な国籍の学生の集まりによく出会いまし



図1 歴史研究室での懇談、並木先生（右より2人目）以外は全員留学生
（駒場50年史編集委員会『駒場の50年1949-2000』東京大学出版会、2001年）

た。私が修士課程に入学した1990年には、総合文化研究科の大学院学生全体で外国人留学生・研究生の占める割合が常に40%にも達していました。

この写真【図1】は私の指導教官であった並木頼寿先生の研究室です。並木先生は、私と本日の発表者でいらっしゃる孫安石先生の指導教官でした。『駒場の50年』に並木先生が「大学院ゼミ参加者の過半を占める留学生たち」という文章を書き、当時の状況を紹介しました。

写真【図2】は、駒場の野球場の桜の下で並木頼寿先生、三谷博先生、職員の方、同期の留学生と一緒に撮った写真です。

私が卒業した1996年に、本郷も含めて東大には70以上の国々から2,000人近い外国人留学生在学し、「Another Tokyo University」と言われるほどでした。各国の留学生の間の共通語は日本語で、それは非常に面白い風景でした。ゼミでも食堂でも井の頭線の電車の中でも、留学生たちは各国なまりの日本語で交流をしていました。

駒場は「学問の総合化」への問題意識が強い——「総合的」

駒場の第2の特色は、「学問の総合化」への問題意識が強いことです。物事に対する多面的な理解と総合的な判断力および柔軟な応用能力を養成することが、大きな特色だと思います。しかし、全く違う社会環境に育った私た



図2 大学院入学式のあと、駒場野球場の桜の下で、並木頼寿（左前）、三谷博（中前）両先生および同級生や事務職員の方々と私（後左より2人目）
（駒場50年史編集委員会『駒場の50年 1949-2000』東京大学出版会、2001年）

ち留学生にとって、駒場の「総合的な」という意味を理解するにはかなりの時間がかかりました。修士課程に入ってようやく分かるようになったのは、「学問の総合化」は雑然たる知識の寄せ集めではなく、これに到達するため、現在確立されている、いずれかの専門科学の方法を体得し、それに基づき拡充発展させるというような意味ですね。断片的な知識しか持たない私たち留学生にとっては、「総合化」される前に、日本人学生が学部の段階でほぼ完成されていた専門科学のトレーニングを自ら受けなければなりません。より多くの苦労が要求されることです。おそらく同じ時期の中国人留学生がみなそう感じていたと思います。

駒場は「知識分野の相互関係を認識し統一する能力」を重視する——「学際的」

駒場の第3の特色は、上の2点と関連して、広い知識を求めながら、それに基づいていろいろな知識分野の相互関係を認識し、統一する能力が訓練されることです。学際的な研究ができることです。

個人的な経験で言えば、博士論文は、近代の中日関係を中国近代教育の確立に及んだ明治日本の影響という視点から捉えようと思いました。指導教官である中国近代史の並木頼寿先生、同じく中国近代史の村田雄二郎先生の指導を受けたほか、日本近代史の三谷博先生からは幕末維新史、平野健一郎先生

からは国際関係論、比較文学比較文化の平川祐弘先生からは比較の方法論などを学びました。

「近代教育史なら、本郷の教育学研究科の出身でなければ、博士論文を完成することはとても無理だ」と、当時言われたことがあります。しかし、駒場では教育学の問題をほかの学問分野から捉え、学際的なアプローチを探索することによって、ほかの分野との相互依存などを含む全体像を把握していくことが可能でした。駒場の多くの教官がそれぞれの高度な学問的な知識を背景としながら、自分の専門分野に閉じこもることなく、広い観点から学問の多様性を学生に感得させることに成功したと思います。

駒場では、先生とのコミュニケーションが取りやすい

私のような学位取得を目的とする留学生の場合、日本での滞在年数が長く、人生の中で最も感受性の豊かな時期を日本という外国で過ごすこととなります。この意味で、留学は知識の勉強だけでなく、個人の人格の形成にも深く関わることだと思います。この意味で言えば、駒場の先生たちは留学生との付き合いにいわゆる人格的な交わりを求めていると思います。

駒場は各分野で著名な学者をたくさん抱えています。話を聞いてみたい教授が多く、そうした教授陣は思ったよりフランクで、非常に受け込みやすいです。街の食堂で留学生などと顔を合わせると、気さくに声を掛け、食事をおごってくれたりしました。留学生は教授の自宅の電話番号を知っているのは、ごく普通のことです。私も何度も並木先生、平川先生、村田先生のお宅に食事に招かれたことがあります。

日本の大学の国際化は、実は教官たちの奥さんに裏で非常に支えられたものでした。お正月や祭日になりますと、和風の家庭料理を作って留学生たちを招待します。私のような既婚で、子供もいる留学生との間では、中日両国の子育ての違いなども話題にのぼります。先生たちのお宅で最も印象深かったのは、小さな本屋など顔負けの蔵書を持つことです。並木先生の蔵書は、真知子夫人、並木先生の親友で東大の田島俊雄先生、そして並木ゼミ生たちの努力によって、いま上海復旦大学に寄附され、並木文庫として利用されています。

大学院の教育現場では少人数のゼミの形式がほとんどでした。教授とのコミュニケーションが非常に取りやすく、むしろ塾の雰囲気さえありました。

教官たちは日本語能力の十分でない留学生の、30～40万字もある博論を1字1句直してくれました。並木先生には留学中の指導教官として、論文の構想、史料調査、分析など多方面にわたってご指導をいただき、歴史研究に関して強い刺激を受け、将来の研究についておぼろげながら展望を描くことができたのは、並木先生からのご指導が大きいと思います。

大里先生は並木先生と気が合う親友だと思っています。ともに勉強会を開き、留学生たちを指導し、公私ともに留学生たちの面倒を見ていました。この場をお借りして、お世話になった全ての中国人留学生を代表して、感謝するとともに、並木先生にもお偲び申し上げたいと思います。

2. 駒場で提出した修士論文、博士論文

次に、並木先生をはじめ、前述した多くの先生たちのご指導を頂いて、駒場で提出した修論と博論について、一言紹介させていただきます。中国が改革開放政策を進める最中の1980年代後半に、日本留学ブームの中で日本に赴いた多くの中国人留学生が、「近代化と留学交流の意義」に大きな関心を持ち、清朝末期＝明治期における留学生の往来、辛亥革命がアジアの近代化プロセスに対する思想的価値と意義をテーマにした研究を行いました。そして、清末中国の教育改革が日本教育の影響が大きく働いていたとして、中国人留学生の派遣、日本人教習の招聘などを巡って、豊富な研究成果が現れていました。私が平成3年に提出した修論のタイトルは「清末京師大学堂の創設と日本」であり、京師大学堂創設期に受けた明治日本教育の影響、特に服部宇之吉が7年間近い京師大学堂師範館での教育活動がある程度明らかにしました。今回の「歴史展」の資料を早く発見すれば、もっと良い論文が書けたのではないかと思います。本日、薩日娜先生のご発表「服部宇之吉と京師大学堂の留学生派遣事業」から勉強したいと思います。

博士論文『清末中国対日教育視察の研究』は、19世紀末から20世紀初頭にかけて、中国から日本に諸制度の視察に訪れた人々についての事跡と記録に基づき、その視察成果が、科挙を廃止、近代的学制の新設、「教育宗旨」の立案、学制の地方浸透及び実施に至った経緯を明らかにしました。この博論は1998年に日本の汲古書院から出版されました。

その後の研究として、清末のみならず中華民国の時期も含んで、中国にお

ける「国民国家」の建設ないし「国民形成」のための教育改革とは、いかなるものであったかを課題として研究しました。「国民教育」を目指しての学制の地方浸透、そして清朝末期、民国初期に公布、実施された地方教育関連法案に見る明治日本からの影響、特に日本の中央視学制度と地方視学制度を中心に研究しました（汪婉「直隸省における「査学」の設置と巡視活動（上）、（下）」、『中国研究月報』2008年5、6月号）、汪婉「晚清直隸の査学和視学制度——兼与日本比较」、《近代史研究》2010年4月号）。

3. 問題提起

最後に、自分の研究とも関連して、中国人日本留学史研究に関して一言感想を述べさせていただきたいと思います。このたびの展示資料は明治32年（1899）から昭和10年（1935）前後までですが、中日関係の歴史的背景といえは、激動の時代でした。特に一高が駒場に移転してきた1935年前後、先ほどこれについての大里先生のご研究にも触れましたが、中日関係を暗雲が覆った時代でした。中国人留学生の派遣と受け入れが、近代以来の100年以上の歴史の中で、時代ごとにその思惑や意味が大きく異なることをとても強く感じました。

私が留学した頃の東大はいわゆる「象牙の塔」であり、学術研究は政治や現実社会と距離を置くべきだと常に強調されていたことが、とても印象的でした。学問研究の意味を考えるようになったきっかけが2つあります。1つは、先ほど申し上げました2013年10月、駒場総合文化研究科のご要請で講演したときです。当時私が中国大使館に勤めていたこともあって、テーマは「中日関係を見つめて——研究と実践の両面から」でした。石井洋二郎先生の次のごあいさつは今でも鮮烈に覚えております。「現在の両国の政治的関係は、1972年の国交回復以来、最悪の状況にあると言われ、その余波は経済や文化交流の方面にも及びかねない緊迫した状況にあります。しかし、こうした状況の中でこそ両国の大学は本来の使命である教育と研究の役割を自覚して、両国のよりよい関係を目指して、相互訪問や学生交換を含めた幅広い学術交流を推進し、相互の信頼関係と相互理解を促進してゆく責務と使命があると思います」。

あれから、外交の第一線で働きながら、20年も続けてきた学問研究の意

味をつねに考え、責務と使命をもって日本各地の大学で講演を行い、海外留学を通じて異なった価値観、生活スタイルをもった人々との触れ合いの重要性を語りました。さらに毎年日本各地の大学から学生を招聘して中国を訪問させ、北京大学で2017年、2018年と2年連続で「中日大学生千人交流大会」を開催することに力を入れました。

もう1つのきっかけは、羽田正先生のご推薦で、東大のグローバル・アドバイザー・ボード委員を務めたことです。欧米の大学の委員たちの「東アジアの留学生が欧米の大学にいかに関わり込むか」に関する盛んな議論に刺激を受けながらも、中日国交回復から、半世紀の間に累計120万人ぐらいの中国人留学生が日本の各大学で学び、一体日本の大学にどれくらい寄り添ったのか、そして留学が両国の青年の相互理解と相互信頼関係にどんな影響を与えたかを考えるようになりました。

五神真先生が総長に就任したときに、「東京大学ビジョン2020」を提出し、その主なアクションプランである「研究、教育、社会連携、運営」には、いずれも国際性が求められていました。

総長は在任中に2回も中国大使館にお越しいただき、両国の留学生の交流を含めて、大使と懇談しました。2019年に総長は「社会変革を駆動する大学へ」という目標を提出しました。東京大学は戦後、中国をはじめ、特にアジアの国々のために留学生の育成に大きく貢献してきました。今後、東大が「社会変革を駆動する大学」を目指すならば、世界人口の3分の2を占め、最も潜在力のあるアジアとどう向き合っていくかを、日本社会に提示することが重要ではないかと思います。

第Ⅱ部

【パネル発表論文】

「一高特設予科・高等科及び当時の中国人留学生について」

韓立冬

田村 隆

薩日娜

孫安石

高原智史

岡本拓司

一高の中国人留学生教育の制度的変遷

韓立冬

1896年、清政府より派遣された13名の留学生の東京高等師範学校入学を皮切りに、中国人が日本に留学する歴史の幕は開かれた。その後、日本への留学生は後を絶たず、1906年頃のピーク時は1万人をも超え、近代中国人日本留学の全盛期をなしたと言われるが、その時代の留学生の多数は速成生と普通科生によって占められ、高等専門学校や大学などの高等教育機関の門戸が正式に中国人留学生に開かれるようになったのは「五校特約」が締結されてからのことである。「五校特約」は1907年に結ばれた日中政府間のはじめの教育委託協議であり、この契約により、1908年から15年間にわたり、清政府は毎年第一高等学校、東京高等工業学校、東京高等師範学校、千葉医学専門学校と山口高等商業学校に合計165名の官費留学生を派遣することになった。この五校はいずれも文部省直轄の官立高等教育機関であったが、そのうち、第一高等学校（以下、一高と略称）はとくに注目に値する。というのは、一高では1908年に「五校特約」に準じて特設予科が設立され、年間50名程度の中国人留学生がこの特設予科に入学、一年間の予備教育を経て、全国の第一～第八官立高等学校に配分され、三年間の高等学校教育を受けて、帝国大学に進むようになったからである。こうして、高等学校から帝国大学へという日本の正統的な学歴エリートコースは、中国人留学生にも門戸が開かれるようになった。1922年に至り、この「五校特約」が満期解約されたが、一高特設予科はそのまま存続され、1923年に発足した「対支

文化事業」の傘下でさらに整備されていくことになった。さらに20年代末期になると、中国人留学生の学歴が大きく変化し、従来の高等専門学校志望者に代わって、大学ないし大学院レベルの教育機関に入学しようとする者が留学生の主流となった。そのため、高等学校の予備教育機関としての一高特設予科は特設高等科に改編され、帝国大学直結の大学予備教育機関になった。それによって、留学生のための大学直結の進学ルートが開かれた。

本論文はこのような一高における中国人留学生のための教育機関の成立、展開、改編のプロセスを明らかにしようとする。

1. 「五校特約」期の一高特設予科

特設予科制度の確立

一高では特設予科が設置され、制度的に中国人留学生を受け入れるようになる以前において、すでに中国人留学生の教育を行っていた。1899年9月外務省の依頼で浙江省巡撫より派遣された8名の留学生を受け入れたのは中国人留学生による一高入学の嚆矢であった¹。1903年12月、清朝政府は京師大学堂の学生31名を選抜して、日本に留学させた。外務と文部両省は協議を経て、これら31名を一高に入学させ、留学中の教授に関する一切を一高に委託した。このように、「五校特約」が締結されるまでに、一高はこれら浙江省や京師大学堂より派遣された留学生などを受け入れたが、制度的なものではなく、あくまで特例として入学を許可したもので、入学後も成績評価などで日本人学生と区別した特別措置が取られていた。そうした留学生は一高の課程終了後、多くが選科生として帝国大学に入学した。

一高が制度的に中国人留学生を受け入れるのは、「五校特約」締結以後のことである。「五校特約」該当校になった後、一高は1908年に特設予科を設置し、留学生を対象として、高等学校本科に入るための日本語と中学校各学科の教授を行った。この年は志願者210名の中から60名を入学させた。これらの合格者は、いずれも少なくとも二年間日本に滞在し、弘文学院や東京同文書院、大阪高等予備学校などの「諸種ノ学校ニ学ヒ普通文ニ於テハ素養アルモノ」であった²。特設予科が設立された当初は、教師は主に嘱託教員

¹ 『第一高等学校六十年史』第一高等学校、1939年3月、481頁。

であり、その都合もあり、授業の多くは午後に特別に行われていた。特設予科の教育に関しては、特設予科規程を設けずに、大抵、次のとおりに施行された³。

一、毎年二月清国公使館留学生監督署ニ於テ本邦在留ノ学生ニ限り志願者ヲ募集シ其人名履歴書並ニ写真ヲ本校ニ移牒ス

二、本校ニ於テハ毎年三月初メ試験期日ヲ定メ、左（下－筆者注）ノ学科ニ就キ選抜試験ヲ施行ス

日本語 作文 書取 会話 読方

外国語（英語）和文英訳 英文和訳

数学 算数 代数 幾何 但二部三部志望者ニハ三角（初歩）

地理、歴史 一部志望者ニ限ル

物理、化学 二部三部志望者ニ限ル

三、試験成績順ニ依リ一部二部三部ヲ通シテ約五十名ヲ入学セシム

四、入学ヲ許可シタルモノハ、一部志望者ヲ一組トシ、二部三部志望者ヲ一組トシテ（予科授業中ニ限ル）、毎日（主トシテ）午後本校生徒ノ授業済ノ上特別ニ授業ヲ施行ス

五、学期ハ毎年4月～7月ヲ第一学期トシ、9月～12月ヲ第二学期トシ、翌年の1月～3月ヲ第三学期トスル。

一高特設予科の入学をめぐる競争は非常に激しいものであった。前述したとおり、「五校特約」成立後、特約五校以外の官立高等教育機関に合格しても農・工・格致・医学の四つの専攻でなければ官費を獲得できなくなり、その結果官費獲得の保証がついている特約五校に対して私費留学生の応募が殺到したからである。なかでも一高は、唯一の帝国大学へ進学するための正統的な門戸であるため、競争が最も厳しかった。例えば、1909年度の一高特設予科入学試験の志願者428名のうち、官費留学生94人、公費3人、そのほかの331名はすべて官費獲得を目指す私費留学生であった⁴。

² 同上、506頁。

³ 同上、503頁。

表1 一高特設予科各年度志願者と入学者統計 (1908~22年)

年度	1908	1909	1910	1911	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922
志願者	243	428	378	302	123	337	325	255	336	216	542	488	418	339
合格者	60	52	51	50	47	45	50	50	50	49	50	50	50	50
合格率(%)	24.7	12.1	13.5	16.6	38.2	13.4	15.4	19.6	14.9	22.7	9.2	10.2	12.0	14.7

注：各年度の文部省年報より。なお、1914、1915年度は文部省年報に記録がないため、『日華学報』6号、1928年11月をもって補填した。

文部省は1909年3月各高等学校長会議を開き、一高特設予科修了者を一高を含む各高等学校へ配分し、そこで日本人学生と同学させるという方針を打ち出した⁵。1915年に特設予科を修了した郭沫若は、当時の配分方法は、特設予科修了試験に合格したものは総合成績の順位で第一～第八高等学校に配属されることになっており、つまり、一位は一高、二位は二高、八位は八高で、第九位からまた一高、十位は二高というように終始循環するものであったという⁶。

一高特設予科修了者は一高を含む各高等学校に配分された後、日本人学生と同じ学級で勉強していたのである。日本人学生と同じクラスの中で同じ教育を受けている中国人留学生が、勉学上特別な困難に直面していた。一高本科に配分された留学生の成績をみると、1919年一高本科在籍の留学生は三学年合わせて21名であったが、そのうち、落第が一回の者が4名、二回落第のため除名されたものが3名であった⁷。留学生は日本人学生と共学し、教育、試験や進級などにおいてすべて日本人学生と同じような取扱いを受けていたため、日本のエリートを養成する高等学校での勉強生活は、留学生にとって、けっして楽なものではなかった。

⁴ 「調査報告 第一高等学校報考学生姓名籍貫年齢学科表」清国遊学日本学生監督処『官報』第27期、1909年2月。

⁵ 前掲『第一高等学校六十年史』、508頁。

⁶ 郭沫若著・大高順雄・武継平等訳『桜花書簡—中国人留学生が見た大正時代』東京図書出版会、2005年6月。武継平『異文化のなかの郭沫若—日本留学の時代』九州大学出版会、2002年12月、20頁。

⁷ 「民国八年五校在学学生名冊」『中国留日学生監督処文献』1919年4月～9月。

表2 一高特設予科修了生配当先年度別統計

	計	一高	二高	三高	四高	五高	六高	七高	八高	札	東北	松山	不詳
1909年	44	6	6	5	5	5	5	5	5	2			
1910年	47	8	8	5	5	4	5	5	5		2		
1911年	47	6	7	7	6	6	5	5	5				
1912年	13	2	2	2	2	2	1	1	1				
1913年	22	4	3	2	1	3	2	3	2				2
1914年	35	5	4	4	5	5	4	4	4				
1915年	48	7	5	7	6	6	6	5	6				
1916年	50	8	7	8	1	7	6	6	7				
1917年	41	6	5	5	5	5	5	5	5				
1918年	45	7	4	6	5	6	6	5	6				
1919年	48	6	5	7	5	5	6	5	6			3	
1920年	53	6	7	7	2	3	14	6	5			2	1
1921年	50	8	4	5	3	6	7	6	10			1	
1922年	50	10	3	3		10	8	4	7			4	1
1923年	50	7	5	5		5	14	3	10				1

出典：『第一高等学校一覧』（1936～37年度）より作成。「札」は札幌農科大学予科を、「東北」は東北農科大学予科を、「松山」は、松山高等学校を示す。

特設予科出身者の帝国大学入学

留学生にとっては、高等学校はあくまで通過点に過ぎず、最終目標は帝国大学であった。つまり、特設予科修了者の帝国大学進学問題こそこの留学生のためのエリートコースの成立可否にかかわる鍵であった。

1908年11月、文部省は各高等学校へ配分された一高特設予科出身者の高等学校卒業後の取扱い方をめぐって正式に東京・京都両帝国大学総長に照会し、「本邦人志望者ヲ収容シテ尚缺員アル場合ニ限り本科学生トシテ入学ヲ許可セラレ候上其卒業者ハ他ノ学生ト同様学士ノ称号ヲ許可」するよう求めた⁸。東京帝大の全ての分科大学、京都帝大の法科大学以外の各分科大学は文部省の希望に応じた。定員に欠員があるのを前提としての受け入れという厳しい条件が付されていたが、ここにいたって、両帝国大学入学の門戸は原則上中国人留学生のために開かれることになった。この時期において、帝国

⁸ 前掲『第一高等学校六十年史』、507頁。

大学の収容能力は高等学校卒業生総数を超えるものであり、留学生にとって、一高特設予科の入学試験が留学生の学歴エリートコースの中の唯一の選抜試験であり、その競争試験をくぐりぬければ、特別な事例を除き、帝国大学を卒業できたのである。この時期において、各帝大の中で、特設予科出身者の主要な受け入れ先は東京・京都帝大で、その次は九州帝大であり、東北帝大に進学した者はわずかであった。

表3 特設予科出身者の大学入学先統計

特設予科 修了年度	特設予科 修了人数	特設予科修了生のうちの帝大卒業人数				
		合計	東京帝大	京都帝大	九州帝大	東北帝大
1909	44	20	16	1	2	1
1910	47	20	16		3	1
1911	47	20	14	3	3	
1912	13	10	4	5	1	
1913	22	10	4	5	1	
1914	35	12	15	6	1	
1915	48	37	11	17	8	1
1916	50	33	18	7	5	3
1917	41	31	14	12	5	
1918	45	36	18	14	2	2
1919	48	29	12	12	4	1
1920	53	30	11	14	4	1
1921	50	30	14	11	4	1
1922	50	30	10	14	5	1
1923	50	27	10	10	6	1

注：第一高等学校編『第一高等学校一覽』及び興亜院『日本留学中華民
国人名調』（1940年10月）より作成。『第一高等学校一覽』の特設予
科修了者数に関する統計の中では、東北地方の出身者も含んでいる
が、『日本留学中華民人名調』の帝大卒業者に関する統計には東北
地方の出身者が含まれていないため、「特設予科修了生のうちの帝國
大学卒業人数」が実際上上表より多いものと思われる。

2. 「対支文化事業」下の一高特設予科

一高特設予科の不振

「五校特約」が満期解約されたのは1922年であり、その後、特設予科制度は1923年に発足した、戦前日本最大の対外教育文化事業である「対支文化事業」の傘下に組み込まれた。「対支文化事業」は、日本政府が中国人の反日感情を緩和するため、アメリカが義和団事件賠償金を中国人留学生教育事業に利用することによって中国におけるアメリカの勢力を増大させることに成功したのに倣い中国に対して展開した、医療・衛生・教育及び学術研究などの文化事業である。特設予科の拡充と改善を含む留学生の予備教育態勢の整備も「対支文化事業」の重要な一環として進められていた。こうして一高特設予科もこの「対支文化事業」に組み込まれた。1925年8月には、一高特設予科規程が正式に制定され、その内容は以下のようなものである。

第一高等学校特設予科規程

- 第一条 本校ニ支那留学生ノ為ニ特設予科ヲ置ク
- 第二条 特設予科ハ高等学校ノ高等科ニ入学セムト欲スル者ニ予備教育ヲ授クルヲ以テ目的トス
- 第三条 特設予科生トシテ毎年収容スヘキ人員ハ五十名以内トス
- 第四条 特設予科ノ修業年限ハ一学年トス
- 第五条 特設予科ノ学科目及毎週教授時数ハ左ノ如シ
- | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 修身 | 一時 | 日語 | 六時 | 英語 | 六時 | 歴史 | 二時 |
| 数学 | 六時 | | | | | | |
| 物理 | 二時 | 化学 | 二時 | 博物 | 二時 | 図画 | 二時 |
| 体操 | 三時 | | | | | | |
- 第六条 毎年一回本邦所在支那公使館ノ紹介セル入学志願者ニ就キ入学試験及身体検査ヲ行ヒ合格者ニ限り入学ヲ許可ス
- 第七条 入学試験ハ中学校第四学年修了ノ程度ニ抛リ左ノ学科目ノ中ニ就キテ之ヲ行フ
- | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 日語 | 英語 | 数学 | 歴史 | 地理 | 物理 | 化学 |
|----|----|----|----|----|----|----|

(以下略)⁹

表4 一高特設予科志願者と入学者統計表 (1914~31年)

年度	1920年	1921年	1922年	1923年	1924年	1925年
志願者	488	418	339	116	69	95
入学者	50	50	50	23	18	17
年度	1926年	1927年	1928年	1929年	1930年	1931年
志願者	91	145	134	171	173	111
入学者	17	15	24	18	27	29

注：「在本邦予備教育機関ニ於ケル各年度取容率」『在本邦留学生予備教育関係雑件 特設予科関係』第4巻。

「対支文化事業」下に入った1923年度以後、志願者及び入学者の数はそれぞれ著しく減少している。その理由として、対日感情の悪化や1923年関東大震災の影響が勿論考えられるが、最大の要因は「五校特約」の解約により一高入学が必ずしも官費支給を約束するものではなくなったことにあるのではないかと思われる。しかし、減少したとは言っても、志願者は常に定員50名の2~3倍であり、必ずしも少数とはいえない。

一高特設予科では、志願者の多数に比べて毎年の実際入学者は20名前後と少なかった。定員に満たない状態が続いた原因は、成績不良な留学生を無理に収容しないという厳選方針を終始堅持していたからだと言う¹⁰。また、入学試験において、何よりも日本語能力が最も重要視され、主要な判断基準とされていたのも特設予科入学試験の合格者が少なかった原因であった。それに対して、留学生たちは駐日留学生監督処を通じて、特設予科の入学試験の段階においては日本語能力偏重をやめ、基礎学科などを重視すべきではないかと文部省・一高当局と交渉を試みた¹¹。一高側は「日本語ヲ度外視セル特別取扱イ今日マテモ又今後ニ於テモ本校ノナサル所ナリ」¹²と断った。

⁹ 前掲『第一高等学校六十年史』、518頁。

¹⁰ 1929年第30回留学生茶話会。駒場博物館蔵『留学生書類』1929年度。

¹¹ 永井外務次官より粟屋文部次官あて「第一高等学校特設予科ノ入学試験ニ関スル件」1932年2月5日。『在本邦留学生予備教育関係雑件 特設予科関係』第1巻。

¹² 「昭和六年度特設予科主任者会議」『在本邦留学生予備教育関係雑件 特設予科関係』第4巻。

また、特設予科留学生の成績は年々低下していった。1923年10月特設予科生24名のうち、成績優等のもの7名、中等のもの5名、劣等のもの12名であった¹³。1928年3月の特設予科会議において、一高側代表者は、「彼等ハ入学後極メテ真面目ニ勉強シ居レリ而シ学力ハ揃ハス上位ノ二、三名ハ日本ノ中学出身ナルカ故ニ優秀ノ成績ヲ示セリ、而シ其ノ他ハ勉強ストモ劣レリ」と、留学生の学力低下の問題を指摘した¹⁴。

高等学校卒業難と大学入学難

この時期も「五校特約」期と同様に、一高特設予科出身の留学生が各高等学校に配分された後、成績不良で落第あるいは除籍されるという現象が少なくならず存在した。それは、各高等学校が留学生に対して「特別ノ取扱ヲナサヌ本邦学生ト全ク同一ノ取扱ヲナシ来レリ之レハ当初ヨリ其ノ方針ヲ以テ教育シ」¹⁵、「留学生デアルカラトテ何等手心ヲ用ヒス出来ヌ人ハ本邦ノ学生ト同様ニ落第モサセル」¹⁶という方針で留学生を取扱っていたことによるものだと思われる。

一高特設予科出身者の高等学校における学力低下の問題よりさらに深刻なのは、彼らの大学入学問題であった。前述した通り、「五校特約」期においては、特設予科出身者の三分の二以上の者が高等学校を経て帝国大学に入学し、卒業することができたが、この時期になると、特設予科出身者の帝国大学入学が従来より厳しくなった。それはこの時期、志願者の減少により特設予科に入った留学生の質が「五校特約」期より劣っていることによるものではあったが、日本の教育事情の変化とも深く関係していた。というのは、1918年新高等学校令の公布により、従来の官立高等学校のほか、公私立の高等学校も新しく設置され、この高等学校の拡充・増設により高等学校卒業生が激増したからである。日本人学生の高等学校卒業生の間でも帝国大学入学をめぐる競争は酷烈となってきたのである。そうした環境の下、特設予科

¹³ 前掲『第一高等学校六十年史』、517頁。

¹⁴ 「昭和二年度特設予科主任者会議」『在本邦留学生予備教育関係雑件 特設予科関係』第4巻。

¹⁵ 1929年30回留学生茶話会。『留学生書類』1929年度。

¹⁶ 1927年29回留学生茶話会。『留学生書類』1927年度。

表5 一高特設予科修了者進学状況統計（1931年現在）

一高特設予科			高等学校			大学						
年	入学	修了	入学	卒業	1931年現在在学	東京 帝大	京都 帝大	東北 帝大	九州 帝大	公立 大学	私立 大学	計
1924	16	14	14	9	-		4	3	1	1		9
1925	15	14	14	13	-	5	5	1		1	1	13
1926	17	16	16	10	2	2	5		1			8
1927	15	11	11	5	3		2		2			4
1928	23	22	22	-	15							
1929	18	16	16	-	14							
1930	27	27	27	-	27							
合計	131	120	120	37	61	7	16	4	4	2	1	34

出典：「特設予科在学中ノ留学生進学状況調査」1931年6月。『在本邦留学生予備教育関係雑件特設予科関係』第1巻。

出身の留学生の帝大入学も難しくなってきたのである。

特設予科出身者の高等学校卒業難と大学進学難の問題を解決するため、1931年6月「対支文化事業」を主導した外務省文化事業部は留学生を日本人学生と同等に取扱う高等学校や帝国大学などの教育現場の方針を否定し、留学生に対しては、学習の方法やその評価において特別扱いをなすべきだ、という方針を出した¹⁷。それを可能にするため、専ら留学生を収容する教育機関を設立することが必要であることを強調するようになる。それは、翌1932年に一高特設予科を廃止し、中国人留学生のために三年制の高等学校高等科＝「特設高等科」を設立し、日本人学生と分離して授業を行うという留学生予備教育改革の方向性を示唆するものであった。

3. 「対支文化事業」下の一高特設高等科

特設予科から特設高等科へ

1920年代末、中国における六・三・三制の定着と新たな留学規程の発布により、留日学生の学歴は大きく変化し、従来旧制中学校卒業生や新制初級

¹⁷ 文化事業部第一課長より文化事業部長あて「高等学校卒業生ノ大学入学難」1931年6月11日、『在本邦留学生関係雑件』第7巻。

中学校卒業生を中心としていたが、新制高級中学校卒業生ないしそれ以上の者が主流となった、つまり従来の高等専門学校志望者に代わって、大学ないし大学院レベルの教育機関に入学しようとする者が留学生の主流となった。このような中国人留学生学歴の変化は、中国人留学生が日本に求めるのが従来のような高等専門学校レベルの教育ではなく、大学教育になったことを意味していた。

しかし、当時中国人留学生の受け入れに関しては、官立高等専門学校レベルでの受け入れ態勢は特設予科の整備によりある程度整えられてきたものの、官立大学レベルでの留学生受け入れ態勢はほとんど未整備の状態であった。中国人留学生が日本で官立の大学教育を受けようとする場合、普通はまず東亜高等予備学校などで日本語を学習し、さらに特設予科を経て高等専門学校に入学し、さらに大学に進学するというルートを辿らなければならないので、留学生が大学に進学するまで時間がかかりすぎるのである。中国側は日本にその対応を求め、留学生の予備教育をも従来の高等専門学校のための予備教育から大学予備教育へと改編するよう要望するのである。

1931年11月10日、文部省は「特設予科新設ニ関スル経費」を作り、同月16日「特設予科ニ関スル協議会」が一高において開かれ、外務省、文部省、一高の関係者が特設大学予科の官制、名称、修業年限、予算、修了者の進路などについて協議した。同年12月4日、文部省は最終的な特設大学予科案をまとめ、外務省に予算を申請した。文部省は特設大学予科を新設する理由について、こう述べていた。

日本の留学生受け入れにおける制度上の問題により、留日学生が帝国大学を卒業するまでに欧米留学以上の年数を必要とする。そうした日本の留学生受け入れ制度の不備のため、日本へ留学する者は欧米への留学生より著しく不利な立場に立たされる。留学生は日本より欧米へ赴くようになり、それは日本経済を含む日本の利益に不利である。そのため、誘致手段として、一高に留学生のための三年制の高等学校を創設することにより、中国人留学生の大学予備教育の教育内容を改善し、修業年限を短縮するというものであった¹⁸。

¹⁸「特設予科ニ関スル経費」（文部省第四図案）1931年12月、『在本邦留学生関係雑件特設予科関係』第2巻。

具体的な「特設予科設置要綱」も作成された。それによると、特設大学予科の名称を「特設高等科」とし、その目的は中国人留学生に対し高等学校高等科の程度による高等普通教育を授けることと規定され、修業年限は三年とし、生徒定員は文科90名、理科90名で、計180名とする案であった。同年12月8日外務省は「中国留学生ノ為ニ三年制高等学校設立方文部省ニ委嘱方ニ関スル件高裁案」をまとめ、文部省案通りに実施することが可決された。これにより、1932年4月をもって一高一年制の特設予科が正式に廃止され、それにかわって高等学校高等科に相当する三年制特設高等科が設置されることとなった。同年6月、特設予科在学生在が考査を経て、特設高等科第一学年に編入されることになった。従来制度では、一高特設予科で一年間の高等学校予備教育を受けた者はそれぞれ第一～第八の高等学校高等科に配分され、そこで三年間の高等学校教育を受けた後、大学に進学するシステムであったが、新制度では、一高特設高等科で三年間の大学予備教育を受けた者が直接大学に進学することとなった。

特設高等科と従来の特設予科制度との相違点は、主に次の三点であった。

- ①高等学校の教育年限は四年（特設予科一年＋高等学校高等科三年）から三年（特設高等科）に、一年間短縮されたこと。
- ②これまで一高特設予科を修了した留学生は、全国八校の官立高等学校へ配分され、そこで高等学校教育を受けてきたが、以後は一高で一括してこれを担当することになったこと。
- ③これまで留学生は日本人学生と共学して教育を受けたが、以後は独立したクラス＝特設高等科で高等学校教育を受けるようになったこと。

特設予科から特設高等科への改編は、留学生に特別な配慮を図るための留学生向けの教育機関の創設を意味し、中国人留学生の学歴構成の変化に応じるための大学直結の予備教育の確立であった。

特設高等科の実態

特設高等科が設立されたのはあたかも1932年であり、盧溝橋事件や上海事変の勃発により、特設高等科の募集もうまく行くはずなかったが、1933年度から留学生は逐次増加した。志願者と入学者に関する文理科別統計は下

表6 特設高等科入学統計（1932～43年）

年度		32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
志願者	文科	9	13	21	46	32	38	12	15	24	38	29	34
	理科	19	25	38	71	81	83	14	25	33	55	55	61
	計	28	38	59	117	113	121	26	40	57	93	84	95
入学者	文科	8	10	10	13	10	7	3	10	10	14	10	14
	理科	16	16	20	27	24	13	9	8	17	24	20	23
	計	24	26	30	40	34	20	12	18	27	38	30	37

出典：国立公文書館蔵『認定指定雑載』と、『文部省年報』、『在本邦留学生予備教育関係雑件 特設予科関係』第1、3巻。

表の通りであるが、志願者が最も多かった1935～37年であっても、入学者数は収容定員を埋められなかった。それは入学試験において厳選方針が貫かれた結果であると思われる。

1932年、発足当時の特設高等科の教育内容を、日本人学生を教育する普通の高等学校高等科と比較してみると、両者の違いは、特設高等科において、①第二外国語が置かれなかったこと、②日本語授業の時間数は日本人学生の二倍であること、③漢文の授業がなかったこと、という三点であった¹⁹。しかし、1933年3月になると、特設高等科も普通の高等科と同じように、第二外国語が選択科目として毎週4時間加わった²⁰。

1937年7月、特設高等科のカリキュラムは再び改正され、文理科とも学科目欄の「国語」を「国語及漢文」とし、文科では第一学年2時間、第二学年1時間、第三学年1時間、理科では第一学年2時間で漢文を教授するようになった²¹。以上の通り、特設高等科のカリキュラムは教育現場での試行に従い、たえず改正された。その結果、日本語の時間数のみがやや多いほか、日本人学生とほぼ同様の課程設置になった。

¹⁹ 前掲『第一高等学校六十年史』、524頁、「特設予科新設ニ関スル経費」1931年11月10日、『在本邦留学生予備教育関係雑件 特設予科関係』第2巻。

²⁰ 文理科ともに英語を第一外国語とし、ドイツ語を第二外国語とする者が甲類とされ、ドイツ語を第一外国語とし、英語を第二外国語とする者が乙類とされた。1937年7月、文科乙類は、それまでに希望者がなく、今後も其の必要性が認められないため、廃止された。前掲『第一高等学校六十年史』、535頁。

²¹ 同上、535頁。

特設高等科の教授陣は相当優秀なものであった。1934年の調査によれば、特設高等科の担任教授や講師は合わせて47名で、そのうち、教授31名、助教授1名、講師13名、外国人教師2名であった。この教授陣には青木正や、亀井高孝、三谷隆正、関泰祐、竹田復、竹山道雄、北岡馨、片山敏彦、荒又秀夫、斎藤阿具などの一高名物教授も入っていた²²。教員構成を見る限り、一高は最も優秀な教師に特設高等科の留学生教育を担当させ、留学生を日本人学生と差別なく教育することを学校側の理想としていたと言えよう。また、教科書においても、一高は中国人留学生に日本人学生と区別せず、同じような教科書を使用させていた。

特設高等科の留学生の成績を見ると、それは必ずしも芳しいものではなかった。成績は甲、乙、丙で評価されたが、ほとんどの生徒は乙等であった。

1936年に至って、学校側は「中国からの留学生は日本語の力が不十分で、満洲国出身者は外国語が日本語とされた結果、英語を知らず、またいずれも理科系学科の基礎を欠いていた」²³として、直接特設高等科に入学するには日本語や学力がやや不足している留学生を30名収容し、特設高等科への入学に先立ち、さらに附属予科で一年間の予備教育を行い、基礎学力を養成させようとする計画を立てた。1937年7月に附属予科が正式に発足した。附

表7 1935年度特設高等科各学年成績統計

		総人数	甲等	乙等	丙等	試験欠席
文科	第一学年	15		12	3	
	第二学年	8	1	6		1
	第三学年	10	1	9		
理科	第一学年	29		24	3	2
	第二学年	23	1	12	9	1
	第三学年	15	2	11	1	1

出典：外交史料館蔵『在本邦留学生予備教育関係雑件 特設予科関係』第4巻。

注：甲等は80点以上、乙等は60点以上、丙等は50点以上である。

²² 国立公文書館蔵『認定指定雑載』。

²³ 前掲『向陵誌・駒場篇』一高同窓会、1984年、47頁。

属予科の募集では、単独で試験が行われず、毎年3月の特設高等科入学試験が準用された。試験の結果によって、特設高等科課程を履修するには学力がやや不足する者を附属予科に収容し、翌年無試験で特設高等科に入れる、という方法であった²⁴。

特設高等科卒業者の大学進学

1932年、特設高等科の卒業生の大学入学に関して、1934年12月文部省令第11号が公布された。それにより一高特設高等科卒業者は大学入学にあたって、高等学校高等科卒業者と見なされることになった²⁵。しかし、それはあくまで建前上の原則で、各帝大や各々の学部にはそれぞれ独自の対応が見られた

東京帝大では、各学部の態度は必ずしも一致しなかった。特設高等科卒業生を定員内として取扱うか、特別優遇措置を与えるのは定員割れの文学部と農学部だけであった。一方、京都帝大は、東京帝大とは異なり、特設高等科卒業生の受け入れに積極的な姿勢を示し、無試験で全員収容する旨をたびたび

表8 1935年度特設高等科第一回卒業生大学進出統計

大学	学部	学科	文科卒業生	理科卒業生
京都帝大	法学部	法律学科	2	
	経済学部	経済学科	2	
	文学部	言語学科	1	
	工学部	機械工学科		1
	理学部	物理学科		1
	医学部	医学科		2
東北帝大	法学部	法律学科		1
九州帝大	工学部	機械工学科		1
		造船学科		1
		土木工学科		1

出典：「昭和十年度特設予科主任者会議」『在本邦留学生予備教育関係雑件 特設予科関係』第4巻。

²⁴ 前掲『認定指定雑載』。

²⁵ 前掲『第一高等学校六十年史』、532頁。

び外務省に表明していた²⁶。

1936年度の25名の特設高等科卒業生の入学先は、東京帝大文学部、医学部、農学部に進学したのはそれぞれ1名で、法学部と理学部を志願した2名は入学できなかったが、残りの20名は全員京都帝大に進学した²⁷。1938年度の卒業生の進路を見ても、2名が東京帝大農学部獣医学科に進学したのを除いて、他はほとんどすべて京都帝大に入った²⁸。

終わりに

本論文は一高特設予科制度の成立と展開及びその変遷の過程を明らかにした。特設予科制度は「五校特約」の締結とともに成立した。1905～06年頃をピークとした中国人日本留学の全盛期には、留学生教育は私立の留学生特設教育機関が行った速成教育と普通科教育を中心としていたが、1907年にいたり、清朝政府はより多くの留学生を高等専門学校などの日本の高等教育機関で日本人学生と同様に高等教育を受けさせるため、文部省との間で「五校特約」を結んだ。それにもなつて、一高、東京高工、山口高商などの特約実施校にそれぞれ本科に入るための準備教育機関としての特設予科が設置されることとなった。これらの高等専門学校に専ら中国人留学生のための特設予科が設置され、そこを修了した留学生が無試験で本科に配分されることによって、中国人留学生は日本の高等専門学校に入学し、日本人学生と共学することが保障されるようになった。大正期に入り、特設予科制度は日本の国家レベルの対外文化事業である「対支文化事業」によって再整備された。

20年代末期に至り、中国の六・三・三制の定着と新たな「留学生規程」の発布の影響により、中国人留学生の学歴が大きく変わり、高等専門学校を目指す留学生は減少する一方、大学教育を志す留学生が多くなった。こうし

²⁶ 文化事業部岡田部長より京都帝大総長松井元興あて「第一高等学校特設高等学校卒業生収容ニ関スル件」1935年4月30日。『在本邦留学生予備教育関係雑件 特設予科関係』第2巻。

²⁷ 第一高等学校長森卷吉より外務省文化事業部長あて、1936年5月27日。『在本邦留学生予備教育関係雑件 特設予科関係』第2巻。

²⁸ 「帝国大学・官立大学第一次入学志望調査」『帝国大学新聞』第559号、1935年1月21日。

た状勢のもと、中国側は日本に対して大学の門戸を開放すると同時に、従来の高等専門学校入学のための特設予科を廃止し、大学直結の予備教育機関を創設するよう求めた。日本側は中国人留学生の需要に応えるため、1932年一高特設予科を廃止し、新たに高等学校高等科にあたる留学生のための特設高等科を設置した。

「五校特約」期の特設予科から「対支文化事業」下の特設予科へ、制度的に変遷したが、一高やほかの高等学校は留学生に対して終始日本人学生と同様な学力を求め、同様な取扱い方で対応した。そのため、一高特設予科出身の留学生の中で、落第者や中退者が数多く存在した。1932年、一高特設予科が特設高等科に改編され、留学生は日本人学生と分離して、独立したクラスで授業を受けるようになった後でも、留学生に対して日本人と同様な学力を求める方針に変更はなかった。留学生であるがゆえに生じた言語上の差異や不便などに柔軟に対応するという姿勢は欠けていたと言わざるを得ないが、その一方、留学生に対して日本人並みの高いレベルの教育を施すことは評価すべきである。

狩野亨吉文書の清国留学生資料

朶寮建設のことなど

田村 隆

1

旧制第一高等学校における清国留学生の受け入れは狩野亨吉校長時代に始まった。狩野亨吉（1865-1942年）の略歴を以下に掲げる¹。

慶応元年（1865）7月28日、出羽国秋田郡大館町三ノ丸で生まれ、明治17年（1884）7月に東京大学予備門（第一高等学校前身）を修了する。同年9月、東京大学理学部数学科に入学し、21年7月に卒業した後、翌22年9月、帝国大学文科大学（哲学科）に編入学する。24年7月に卒業して9月に大学院へ進学。25年7月に退学して金沢の第四高等中学校（27年より第四高等学校）教授となる。

その後、31年1月に熊本の第五高等学校の教頭となり、その年の11月に東京の第一高等学校校長に転じる。そこから39年7月に京都帝国大学文科大学学長に転出するまでの8年近くにわたって校長を務めた。

在任中の一高にはさまざまな出来事があった。まず着任翌年の明治32年（1899）9月には、初めて清国浙江省から留学生8名を聴講生として迎える。33年9月1日、南・北・中の三寮が落成、開寮する。34年には一高医学部が独立して千葉医学専門学校となる（今日の千葉大学医学部）。35年には、

¹ 展示パンフレット『一高校長時代の狩野亨吉』による。



本郷時代の一高

線路と「高等学校前」電停が見えるので、開通した大正2年3月以降の写真と思われる。架蔵絵葉書による。

今も野球応援などで歌われる寮歌「嗚呼玉杯」（第12回記念祭東寮寮歌、矢野勘治作詞、楠正一作曲）が作られる。1番の歌詞に「五寮の健児」とあるが、これは東・西二寮に新たに完成した三寮を加えた「五寮」を指す。36年に夏目金之助（漱石）が英語の講師として着任する。この年には、前年入学の藤村操が「不可解」の言葉を残して華嚴の滝に身を投げるという事件が起こった。37年1月には清国京師大学堂（北京大学前身）の留学生31名がこの時初めて正規の学生として入学した。また、明治30年代中頃には東京の各地で腸チフスの感染が確認されており、一高寄宿寮内においても37年2月に腸チフスが流行し、4人の生徒が亡くなった。6月下旬（9月8日とも）には、新寮が落成し、翌年3月1日に^だ叅寮と命名、落成式が行われた。

2

しかし、一高の校務に関して、現存する公的記録は残念ながら少ない。散逸の可能性ももちろんあるが、それ以外の理由として考えられるのが、『教養学部の三十年 1949～1979』²の座談会での以下の発言からうかがえる

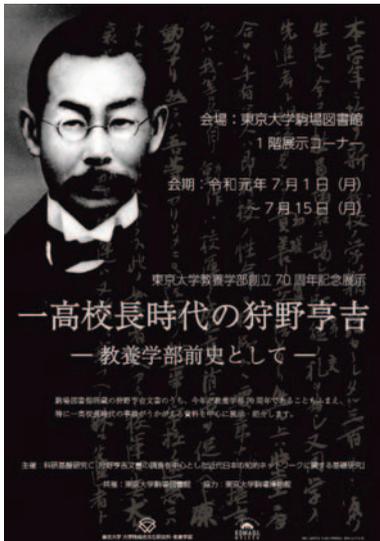
「しきたり」である。一高の会議における記録の話題で、「しきたりとしては、私的なメモだけだったですね。私的なメモしかとってないのですから、本当に無いですね」（菊池栄一）、「メモ的なものは皆さんがお持ちかも知れませんが、公的なものは大学にはないと言うと、そんな馬鹿なことがあるかと怒られるわけです（笑い）」（臼庭昌治）、「倉庫に入っているいろいろ調べましたが、教養学部発足以後は教授会の記録がきちんと残っていますが、それ以前は会議の記録は何も無いですね」（鳥海靖）といった証言がある。これはおそらく一高が駒場に移ってからの比較的新しい話で、明治期の狩野亨吉の頃もそうだったかは不明だが、一高時代の会議録等を学内に見出せない状況からすれば、一高では慣習として記録を保存してこなかった可能性もある。もしそうだとすれば、東京大学駒場図書館に残される狩野亨吉文書の一高校務文書がとりわけ重要な意味を持つ。すなわち、これから紹介する文書群は今日であれば狩野個人でなく学校として保管すべきものが多数含まれるが、上述のような事情を考えると「私的なメモ」が事実上の校務文書の役割を果たしてきたということなのではないか。

狩野亨吉はその膨大な蔵書でも知られるが、書物に限らず多くのものを集め、残した。駒場図書館が所蔵するのは文書類で、その由来等は『東京大学駒場図書館開館15周年記念誌』³に紹介されている。この文書研究の指針となるのは2002年に編まれた『狩野亨吉博士遺蔵文書仮目録』（私家版、井上政久・井上佳世子編）であり、また、狩野亨吉の生誕150周年にあたる2015年の秋には、駒場博物館と駒場図書館において、安達裕之氏、岡本拓司氏、丹羽みさと氏らにより記念展が開催された。

先学の研究を承けて、私達は科学研究費による狩野亨吉文書の調査研究を進めている。2017～2019年度の基盤研究（C）「狩野亨吉文書の調査を中心とした近代日本の知的ネットワークに関する基礎研究」と、2020年度から2022年度までの予定で進めている基盤研究（C）「狩野亨吉文書を活用した近代日本の高等教育および知識人交流の調査研究」である。私が研究代表者を務め、研究分担者として東京大学駒場博物館の折茂克哉氏、先述した立教

² 東京大学百年史教養学部史編集委員会編、1979年7月。

³ <https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/komaba/news/20180322>（ウェブサイトの最終閲覧日はいずれも2021年8月14日。）



「一高校長時代の狩野亨吉—教養学部前史として—」展ポスター

しく、今はオンライン形式で進めており、本稿ではその成果の一端を報告する。

また、本科研の目的の一つは狩野亨吉文書のデジタル公開である。それに向けて、科研費で撮影した文書写真のメタデータをオンライン調査の一環として整備した。文書の一部、「第一高等学校関係文書」と「清国留学生関係文書」については、東京大学デジタルアーカイブズ構築事業により2020年10月13日に公開された⁵。続いて、2021年10月25日に第2期として「日記」（高等学校・京都帝国大学在職期間）が公開された。日記の一部は本稿でも紹介する。また調査メンバーで今取り組んでいる研究課題として、明治37年の一高寄宿寮内における腸チフス流行について川下氏・鶴田氏と共にオンラインで調査しており、狩野亨吉文書も用いつつ、ブックレット『旧制第一高等学校と感染症——1904年の腸チフス流行を事例として』（仮）の共

大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターの丹羽みさと氏、研究協力者として東京大学大学院総合文化研究科博士課程の川下俊文氏、鶴田奈月氏、そして東北大学史料館の曾根原理氏、九州大学附属図書館の山根泰志氏の計7名がメンバーである。狩野の膨大な旧蔵書および文書類は東北大学狩野文庫をはじめ、九州大学・京都大学・東京藝術大学等、諸機関に残ることが知られており、それらの資料を横断的・統合的に研究できるネットワークの整備をめざして議論を重ねていきたい⁴。通常の調査は川下氏、鶴田氏と私の三人で進めているが、緊急事態宣言下において駒場図書館貴重書庫での調査は難

⁴ 拙稿「狩野亨吉生誕150年」（『きゅうとNEWSLETTER』10-4、2016年1月）も参照されたい。<http://hdl.handle.net/2324/1809675>

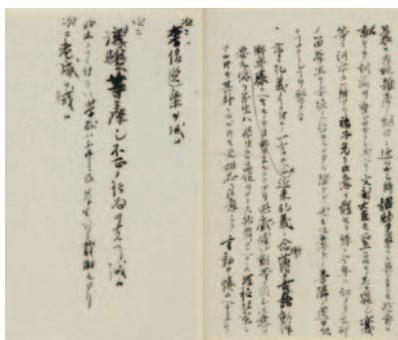
⁵ <https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/kanok/page/home>

同執筆を進めている。

3

先に紹介した一高校長時代の狩野亨吉の事績として、清国留学生の受入開始は特筆すべきものと言える。これは一高における本格的な国際交流の嚆矢となった。着任後初めて臨んだ明治32年の入学式における式辞の草稿が文書の中に残っており、以下のような一節がある（請求記号：一高2。以下に掲げる資料の多くもデジタル公開されている）⁶。

殊ニ今年ハ初メテ支那ノ留学生ヲ本校ニ入学セシメタル際ナレハ尤モ注意シテ善隣ノ道ヲ欠クコトナカランコトヲ務メヨ



入学式式辞草稿（東京大学駒場図書館蔵）

「善隣」の語がここに見られる。『春秋左氏伝』の「親仁善隣」など、古典にもある言葉だが、近代の留学生との友好関係構築に際して用いられる例と

⁶ 展示パンフレット『一高中国人留学生と101号館の歴史展』を参照されたい。本展は2020年2月から3月にかけて予定されていたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、第2会場の駒場図書館については延期となった。展示内容はWeb展示の形でEAAのホームページにおいて公開されている。<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/projects/first-high-school-materials-archive/exhibition-101-history-2/>

しては早いものではないか。狩野はこの式辞の構想メモを「生徒告示」として日記に簡条書で記しており、その第二条にも「支那人入学ニ付、善隣ノ意ヲ付スベシ」とある。『校友会雑誌』第89号（明治32年9月30日）の「清国遊学生の入学」という記事には、「唯吾人は此善隣の同胞の為に我國民に等しき同情を以て親和し須く厚遇歓待、吾人誠意のある所を知らしむべき事を希望するのみ」とあって、ここにも「善隣」の語が見える。また、入学式の一月後に刊行された『校友会雑誌』第90号（明治32年10月30日）には生徒による「入寮の清国遊学生を迎へ且つ之に告ぐ」という記事があり、「清国遊学の諸子、諸子若し、内に包蔵する意見有らば、冀くは無遠慮に開陳発露せよや、敢て或は蔵匿する有る勿かれ、此実に吾人の傾聴せんと欲する所のものたり。迂紆曲折、牆を寮生に城くが如きは、我自治寮の大禁物にして、諸子の為めに取らざる所也」と呼びかける。「奮て善隣の遊学生のため」という一句もあり、入学式における狩野校長の式辞（文書に残るのはその草稿だが）を意識したものかもしれない。新たに迎え入れる清国留学生を学校側と生徒側の双方が「善隣」と呼んでいることに注目しておきたい。

このときの8名の入学は聴講生としてのものだったが、明治37年には正規生として31名が入学する。学科試験が行われたようで、狩野亨吉文書内の『清国京師大学堂留学生ニ関スル第一年報告書』（請求記号：留学生2。筆書きの草稿と印刷したもの二種が残る）によれば、このときの英語科の試験委員に夏目金之助の名が見える。国語科の委員には、漱石の『吾輩は猫である』（1905-1906年）に登場する津木ピン助のモデルとされる杉敏介（1872-1960年）も含まれている。杉は後に長く一高校長を務めた。歴史の委員には『東山時代に於ける一縉紳の生活』⁷などで知られる原勝郎（1871-1924年）の名も見える。

留学生についての記録は生徒側の資料にも残っている。東京大学駒場博物館所蔵の『寄宿寮日誌』（以下、『寮日誌』）⁸によれば、明治37年1月26日（火）の午後8時から10時まで開かれた委員会で「支那留学生の待遇は、及

⁷ 『藝文』1917年。後に講談社学術文庫所収（1990年）。

⁸ 東京大学デジタルアーカイブズ構築事業により撮影が行われ、2021年8月に駒場博物館のホームページにおいて公開された。<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/d-archive.html>

ぶべき丈け一般寮生に等しくするの方針を定む」とあり、また翌々日の28日（木）午後8時からの総代会では、「之を遇する須く寮生を以て（「として」を見消）すべし。されど風俗習慣を異にするが故に、その精神は規約に従ひ、その形式上の手加減は委員の斟酌するに任すべし」、「この事件は重大の事件にして友邦なる清国留学生なれば、延いては国際問題ともなるべし、宜しく慎重なる態度を取り、決して留学生に対して軽侮の考あるべからず」といった意見が出される。「この事件」とは、受入開始という重大事、の意と思われる。

留学生の受入に伴い寄宿寮が手狭になったため、新寮が建設されることになる。竣工までの間はさまざまな対応が検討されたようで、『寮日誌』の明治37年1月12日の記事に言及がある。

清国政府より我文部省に依頼せる留学生約三十名を文部省は更にわが第一高等学校長にその教育及監督を依託せり。これ等留学生は従来の留学生とは異なり清国政府管条大臣より撰拔せしものにして修学帰国後は大学堂に於て教授の任に当らしむるもの、而して彼等は日本語を読むこと能はざるのみならず、従来の留学生は彼国政府の忌憚する所にしてこれ等と交際せしむるを欲せざるものにして、我が内田公使より外務省へ在北京大学等、服部巖谷の二教授より文部省へ詳に報じ越したるものありといふ。我校に於ては是等留学生を教育及監督する便利の爲めに撰生室西隣に一の建物を建築して之を収容する事としたるも、其工事は取急ぎても尚一ヶ月乃至一ヶ月半の日子を要す。然るに留学生は十二月末日秦皇島を出帆して一月五六日には既に着京する予定なるを以て事頗る火急。即校長は舎監と会し寄宿寮委員会を招集し寄宿寮の二三室を以て彼等の収容に充つるか、ホールを以て之に充つるか又は撰生室を以て之に充つるかの三議案を提出し、其一を撰ばんことを乞ふ。時に十二月廿八日（癸卯）なり。〔中略〕ホールは寮生の使用絶えざるのみならず、此の嚴寒に際し留学生は寒気に苦しむべく、二三室を明けて他に移転せしむる事は不可能の事に非ざるも寮生の迷惑多大にして食事、其他に於て留学生の不便も亦一方ならざるべきを察し、遂に撰生室を仮りに寄宿寮事務所に移し撰生室を整理してかりに留学生を容れんことを定む。

「撰生室西隣に一つの建物を建築」という新寮が乃木希典（1849-1912年）の「乃木」から命名したという「朶寮」で、明治37年に落成した。入寮は留学生に限るわけではなかったようで、後に谷崎潤一郎も朶寮に入っている。谷崎の小説「^{あつもの}羹」（明治45年）には、一高生時代の自身の姿が描かれる。

遙に上野谷中の森を、朦朧とした秋霧の這ふ中に瞰下して、東寮、西寮、朶寮、北寮、南寮——の五つの棟が、ゴシックの寺院のやうに、薨の角を尖らして聳えて居る。この頃の夜長を、全寮の学生が息を凝らして勉強して居るのであらう。一階、二階、三階のところどころになつかしい灯火の明りが洩れて瞬いて居る。宗一は何となく「灯火可親」と云ふ言葉に、新しい憧れの心を寄せた。自分の部屋と定められた朶寮一番の石階のほとりに俵を捨て、そつと自修室の戸を開けると、二三人の同室生が専念に読書して居る最中であつた⁹。

また、この頃の谷崎について記した君島一郎『朶寮一番室 谷崎潤一郎と一高寮友たち』¹⁰には朶寮の写真も添えられている。本書にも指摘されるように、当時は「羹」に言われる5寮でなく中寮を入れた6寮だった。朶寮が6寮目である。その後、大正9年までには和寮と明寮が加わり、8寮となる。先に挙げた杉敏介はこのとき、

八つの棟 ^{いらか}薨ならべて三十年の自治をことほぐ今日の楽しさ



本郷時代の一高寄宿寮（架蔵絵葉書による。部分）。
今の弥生キャンパスの野球場近くにあった。

⁹ 『谷崎潤一郎全集』第1巻、中央公論社、1966年。

¹⁰ 時事通信社、1967年。

南北寮衆寮中寮その外に東寮西寮和寮明寮

などの歌を詠んでいる¹¹。

4

衆寮建設について触れたのは、狩野亨吉文書等により確認される経緯が、『第一高等学校六十年史』¹²の記録とはくい違うためである。明治38年6月の記事には、「校長狩野亨吉の寄附に係る寄宿舍一棟木造建物百十四坪五合、本校維持資金に編入せらる」とあるが、以下に見る資料群からは狩野校長の寄付で建てられた形跡はうかがえず、少なくとも全額が狩野の寄付によるものとは考えられない。

『清国京師大学堂留学生ニ関スル第一年報告書』には「寄宿舍ノ新築」の項があり、時期から見て衆寮を指すと考えられる（落成は明治37年6月下旬、ただし『第一高等学校六十年史』は同年9月8日とする）。

寄宿舍ノ新築

当校寄宿舍ハ七百人ヲ収容スル設備ヲ有スルト雖モ、常ニ満員ニテ新ニ清国留学生三十名ヲ容ル、ノ余地ナシ。而シテ一時ト雖モ留学生ヲ坊間ノ下宿屋ニ就カシムルハ好シカラザル所アルヲ以テ暫ク南寮ノ一部ニ収容シタルモ、長ク其儘ニ附シ去ル能ハズ、宿舍ノ拡張已ムベカラザルモノアルヲ、遂ニ新ニ一棟ヲ増築スルコトニ決シ其創立費トシテ要スル一万円ノ中一千八百円ハ予算中ノ借家料ヲ用キ二千円ハ別ニ清国政府ヨリノ支出ニ由リ、残額ハ臨時他ヨリ借用シ逐年歳計ノ剰余ヲ以テ償還スルコト、セリ。此寄宿舍ハ五月下旬ニ起工シテ六月下旬ニ落成セリ。

「創立費トシテ要スル一万円」の内訳が示され、「借家料」1,800円、「清国政府ヨリノ支出」2,000円、「臨時他ヨリ借用」残額（6,200円）であると

¹¹ 『南山歌集』 杉先生喜寿記念歌集出版会、1949年。

¹² 1939年3月。国立国会図書館デジタルコレクションにより公開されている。

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1454983>

いう。「借家料」の詳細は不明だが、一高の初期の寄宿寮は外部で建てたものに借家料を払っていたらしく、自前の寄宿寮建設によりその分を充てられるようになったという意かもしれない。『向陵誌』¹³の自治寮略史にも、「蓋し南北寮は借家にして、年々五千元を支払はざる可からず。経費多端の折柄無用なる寮の爲め此巨額を費す不経済も亦甚し」（傍点ママ）という記事が見られる。その一部を転用したのではないか。ここで重要なのは次の「清国政府ヨリノ支出」2,000円であり、衆寮建設に清国政府の資金が入っていることがわかる。狩野校長の寄付があったとすれば「臨時他ヨリ借用」に含まれることになるが、そこには「借用」とあって寄付とは記されていない。それならばなぜ、『第一高等学校六十年史』は「校長狩野亨吉の寄附に係る寄宿舎」などと記したのであろうか。

そのあたりの事情は以下の書簡のやりとりからある程度明らかになる。発端は文部省会計官の杉村茂助から狩野亨吉宛に届いた書簡である（請求記号：留学生1）。明治40年のことで、狩野はすでに一高校長を辞し、京都帝國大学に転じていた。

拝啓

清国京師大学堂派遣留学生学資ハ本年モ亦昨年ト同シク金壹万七千七百参拾貳円送被越候ニ付テハ、過日モ御談致候通右ノ内ニテ貴下御取扱中ニ係ル借入金残金参千八百六拾円八拾七銭九厘（是ハ貴下ヨリ清国政府ヘ報告セラレタル報告書ニ依リ計算シタル額）ヲ償却相成可然ト存候ニ付テハ、右償却金額ニ対シテハ貴下ヨリ清国公使ヘ宛領収証書御発シ相成度、其残額壹万参千八百七拾壹円拾貳銭壹厘ハ大臣ヨリ領収証書ヲ発シ、右二通ノ証書ヲ日時ニ清国公使ヘ相渡度ト存候ニ付、折返シ領収証書小生迄御回付被成下度、尚右償却金ハ当方ヨリ直ニ新渡戸校長ヘ相渡候テ宜敷哉御伺申上候。尤石^(未読)代金ノ負債ハ現時四千八百余円有之、之ヲ全部仕払フニハ不足有之哉為念申上候。

五月一日 松村茂助

狩野亨吉様足下

¹³ 第一高等学校寄宿寮編、1930年。

清国京師大学堂留学生学費として昨年同様の17,732円が送付され、そこから狩野亨吉が一高校長在職中の借入金3,860円87銭9厘を償却するというのである。書簡の趣はその分の領収証書を狩野から清国公使に出してほしいとの依頼で、残金13,871円21銭1厘は（文部）大臣から領収証書を渡すという。「借入金」が何を指すのかはこの書簡のみからはわからないが、幸い狩野の返信の下書きが狩野亨吉文書内の日記に残っている（請求記号：日記13）。推敲の跡が何箇所も見られるが、ここでは書き直した後の形で掲げる。

貴翰拝誦。清国ヨリ今年モ又一万七千余円送金有之候趣、好都合ニ存候。借入金残金ヲ償却スル場合ニハ清国公使宛領収書ヲ差出スベキ事ハ、過日上京ノ際御話有之、其節ハ可然儀ト存ジ承諾致候ヘドモ、帰來熟考ノ処、是迄清国ヨリノ送金ハ貴省ヲ経テ受取り其都度貴省（大臣若クハ次官宛ト記憶ス）宛領収書ヲ出シ、曾テ直接清国公使ト金ノ授受ヲナシタルコト無キノミナラズ、右借入金償却ノコトノ如キモ単ニ報告書中ニ記載セルノミニテ一回モ公使宛ニ領収書ノ出シタルコトナケレバ、今回ニ限り領収書ヲ発スル必要ナカルベク、矢張前回ノ報告書ニ於ケル如ク次回第一高等学校長ヨリ上申スル報告書ニ記載スルヲ以テ足レリト存候。若何等カノ必要アリテ（例ヘバ次回ノ報告書ニ右借入金ノコトヲ記スル能ハザル如キ事情起ルト假定ス）此際小生ヨリ領収書ヲ徴セラルトスレバ、此迄ノ領収書ノ如ク貴省宛トスルヲ穩当ト考候。依テ希望スル所ハ領収書ヲ出サルコトニ有之、若シ御都合上是非之ヲ必要トセバ、別紙宛名ヲ欠キタル領収書差上置候間、然ルベク宛名補填ノ上御使用被下度、其際ハ又先方ニ誤解ヲ与ヘザル様御注意被成下度候。金額ノ計算ハ小生ヨリ清国政府ニ宛タル報告書ニ由リタル旨、御申越有之候ヘドモ、直接清国政府ニ宛テ報告ヲ為シタルコト無之ニヨリ、右ハ文部大臣ニ宛タル報告書ニ可有之。而シテ小生只今右報告書ノ副本ヲ有セズ。誤等ノ有無ヲ驗スルニ由ナク候間、尚一応貴課員或ハ高等学校杉山書記ニ取調ヲ命ゼラレ度奉願候。償却金ヲ直ニ新渡戸校長ニ御渡ノコトニ就キテハ異議無之候。敬具

五月三日

狩野亨吉

松村茂助様

領収証

一金（欄外に「用紙みノ」）

右清国京師大学堂留学生寄宿舎建築費借入金残金の全部償却ニ充ツルタ
メ正ニ領収候也

明治四十年五月三日

狩野亨吉

この日記と領収書案のことは青江舜二郎『狩野亨吉の生涯』¹⁴にも言及がある。ただし、氏は領収書案を「右清国京都大学留学生寄宿舎」と翻字し、「すなわちこれによれば京都大学の中に清国留学生の寮が建設されつつあったのだ。その費用が清国公使館から出ていたということなど私には初耳で、恐らくそれはほとんどの人にとっても同様であろう。亨吉は一高校長時代と同じく、京都でも彼らのための宿泊設備をつくったのである」と述べているが、「京都大学」は「京師大学堂」の誤刻であろう。領収書には「寄宿舎建築費借入金」とあり、先の書簡から見られる「借入金」とは一高の寮建設に関わるものであることがわかる。

5

複数の資料を繋ぐことで往復書簡のやりとりが復元でき、寮建設費用について狩野が関与していたことは確かめられた。おそらくはこうした資料の断片から「校長狩野亨吉の寄附に係る寄宿舎」といった誤認が生じたのであろう。だが、すでに見たように、これは狩野校長による支出ではなく、清国政府からの後日の償還を見込んだ上での一高としての借入であったことがうかがえる。「清国京師大学堂留学生学費」として送金されたものの一部を、すでに成った寮の建設経費の償還に充てるという方法がとられたのだと思われる。

このやりとりにはさらに続きがあり、狩野亨吉文書中には松村茂助から狩野宛の返信と、後任校長新渡戸稲造による狩野宛の領収書が残っている（請求記号：留学生1）。

¹⁴ 中公文庫、1987年。

拝啓

清国委託学生費之儀ニ付、早速御回報被成下御意見之程承知致候。就テハ清国公使ヘハ金額ニ対スル領収証書ヲ大臣名義ニテ相發シ貴官ヨリハ大臣ヘ宛領収証書ヲ差出サル、コトニ致、則御送付ノ証書ニハ金額參千八百六拾円八拾七錢九厘（杉山書記ヘモ為念計算突合済）ヲ記入致、尚右金額ハ本日直ニ新渡戸校長ヘ相渡候ニ付テハ同校長ヨリハ貴下宛ノ別紙領収証書ヲ徴シ候間、御回送申上候。是ニテ貴下ノ御關係ハ先一段落と相成申候。右御通知迄、如此御座候 敬具

明治四十年五月七日

松村茂助 印

狩野亨吉様

証

一 金參千八百六拾円八拾七錢九厘

右ハ貴官貴校御仕職中ノ清国委託学生費借入残金ニ対シ御償還ノ分正ニ領収候也

明治四十年五月七日

第一高等学校長 新渡戸稲造 印

京都帝国大学文科大学長 狩野亨吉殿

話が複雑だが、結局は新渡戸稲造校長が狩野亨吉前校長に3,860円87銭9厘の領収書を出し、狩野は文部大臣に同額の領収書を出し、文部大臣は清国公使に「清国京師大学堂留学生学費」全体（17,732円）の領収書を出すということで決着したようである。この領収書のやりとりは形式的な手続きとして処理されており、狩野個人の問題ではなくあくまでも衆寮建設当時の校長に対しての領収書授受である。もちろん、先にも挙げた項目「臨時他ヨリ借用」の中に何らかの形で狩野の寄付もしくは立替払などの金額が含まれている可能性は否定できない。しかし、少なくとも一高から狩野に発行された上記の領収書が狩野個人の寄付を示すものでないことはこれまでの検討から明らかであり、衆寮建設に関してはむしろその費用の多くを清国政府の支出によっていることがわかる。

ちなみに、昭和7年6月20日発行の『一高寄宿寮寮生名簿』¹⁵によれば、

寮に留学生は一人もいない。この頃にはすでに当初の建設目的によらない実態となっていたようである。建設費用についても早くから狩野校長の寄付と誤認されていた可能性があり、その理解を承けた『第一高等学校六十年史』や『狩野亨吉の生涯』の記述を新たにデジタル公開された資料によって訂正および補足しておく。

¹⁵ 一高寄宿寮委員室発行。

服部宇之吉と京師大学堂の留学生派遣事業

薩日娜

はじめに

20世紀初頭の清末政府は日本の「学制」やその後の教育制度を総合的に参照しながら近代的な教育制度を定めた。1904年公布された「奏定学堂章程」は、中国における理科教育の近代化に制度的な保障を与え、中国の教育史上初めて国民教育の理念を明確な形で打ち出した。「日本型教育体制」が確立された1904年に、政府は計画的に留学生を派遣し、国内でも近代式大学の体制を備えることを目指した。その橋頭堡になったのが京師大学堂であり、その留学生派遣事業に大きな役割を果たしたのが総教習服部宇之吉であった。しかしながら、これまでの研究では服部の貢献はあまり知られていなかった。本稿では、東京大学駒場図書館に現存する一部未公開の資料、そして北京大学に保存されたオリジナルの資料により、服部が京師大学堂で授業を担当しながら、師範館正教習並びに総教習として師範館の管理運営全般を指導していたことを明らかにした。特に彼が清末の教育制度に助言し、京師大学堂の留学生派遣事業を推進させたことを明らかにし、京師大学堂の留学生派遣事業により20世紀初頭の中国における理科教育の近代化が成し遂げられた経緯を紹介する。

1. 服部宇之吉が京師大学堂に赴任した時代背景

服部宇之吉（1867-1939年）の時代背景には清末における中国人の日本への教育視察があり、その中に、京師大学堂の創設に関わる視察があった。それは、管学大臣孫家鼐（1827-1909年）が京師大学堂を設立するために、1898年9月、監察御史李盛鐸、翰林院編修李家駒、翰林院庶吉士宗室寿富、工部員外郎楊士燮ら4人による東京帝国大学の校舎建築及び日本の大、中、小学校の一切の規制、課程を調査するものである¹。これは日清戦争後に清政府から派遣された最初の公的な対日視察団でもあった。

京師大学堂の創設は、戊戌変法期に行われた教育に関する改革措置の中で特に重要なものである。京師大学堂は中国最初の近代的大学であるとともに、1905年に学部（文部省に相当する）が設立されるまでは近代的な教育体制における頂点としても位置づけられていた。全国の最高学府であると同時に、全国の学校を統轄する最高の教育行政機関でもあったのである。

1896年6月26日に光緒皇帝は京師大学堂の設置について「迅速に奏上を行い、いささかも遅延するなかれ」²と命じた。軍機大臣及び総理衙門は皇帝の再度の命令を受けた後、急いでその計画準備に着手したが、前例がなかったため、慌てて度を失った。総理衙門は密かに人を派遣し、梁啓超に京師大学堂章程の起草を依頼した。梁啓超は主に日本の学校制度を参考にし、中国の国情も勘案しつつ、八十余条からなる章程の草案を起草した³。「籌議京師大学堂章程」がそれである。同年7月3日、総理衙門及び軍機処は「籌議京師大学堂章程」を上奏した。その章程には「一、資金を広く調達し、二、校舎を大規模に建築し、三、管学大臣を慎重に選び、四、総教習を任命する」⁴ことが要の四か条としてあげられている。

この章程は同日に皇帝の批准を受け、京師大学堂の創設が正式に認可され

¹ 外務省外交史料館所蔵『外国官民本邦及朝・満視察雑件』「清国之部」の一、第五、明治31年9月20日。

² 光緒二四年正月二十五日上諭、清朱寿朋編『光緒朝東華錄』（四）、4041頁。

³ 楊松、鄧力群原編、柴孟源重編『中国近代史資料選輯』、生活・読書・新知三聯書店、1972年、375頁。

⁴ 清王延熙・王樹敏編『皇朝道咸同光奏議』巻7、変法類、学堂条、上海久敬齋石印本、光緒28年、7-13頁。

た。そして、工部尚書孫家鼐が管学大臣に任命され、既存の官書局、訳書局が京師大学堂に組み込まれることも決まった⁵。

1898年8月30日、管学大臣孫家鼐は京師大学堂の職員を教育視察のため日本へ派遣するよう朝廷に上奏した。彼は上奏文において次のように述べている。

日本が学校を創設する際には、まず人を欧米各国に派遣し、広く考察させてから、初めて規則・制度を定めたという。全国で一律にこの規則・制度を実行し、その結果として現在に至って学校が林立し、人材が次々と輩出している。現在京師大学堂の章程は一応定められたが、各省の中・小学堂はまだ統一されていない。〔中略〕すべての学校に関する規則・制度は東西各国の制度を参考にすべきである。しかし、欧米は道が遠く、往復するには時間がかかる。日本なら近隣であり、その学校は欧米の長所を兼ねている。人を日本に派遣して考察させれば効果が早く得られる⁶。

さらに視察期間を二か月とし、費用は大学堂の経費から出すことなどについても提案した。このようにして京師大学堂の職員による、日本の教育視察が決定された。彼等はそれぞれの専門分野から日本教育の各方面を視察したのである。

中央からの視察団の代表として最も有名になったのは、洋務運動期の曾国藩、李鴻章らに重用されていた桐城学派⁷の有名な儒学者である呉汝綸(1840-1903年)であった。彼は、1901年の9月30日に「駁議兩湖張制軍变法三疏」を書き、科挙の柱の一つである経学に対して批判を行い、一人息子の呉啓孫に対して、科挙受験を断念することを勧め、1901年には息子を日

⁵ 孫家鼐が「籌議京師大学堂章程」に満足せず、就任後まもなく8月9日に、その内容の改定を求める「奏陳籌辦大学堂大概情景疎」を提出した。前掲王延熙・王樹敏編『皇朝道咸同光奏議』巻7、变法類、学堂条、14-15頁。

⁶ 管理大学堂孫家鼐摺、光緒二十四年七月十四日。前掲国家档案局明清档案館編『戊戌变法档案史料』275-276頁。

⁷ 創始者は方苞という安徽省桐城の人であり、清代に200余年続いた儒学者の伝統的な学派である。

本へ留学させた。呉は息子への手紙のなかで以下のように書いている。

汝為科挙欲帰、〔中略〕吾料科挙終当廢、汝若久在日本学一専門之学、由学堂卒業為举人進士、当較科挙為可喜⁸。

〔訳文〕

君は科挙のために帰るといふ。〔中略〕私は科挙が必ず廃止されると思う。君がもし日本に長く留学し、専門科目を勉強し、〔日本の〕学堂を卒業して举人や進士になれば、科挙に参加するよりも喜ぶべきことである。

翌1902年の5月に、呉汝綸は日本へ渡航した。日本の教育を調査する際、町で放課後の男女学生たちが往来するのを見て、日本が維新改革をしてから、僅か30年余りのうちに、「学校林の如く生徒街に満ち、此境殊に至り易からず」⁹という状態になったことを感嘆し、「鎖国的な人間は僅か三十年間に如何に如此頭脳を洗ひ得たるか、国民の気象は如何にして斯く感化せしか、之等を調査せば調査する程五里霧中に迷ふの感あり」¹⁰と述べて、日本視察の間その原因を探していた。

呉汝綸の疑問に対して、日本の各界や当時の新聞は様々な答えを与えた。もっとも多く指摘されたのは、「九州日日新聞」に代表される以下のような見解である。

清国が千年以来の因習の絆に縛られ、文弱の弊に陥った理由は、清国学問の最短所が実用的学問の乏しいことにあるからだ。〔中略〕故に、呉汝綸の教育視察は、大学を見るより小学校を見、文学、美術の学校を見るよりは商業、工芸の学校を見、哲学、宗教の方面よりは理学、化学の方面を視察し、重点を実業教育に置くべきである¹¹。

⁸ 前掲書、卷三、2614-2615頁。

⁹ 「京都に於ける呉汝綸一行」『大阪毎日新聞』明治35年6月27日。

¹⁰ 「日本の今日ある所以」『日本』明治35年8月25日、汪婉『清末中国対日教育視察の研究』（東京大学博士論文、1996年）130-136頁参照。

「実用的な学問の乏しい」、「千年以来の因習」と言われているのは、清末に実施されていた科挙を通して出仕する教育制度であろう。

こうして、官僚たち、儒学者たち、民間人の間に伝統的な科挙制度を廃止し、清国にふさわしい新しい教育制度を設立する気運が高まるなか、京師大学堂が新しい幕が開いた。吳汝綸の日本への視察には一つ重要な使命があった。それは優秀な日本人学者を物色することであった。吳汝綸が日本到着後、文部大臣であった菊池大麓（1855-1917年）、外務大臣の小村壽太郎に尋ねた時推薦されたのが服部宇之吉であった。

その時のことについて、呉は次のように記している¹²。

師範速成学堂均以研究西学為主、服部君大可襄助。所延服部、巖谷二君、此邦上下、皆賀我得人、皆望能盡其用。今所聘服部先生、即是教育名家。文部菊池屢為弟言之、恐吾国不盡其用、使服部不能久羈。考求学務、服部可備顧問之選。

[訳文]

師範速成学堂はすべて西洋の学問を中心に研究を行い、服部君は大いに助けになる。雇われた服部君、巖谷君の二人は、この国での評判が高く、彼らの能力が十分に発揮されることを望んでいる。今雇われた服部先生は有名な教育家である。文部大臣の菊池は、「おそらく服部の能力を十分に引き出すことはできないため、彼を我が国〔清国〕で長く留めることはできない。学務を探求するのなら、服部を顧問にするのがよい」と何度も言われた。

こうして、服部は当時の文部大臣であった菊池大麓の推薦により呉に知られ、そして大学堂に紹介されたことがわかる。

京師大学堂の各事業が軌道にのったのも、ちょうど1902年であった¹³。

¹¹「呉氏の教育視察」『九州日日新聞』明治35年7月2日、汪婉『清末中国対日教育視察の研究』（東京大学博士論文、1996年）130-136頁参照。

¹² 吳汝綸『尺牘』、黄山書社、1990年、297-302頁。

¹³ 『皇朝政典類纂』巻230、『邸鈔』を参照。

大学堂が創設された時期に、日本にモデルを取ることが提唱され、その後あらためて新政が実施される中で、大学堂は再び発足した。そして近代学校制度を導入するにあたって、日本の教育制度、その目的から、内容、方法など、すべての面を模倣することとなったのである。

2. 服部宇之吉と京師大学堂の近代教育の進展

1902年1月、管学大臣に任命された張百熙（1847-1907年）は、京師大学堂の再開にあたって、本科はしばらくおかず、まず予備科および速成科を発足させ、速成科には師範館および仕学館をおくなど、日本のやり方をモデルにその運営をおこなうこととした。そのためマーチン（中国名は丁韪良、William Alexander Parsons Martin、1827-1916年）などかつての外国人教習を解雇し、それにかえて日本人教員を招聘した。大学堂の再開を師範館、仕学館の両館での速成教育から着手したのは、当時まず必要なのは、新教育を担う人材の早急な養成および若手現職官吏の再教育だと考えたからである。

清末の政府に招聘された日本人教員は数百人を超えた。それは清末中国が日本型教育制度の実施と教育近代化の事業を補佐する人材を日本にもとめた結果であり、同時に日本は教習や学務顧問の派遣による留学生を受け入れるようになった¹⁴。

清末の中国に赴いた日本人教員の筆頭にあげられるのが服部宇之吉であった。

哲学者と中国学者である服部宇之吉

服部宇之吉は福島県の人であり、中国の儒学を研究したことで哲学者、中国学者¹⁵と称される人物である。東京帝国大学の教授、京師大学堂の総教

¹⁴ 阿部洋『中国近代学校史研究——清末における近代学校制度の成立過程』福村出版、1993年、137頁。

¹⁵ ここでの「中国学者」は、特に服部宇之吉のように、20世紀以降の新しい視点や方法で中国の儒学、論理学などを研究している学者を指し、明治時代の「漢学者」とは区別される。

習、東方文化学院院長、帝国学士員会員、ハーバード大学の教授を歴任した。彼は1883-1887年に第一高等学校に学んで、1887-1890年に東京帝国大学文科大学（現在の東大文学部）の文科と哲学科を卒業し、文部省に入った。その後、第三高等学校の教員、東京高等師範学校の教授、東大文科助教授を歴任した。

服部は中国との関わりは1899年から始まる。その年、文部省から中国へ4年間留学するように命じられたが、清末の義和団事件に遭遇した彼は、その経緯を『北京籠城日記』にまとめた¹⁶。これは中国近代史の研究において、義和団事件を理解する貴重な資料となっている。

1900年末にドイツへ留学し、西洋の哲学を学んだ。2年後（1902年）、文部省からの命令により帰国し、7月11日に東京帝国大学文科大学教授に任



図1 服部宇之吉

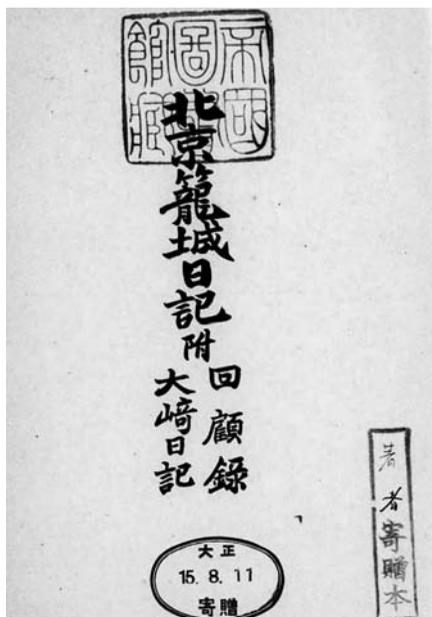


図2 北京籠城日記（1900年）

¹⁶『北京籠城日記』は博文館から1900年出版されたが、1965年平凡社東洋文庫から復刊されている。

ぜられ、同月16日、文学博士の学位を授与された。そして、急遽準備を整え、文部大臣の認可を得て、9月の初めに再び清末中国へ出発した¹⁷。

服部は京師大学堂の仕事のため中国に7年間滞在し、1909年に帰国した。その後、東大に復帰し、哲学講座の主任として日本における近代的な儒学研究を進め、東大文学部長（1924-1926年）、京城帝国大学の総長（1926-1928年）を兼任し、1928年に東大を退官、名誉教授を授けられた。その後、国学院大学学長、東方文化学院理事長および東京研究所長を歴任して1939年、逝去した。

服部は東大において儒学の礼学、制度史を中心的に研究し、「孔子教」という言葉を用いて儒教の宗教性を論じた¹⁸。また、広く中国哲学や西洋論理学も講じた。

京師大学堂師範館の総教習としての服部宇之吉

清末の義和団事件後、清政府は近代学校制度を本格的に導入し、そのモデルとして1902年、京師大学堂を再開した。その際、まず師範館および仕学館の開設から着手し、服部を師範館総教習として招いたのである。

1902年9月、服部らの到着を待って、師範館は開館した。北京に着いた服部は即時に師範館の総教習に任命された。仕学館総教習には巖谷孫蔵（1867-1918年）が就任し¹⁹、師範科と予備科の数学教習は日本人教員氏家謙曹（生没年不明）、太田達人（1866-1945年）が担当した²⁰。

¹⁷ 服部先生古稀祝賀記念論文集刊行会編「服部先生自叙」『服部先生古稀記念論文集』、富山房発行、1936年、13頁。

¹⁸ 吉川幸次郎「座談会での回想」『東洋学の創始者たち』講談社、1976年。

¹⁹ 明治・大正期の法律学者、京都帝国大学教授、法学博士、明治18年ドイツ留学、イエナ大、ハルレ大に学び、24年帰国。東京専門学校、明治法律学校、東京高商各講師、25年第三高等学校（三高）教授となった。32年京師帝大法科教授となり民法担当。35年清国政府に招かれ、法学を教授、大正元年（1912）中華民国法典の編纂に参与、大総督府法律顧問を務め、6年（1917）職を辞した。

²⁰ 汪向荣著竹内実監訳『清国お雇い日本人』朝日新聞社、1991年、84頁参照。氏家謙曹は数学者、物理学者であり、福岡県尋常中学校教員を経て旧制第二高等学校教授。著書に『新編理科書』（四巻、1894年）がある。太田達は、陸奥国岩手郡東中野村（現盛岡市）出身の教育者、東京帝国大学理科大学を卒業、夏目漱石とは大学予備門時代からの親友で、晩年の自伝的作品「硝子戸の中」で友達「O」として登場している。

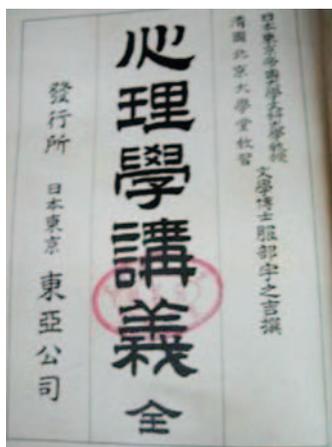


図3 服部字之吉の『心理学講義』

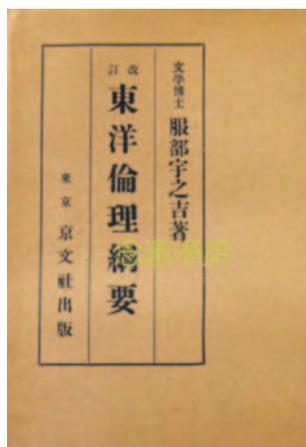


図4 服部字之吉の『東洋倫理学綱要』

服部は師範館の総教習として特に以下の四つの役割を果たした。

- (1) 京師大学堂で自分から学生への授業を担当した。その担当した科目は北京大学で現存する記録によれば「心理学」と「倫理学」であることがわかる。
- (2) 師範館正教習として同館在籍の日本人教員に対する指導監督にあたった。
- (3) 師範館の管理運営全般に関して中国側当局者に各種の助言をおこなった。

そして、特に重要な一点として、

- (4) 京師大学堂の日本へ留学生を派遣する事業に関わった。

このように服部は極めて重要な人物であったが、これらのことは今まで知られていなかった事実である。

東京大学駒場図書館に現存する服部の書いた幾つかの手紙、そして北京大学に現存する資料によると、服部字之吉と京師大学堂の留学生派遣事業の内幕を知ることができる。

東京大学に現存する明治36年12月8日付、「久保田文部大臣宛 服部字之吉・巖谷孫蔵書翰」に京師大学堂からの留学生派遣に関して以下のように書かれている。

今日同大臣同行、内田公使に面会の上大臣より直接内田公使に留学生監督者選択を文部大臣に御依頼申度旨申陳べられ候、一兩日後に更に公文を以て管学大臣より内田公使に依頼相成筈に候間²¹。

ここでの「大臣」とは京師大学堂の学務を管理していた張百熙を指している。以上の記述により、手紙を書いた明治36年12月8日、服部は張と一緒に内田公使に面会し、直接留学生監督者の選択を文部大臣に依頼したこと、そして、一兩日後に、更に公文を以て管学大臣より内田公使に依頼する手紙を整えたことがわかる。

また、この手紙により、留学生派遣の期日は1903年12月31日であり、東京に1904年1月5日あるいは6日に到着するように決定したことがわかる。

さらに、明治37年1月7日の狩野亨吉宛の服部宇之吉書翰により、京師大学堂の留学生派遣事業に関する以下のような事実を明らかにすることができた。

例えば、中国での資料と書類によると、京師大学堂より派遣の留学生は全部で31名²²と言われてきたが、服部の手紙によると、1904年一高に入学した学生の人数は私費で留学した2名を含めて33人であった²³。

とくに、服部の手紙により、清政府が第一回官費留学生を派遣した目的が

²¹ 東京大学駒場図書館保存狩野文書『清国留学生関係公文書・書翰目録』明治37年-明治38年、「02 明治36年12月8日付久保田文部大臣宛服部宇之吉・巖谷孫歳書翰(留学生1-8)」参照。

²² これら31名は杜福垣、王桐齡、顧德隣、呉宗栻、成雋、馮祖荀、朱炳文、席聘臣、黄芸錫、黄德章、余榮昌、朱獻文、屠振鵬、範熙壬、周宣、朱深、張輝曾、陳允楨、景定成、鐘賡言、何培琛、劉冕執、史錫綽、劉成志、王舜成、蔣履曾、王曾憲、陳治安、曾儀進、蘇振潼、唐演である。

²³ 私費生の一人は京師大学堂の師範館の学生であり、日本で機械工学を学ぶために留学を希望した施恩曦である。もう一人は京師大学堂付属医学実業館の学生であり、同じく機械工学を学ぶために留学を希望した葉克学支である。さらに、服部の1905年の手紙によると、服部の推薦により、施恩曦の成績が優秀だったため、半年後に官費留学生になった。これまで京師大学堂の留学生派遣事業に関する日本側の資料による研究は空白の状態であった。筆者は本研究において、1904年の京師大学堂の留学生派遣事業の内情をある程度明らかにすることができた。

明確になった。それこそが、京師大学堂師範館の総教習になった後服部の果たした最大の役割でもあった。

京師大学堂の留学生派遣事業の目的

服部は北京に行ったあと、京師大学堂の様々な事業に心を込めて力を注いだ。彼は特に、日本へ留学生を派遣し、留学生たちが日本で学んだ専門に基づいて、中国における将来の「分科大学」を設立することを目指した。

服部の手紙によると、『京師大学堂留学生章程』は主に、張之洞と内田公使との間で交渉し、日本政府の承諾を得て定めたものであるが、その具体的な内容は主に服部が起稿したものであった。この留学生章程の第五条は、管学大臣が一高卒業後の学生の入学すべき学校を指定すると規定していた。

このように、清政府が留学生の一高卒業後の専門を決定しているということは、留学生を清末中国における教育近代化のための人材として育てることが派遣の目的であったことを伺わせる。実際、後述するように、留学生たちの一高卒業後の専門の選択にあたっては様々な調整があったことが分かる。留学生個人の意志も尊重されていたが、派遣当時初の専門を変更するには京師大学堂からの許可が必要であり、留学生と清政府との間の連絡役と調停役を担っていたのが服部であった。

この時の派遣について、中国側には以下のような資料がある。

奏陳京師大学堂便宜派学生出洋分習専門、以備隨時体察、益覺咨派学生出洋之拳万不可緩、誠以教育初基、必从培養教員入手。而大学堂教習尤當儲之於早、以資任用²⁴。

[訳文]

京師大学堂は外国に学生を派遣し、専門科目を割振って学習させ、随時外国のことを体験し観察させる備えをしなければならない。外国に学生を派遣することを遅れさせてはならないと考える。教育の基礎として、教員を育てることから着手すべきである。そこで大学堂の教員を育

²⁴ 張百熙『奏派学生赴東西洋各国遊学折』『光緒朝東華錄』第5冊、中華書局、1958年、5113-5114頁。

てることをもっとも急ぎ、任用すべきである。

これによると、留学生を派遣した目的は、将来、大学の教員となるべき人材を早期に育成することであった。

中国に残っている資料と、服部の手紙の中に書かれた情報をつきあわせると、教員を育成することだけではなく、京師大学堂に「文科大学」を設立することも留学生派遣の目的の一つであったことがわかる。

また、次のような記述も残されている。

查日本明治八年、選優等学生留学外国、至明治十三年、留学生畢業帰国、多任為大学堂教員。迄今博士学士、人材衆多、六科大師。取材本国。从前所延欧美教員、每科不過数人、去留皆無足輕重。而日本留学欧美者尚源源不絶。此用心深遠、可為前事之師²⁵。

[訳文]

日本のことを調査すると、明治八年優等な学生を選び外国に留学させ、明治十三年に学業を終えて帰国すると、多くは大学の教員に任用された。今では博士と学士の人材が大勢いて、六つの科の教師の多くは自国から人材を採用するようになった。以前に招いた欧米の教員は科毎に数人しかいなくなり、その去就が大きく影響することはなくなった。しかし今でも日本は欧米へ絶えることなく留学生を派遣している。これは実に深遠な配慮であり、[わが国が] 学ぶべき模範である。

留学生を派遣する際には、留学生本人の希望も参酌して分野が決められたが、種々の都合により派遣した人数が予定より多くなり、同一の学科に2、3名の学生を配当する場合もあったことがあきらかになった。さらに、京師大学堂からは、日本とは別に10名の学生を英仏等に派遣した²⁶。日本へ派

²⁵ 張百熙『奏派学生赴東西洋各国遊学折』、『光緒朝東華録』第5冊、中華書局、1958年、5113-5114頁。

²⁶ ヨーロッパに派遣された16人は余同奎、何育傑、周典、潘承福、孫昌火巨、薛序鏞、林行規、陳祖良、華南圭、鄧寿佶、程経邦、左承詒、範紹謙、劉光謙、魏渤、柏山で

遣する学生が専攻する学科とヨーロッパへ派遣する学生の専攻を調整したので、留学生の割り当てられていない専門もあったようである。例えば、日本へ派遣した学生のうち、工科大学では応用化学・電気工学の二科を専攻する留学生がいるのみで、土木・機械等の学科を専攻する者がいなかった。それは、英仏留学生の中にそれらの学科を学ぶように割り当てられた学生がいたからである²⁷。

以上を総括して考えると、京師大学堂の留学生派遣事業も、日本をモデルとした教育政策の一環であった。清政府は日本での人材育成の経験を参考にして、教育近代化のために京師大学堂を中心にした人材を育てようとした。その一連の事業に師範館の総教習になった服部の貢献が大きかった。

次に、京師大学堂からの留学生たちの一高での留学生生活を考察し、主に、彼らに対する数学の教育プログラムや留学生に数学を教えた教員、授業中に使われた教科書を中心に紹介する。

3. 初期京師大学堂派遣留学生の一高での勉強

初期の京師大学堂からの留学生派遣は、清末の中国における最初の官費による多人数の派遣であり、その派遣政策の策定には日本人教員が関わり、派遣の目的もはっきりしていたことが特徴である。

1904年1月17日に杜福垣、王桐齡ら27名の留学生が東京に到着し、ただちに第一高等学校の寄宿舎南寮に入った。

さらに2月1日に陳治安、2月4日に曾儀進と蕪振潼、唐演は3月17日に唐演が到着し、入寮した。これらが京師大学堂からの官費留学生31名の日本に着いた具体的な日時の例である。

私費生の二人に関しては、服部字之吉の書いた二通の手紙が書かれた内容

ある。

²⁷ 京師大学堂の初期留学生派遣事業では、日本への留学生に应用化学・電気の科目を勉強させ、英仏への留学生に土木・機械等の科目を勉強させるように決めていた。日本留学生とヨーロッパ留学生の専門の違いやどのような人々が、英仏日の学科の教育レベルを判断し、それらの配分をしていたのかに関する調査は今後の課題にしておきたい。

と、一高側の1月に実施した学力試験を受けていることから、官費生27名と一緒に出発し、同じ時期に一高に着いたことがわかる。

一高側は1月20日に留学生の事業に関する事務員、教員及び医員を決定した。留学生監は一高教授谷山初七郎が担当し、教務のことを一高教授伊津野直が担当するように定めた。

留学生に対する学力の測定試験

入学した京師大学堂派遣の留学生に対し、一高に着いた後の1月23日から25日の三日間に日本語文法、日本語講読、英語、ドイツ語、フランス語、歴史、地理、数学などの諸科目について学力試験を行い、試験の日本語の成績により、31名を「甲、乙、丙」組に分けて授業をするようになった。

例としてその数学の試験問題は次のようなものである²⁸。試験問題は算術、代数、幾何学、三角法の四種類であった。

算術の問題は、

(1) $1 - \frac{1}{2} - \frac{1}{4} - \frac{1}{8}$ 。(2) $41\frac{2}{3} \div 1\frac{2}{3}$ 。

(3) 甲乙丙ノ三人アリ資ヲ合セテ商業ヲ営ミ利潤2500圓ヲ得タリ。但シ三人出ス所ノ資本、甲ハ2000圓、乙ハ3000圓、丙ハ5000圓ナリ。利潤ヲ配分スル法ハ如何。

代数学の問題は、

(4) $\begin{cases} x-2y=5 \\ 2x-y=4 \end{cases}$ コノ方程式ヲ解ケ。(5) $2x^2+3x-5=0$ コノ方程式ヲ解ケ。

幾何学の問題は、

(6) 三角形ABCノ内ノ一点ヲPトスレバ $PB+PC < AB+AC$ コレヲ証明セヨ。

(7) 圓PABニ於テOヲ心トスレバ角APBノ二倍ト角AOBトハ相等シ。コレヲ証明セヨ。

²⁸『清国留学生関係公文書・書翰目録 明治37年-明治38年』参照。

三角法の問題は、

- (8) 凡テ三角形 ABC ニ於テハ $\sin A:\sin B=a:b$ ナルコトヲ証明セヨ。
 (9) 右ノ三角形ニ於テ $\sin B$ 、 $\sin A$ 、 $\tan B$ ノ価各々若干。

である。

数学の学力試験問題をみると、その時代の中学校レベルの内容であったことがわかる。一高側は各学力試験を担当する委員を定めた。数学の試験の点数は40点満点(算術、代数学、幾何学、三角法各10点)で景定成、馮祖荀、施恩曦の三名が23点の最高得点を得て、それ以下は16点、12点、8点、5点、3点であり、さらにまったく答えなかったため0点を得た学生もいた。

試験用紙に、留学生たちの書き残した記述があり、京師大学堂にいた時の数学教育の程度が分かる。例えば、6点を取った葉克学支は解答用紙に「命分初学」と書いている。すなわち、「分数の初歩を学んだ」というのである²⁹。また、算術の問題だけ4点を取った周宣は「初歩的な数学を勉強した」と書いているし、3点を取った陳繼鵬が解答用紙に「幾何代数三角学はまだ学んでいない」と書いている。さらに0点を取った王蔭泰は「初学加減法、所出之問題不能算」、すなわち、「初歩的な足し算と引き算を学んだだけなので、出題された問題を解くことができない」と解答用紙に書いた。

40点満点の数学の試験で最高の23点を取っていることから、後述するように中国の近代史上最初の数学者・数学教育者の一人となる馮祖荀が、一高に入学した時期から、数学を得意としていたこともわかる。また、私費留学生である施恩曦の成績も、服部の推薦したとおり優秀なものであったことをわかる。ちなみに、施恩曦は二つの英文和訳の試験でも満点をとり、最高評価の「甲」を得て、「英語も一寸出来」ることは確かであった³⁰。

一高側は、主に学生たちの日本語で授業を受ける能力に関心があったため、日本語の成績により甲、乙、丙の三組に分けて、留学生たちの日本語のレベルアップに力を入れる方針を採っていた³¹。

²⁹ 中国の古代数学で、「命分」とは分数のことを意味する。

³⁰ 東京大学駒場図書館『清国留学生関係公文書・書翰目録』のなかの「03 明治37年1月7日付狩野亨吉宛服部字之吉書翰(留学生1-6)」参照。

当時留学生に対する日本語の授業は、文法の授業を「日語」、文章を読む授業を「日文」として、二科目に分けて行っていた³²。

留学生の学習生活

留学生たちが一高に到着したあとの二ヶ月間は、主に日本語の教育が中心になされていた。

上述した三組ともに2月6日から日語と日文及び体操の授業が始まった。その時の教員と毎週の授業時間数は以下のとおりである³³。

日本語教育関係の主任を務めたのは東京外国語学校（現在の東京外国語大学の前身）の教授、文学博士の金沢庄三郎、日本語の文章を教えたのは、台湾協会学校の講師金井保三と東京外国語学校の講師竹内修二、日本語の文法を教えたのは一高教員の杉敏介であった。また、体操教育関係の主任を務めたのは後備歩兵少佐の堀井孝澄、体操を教えたのは一高教員の小池常宗、米田源次郎、大沼浮蔵の3名であった³⁴。

日本語の授業は主に教科書により、留学生が分からない時、「清語ヲ用イテ説明ヲ加フルコトトセリ」³⁵という。すなわち、教員が中国語で説明していたのである。

1904年4月になって、留学生たちの日本語理解力が高まってくると、新たに歴史、及び数学の二科を加え、法科、文科志望者には歴史を履修させ、理科、工科、農科、医科、及び法科の理財統計、文科の哲学を志望する者には数学を履修させた。その上で余力のある者には歴史、数学の二学科を兼修させるようにした。教育の方法としては、授業中は日本語で講義し、理解が難しい部分は教員らが中国語に訳していたという³⁶。

一高本科への編入に備え、1904年7月13日、夏休みを利用して留学生を軽井沢に引率し、日本語習熟も兼ねて特別授業を行った³⁷。そして1904年

³¹ 『清国留学生関係公文書・書翰目録 明治37年-明治38年』参照。

³² 『自明治三十六年至明治四十五年 外国人入学関係書類 第一高等学校』参照。

³³ 同上、参照。

³⁴ 同上、参照。

³⁵ 同上、参照。

³⁶ 同上、参照。

³⁷ 同上、参照。

9月14日の一高の入学式には留学生たちも列席し、この日から正式に一高の学籍に編入した。そして各自の志望した学科に合わせたクラスで授業を受けるようになった³⁸。具体的に言えば、文科大学進学志望者は3名、理科大学進学志望者は7名、法科大学進学志望者は9名、法科大学兼文科大学進学志望者は1名、農科大学進学志望者は2名、工科大学進学志望者は5名、医科大学進学志望者は3名、高等商業学校進学志望者は1名であった。

ところが、1904年9月から学科変更する者、留学年限の延長あるいは短縮を希望する者が続出したため、一高側は同年の11月までに何度も調整しなければならなかった。狩野宛の服部の手紙によれば、その際一高側は京師大学堂側と常に相談していたことがわかる。

1904年12月からの留学生たちの学科目には、日本語、英語、数学、ドイツ語、歴史、鉱物学、図画、体操などの科目があって、学生たちの多くは自分の選んだ学科で決められた科目を履修していたが、少数の人は個人の状況に基づいて学習科目を選んでいった。

留学生たちの京師大学堂との繋がりと進学状況

一高側は1905年1月25日より30日まで、学業の合間に留学生を皇居、日比谷、浅草公園、各省の官衙、上野公園、動物園、博物館の見学に行かせている。

1904年から、呉振麟と範源廉の二人が監督に任命されている。彼らから留学生にたびたび指示があり、また清国駐日大使楊樞が1904年中に2回ほど留学生の状況を視察し懇談した。服部宇之吉と巖谷孫蔵は留学生に関する案件にその後も関与し続け、日本に帰国した際にしばしば一高を訪れて留学生の状況を調査した。たとえば、巖谷孫蔵は軽井沢における夏休みの集中講習を視察した。

1905年3月からは、留学生が日本人学生との交流を密にするように、留学生を南、北、中の三寮に分配し日本人の学生と雑居させることにした³⁹。

明治37年(1904)の組別学科課程表⁴⁰と明治38年(1905)の学部別学

³⁸ 同上、参照。

³⁹ 『清国留学生関係公文書・書翰目録 明治37年-明治38年』参照。

⁴⁰ 前掲書『第一高等学校六十年史』490頁。

科課程表を見ると⁴¹、彼らのスケジュールがかなりハードであったことがわかる。一高から文部省への報告書の「衛生事項」一覧に記録されている学生の病気の中で、一番多いのが「神経衰弱症」だったことにも注目すべきである⁴²。

留学生 33 名の一高卒業後の進路をみると、東京帝国大学法科に進学した者が最も多く、12 名に達し、そのほかに医学科に 1 名、工科に 5 名、文科に 3 名、理科に 5 名、農科に 2 名が進学した。5 名は京都帝国大に入学した。

留学生たちの「一高」での勉強——数学を例として

留学生たちの「一高」の勉強の実態を明らかにするため、留学生たちが一高で受けた数学教育の内容、担当した教員の実態を考察する。

1904 年 4 月から 9 月の間に留学生に対する数学の授業を行ったのは、高等商業学校の教授の澤田吾一であった。それ以降は当時の一高の数学の教員が担当した。1904 年 9 月から 1905 年 3 月までの間は、数藤斧三郎、保田棟太が留学生たちに数学を教えた。1905 年 4 月から 1906 年 3 月までは保田棟太、数藤斧三郎、藤原松三郎らが数学の授業を担当した。1906 年以降に、留学生たちに数学を教えた教員には窪田忠彦、内藤丈吉、松下徳次郎らがいる⁴³。

留学生たちが使っていた数学の教科書は、日本人学生と同じクラスになる前は、主に授業をした教員によって留学生の状況に基づいて決められていた。その時の教科書は以下のようなものであった。1904 年夏休みの軽井沢における特別講習澤田吾一は菊池大麓の『幾何学小教科書』を使って一週間の授業を行った⁴⁴。9 月以降は留学生たちの特別授業のうち、一部一年一の組、二の組、四の組は寺尾寿の『代数学小教科書』、林鶴一の『幾何学教科

⁴¹ 前掲書、494 頁。

⁴² 前掲書、493 頁。

⁴³ 一高同窓会編『第一高等学校同窓生名簿』（平成 7 年版）「職員」1-30 頁。日本の数学 100 年史編集委員会『日本の数学 100 年史』（上）岩波書店、1983 年、243-244 頁。東京大学駒場博物館資料に保存されている旧制第一高等学校の資料、前掲『第一高等学校六十年史』483-514 頁を参照。

⁴⁴ 夏休みの集中講義は主に、留学生たちの数学の能力を速やかに高め、日本人学生と同じクラスになる時、困らないように配慮した特別な講義である。



図5 留学が一高で使った数学の教科書 図6 留学生たちが訳した日本の数学教科書

書』、ガウスの『対数表』、延長二部と三部の留学生たちは藤沢利喜太郎の『小代数学教科書』を使っていた。数学の成績が良かった二部一年一の組の馮祖荀、蘇振潼、施恩曦の3人は、日本人学生と同じく藤沢利喜太郎の『続初等代数学』、トドハンター『平面三角』などの教科書を使っていた。

一高で留学生たちが使っていた以上の教科書のほとんどは中国語に翻訳され、20世紀初頭の中国で使われた。翻訳者の多くは一高に留学した経験ある人々である。

服部が関与した京師大学堂の留日学生は中国における理科教育の近代化に大きな影響を与えた。そのなかで、馮祖荀は代表的な例である。

服部の手紙を読むと、1904年の一高入学者の名簿に馮祖荀（1880-1940年）の名前が見られる。馮祖荀は中国における著名な数学者の一人であり、数学教育者としても中国の近代数学教育史における代表的な人物である。

これまでの馮祖荀に関する研究では、一高卒業後、京都帝国大学に入学した経緯に関しては不明であったが、駒場博物館の資料のなかから、馮祖荀が一高に留学していた時の状況と一高卒業後、京都帝国大学に入学した過程を詳細に記録した文書が発見された。すなわち、馮祖荀は1902年京師大学堂に入り、その後日本への留学生に選ばれ、1904年に初来日して一高に入学した。一高同窓生名簿によると、1907年に理科を卒業した。そして1908年

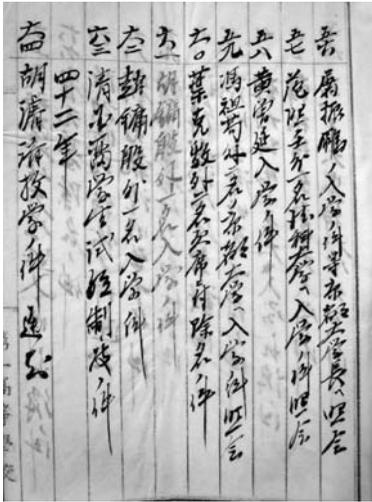


図7 馮祖荀一高資料



図8 馮祖荀大学堂数学科主任資料
(筆者の調査によって初公開)

に京都帝国大学に入学したのである。

馮祖荀は1910年から1911年の間に帰国し、浙江兩級師範学堂に赴任し、その後間もなく北京大学に務めるようになった。そして、1911年以降何回も北京大学の数学学部の主任を務めた。

19年には北京大学の数学門は数学学部に変更され、馮はふたたび数学学部の主任に任命された。彼は関数論、微分方程式論、変分法、集合論などの講座を担当した⁴⁵。

馮祖荀は北京大学数学学部の他にも、北京師範大学、中国東北大学の数学学部の主任にもなり、中国の近代数学教育の発展に貢献した⁴⁶。

4. 終わりに

清末の旧来の教育制度を改革する具体的な政策として、文武学堂の設置、

⁴⁵ 北京大学編『北京大学校史論著目録索引』北京大学出版社、2006年、348頁。

⁴⁶ 丁石孫・袁向東・張祖貴「北京大学数学系八十年」『中国科技史料』、1993年、14(1)、74-85頁。

科举制度の改革、海外留学の奨励などの政策が建議された。海外留学のなかでもっとも重点を置いた政策としてその実施が提唱されたのは、日本へ留学生を派遣することであった。

日本での遊学を勧めている理由は、日本と中国の地理的な距離が近く、交通費があまりかからないことから、留学生を多数派遣できること、日本語は中国語と近いので覚えやすいこと、日本と中国は文化的にも近いので比較考察が容易であること、日本はすでに西洋の重要な学問を輸入し、消化しているので、中国が日本から西洋の文化を習えば、直接西洋に学ぶのに比べて半分の時間で倍以上の効果をあげることができること、などである⁴⁷。

このような時代背景のもと、20世紀初頭の清末中国では日本留学が盛んになったのである。

日本留学について考察するには、日本に設立され、清末の留学生を受け入れた各種の教育施設を鳥瞰することは必要である。筆者はすでに成城学校、東京大同学校（清華学校）などの学校に研究の焦点を絞り、その学校の留学生に対する数学の教育状況を紹介し、清末の留学生が日本で受けた西洋数学の教育について議論した⁴⁸。

成城学校は軍人志望の学生を受け入れた学校の代表であり、清末からもっとも長い期間にわたって中国からの留学生を受け入れた。また、東京大同学校（清華学校）は清末の変法維新派と関連があった。

以上見てきたように、服部の京師大学堂の日本留学事業を研究することにより、第一高等学校に留学した清末のエリートな留学生たちの日本での教育、そして帰国後の業績を明白にすることができる。

「一高」は東京帝国大学の予備校として、清政府から直接派遣された留学生を受け入れ、両国の政府に重用視されていた学校であった。一高での教育を重点的に検討することにより、先行研究で見落とされていた清末の留学生の数学教育に関する状況、20世紀初頭における日本の数学界の中国への影響を分析することが可能となった。

⁴⁷ 張之洞『勸学篇』外篇「遊学篇」参照。

⁴⁸ 薩日娜「成城学校における中国人留学生の教育——数学の教育を中心に」、『日中数学教育研究会論文集』、2007年10月、67-74頁。または、「東京大同学校的留学生数学教育」『数学史研究』通巻207号、2010年12月、1-13頁。

20世紀初頭の日本で留学生を受け入れた教育機関として、成城学校と東京大同学校などの学校のほかに、宏文学院、東京同文書院、数学専修義塾、成城学校、京北中学校、大成中学校、正則英語学校、正則予備学校、研数学館、明治大学経緯学堂などがあった。留学生の多くは最初にこれらの学校に入学し、修了後第一高等学校、早稲田大学清国留学生部、東京高等師範学校、東京高等工業学校などの入学を志望した。それからさらに帝国大学に進学した者もいた。

清末期には日本をモデルとした教育政策のもと、大量の留学生が日本にやってきた。しかし1906年になると、それまでの日本留学が「大量速成」を目指したものであったことに対して様々な問題が提起された。そうして1907年から1908年にかけて、留学生教育の「量から質への転換」がはかられた。日本留学最盛期の1906年には、一高にいた留学生はほかの大学よりはるかに少ない人数だったが、「速成教育」の時代が終わって1908年からの「量から質へ」の時代になると、ほかの大学の留学生数が大幅に減る一方、一高は特設予科を設置し、質の高い留学生の教育にさらに力を注いだのである。

この「量から質への留学生教育の転換期」の背景には服部宇之吉の様々な働きがあった。特に清末の理科教育の近代化には、服部が関係した留学生派遣事業だけではなく、服部らが京師大学堂で行った近代的な教育も重要な基盤を与えた。

服部ら日本人教員の到着した1902年から1908年の12月までに、師範科と予備科から450人の卒業生を社会へ送ったが、彼等の課程科目を担当したのは全部日本人教員であった。訳学館は光緒29年(1903)に設立された、語学を修得した人材を育てるための機関である。訳学館では数学は必修科目であり、外国語以外で時間数が最も多い科目であった。

そして、数学の内容を例としてみると、算術、代数学、幾何学、三角法などがあった。当時の教科書には日本の教科書が多く採用された。現在、中国第一歴史档案館所蔵の訳学館教科書目録では、数学書117種類の中に日本語の書物が101種類ある⁴⁹。

⁴⁹ 北京大学・中国第一歴史档案館『京師大学档案選編』北京大学出版社、2001年8月、326頁。

服部らの指導により、1907年には師範館学生第一期生104名が卒業し、ついで1909年に第二期生203名が卒業した。その間1904年に、「奏定学堂章程」の発布により、京師大学堂には予備科のほか、経学科、文科、法政科、格致科、農科、工科、商科などの分科大学、および通儒院が設置され、それにともない師範館は将来独立させて優級師範学堂に改組されることとなっていた。校長には範源廉が内定され、日本人教員も全員招聘される予定であった。

ところが、その後経費の不足から同学堂は設立計画の縮小を余儀なくされ、服部は1909年1月、師範館の日本人教員全員を率いて帰国した⁵⁰。こうして服部は、こうして京師大学堂の創始期に、六年間にわたり師範館にあって10名近い日本人教員を率いて学生の指導にあたり、そのかたわらで学校運営にも重要な役割を果たし、中国高等師範教育の基礎づくりに貢献したのである。

服部は帰国する際、その貢献は高く評価され、清政府は服部に外国人教習としては最高の二等第二宝星を授与し、さらに「文科進士」の称号をも奨給してその功績を称えた⁵¹。服部は日本の歴史上において、唯一の儒学の「進士」であった。

[謝辞] 本稿は2021年3月に開催した東京大学—北京大学共同研究教育プロジェクト「東アジア藝文書院(EAA)」主催の国際シンポジウム「一高中国人留学生と101号館の歴史」に参加した時に発表した内容に基づき、その後の北京でのさらに新しい資料調査も加味して書いたものである。本稿の完成にあたって、東京大学総合文化研究科の岡本拓司教授、EAAの石井剛教授、宇野瑞木特任助教に感謝の念を申し上げたい。初稿の日本語をご詳細に修正して下さった四日市大学の名誉教授、四日市大学関孝和数学研究所の副助長小川東教授に深くお礼を申し上げる。資料調査や研究には中国・国家社科基金項目(17BZS123)、上海市浦江人材資助項目(2019PJC070)、東京大学のEAA研究プロジェクトの援助を受けた。

⁵⁰ 阿部洋前掲書、160頁。

⁵¹ 前掲「服部先生自叙」『服部先生古稀記念論文集』20頁。

中国人留学生と明治時代の東京遊学案内書

孫安石

1. はじめに

清末から民国時期に至るまでの中国人日本留学に関連する研究は、すでに多くの研究成果があり、近年では中国の各地方の省による留学生派遣に注目した研究や彼ら留学生が修学した分野別の研究、または、彼らが在籍した専門学校や大学別の研究などが発表され、目覚ましい進展がある¹。

ところが20世紀の初頭、中国人留学生の日本留学がピークを迎えた時期に、彼ら・彼女らが参考にした日本留学案内書については、まだ本格的な研究がなされていないように思われる。彼ら・彼女らはどのような日本留学案内書を参考にし、日本の学校を選び、異国日本での生活を始めたのだろうか。それ以前に、日本に向けて出発するにあたり、中国各地から芝罘、上海に集まった彼らは神戸や横浜に到着した後、どのような交通手段で東京に集結できたのだろうか。

筆者はかつて章宗祥『日本遊学指南』（浙江省立図書館所蔵版、1901年）を参考に、これらの問いに答えることを試みたが、その前提として明治時代には実は日本各地の地方からも多くの若者が東京に上京し、勉学することを目

¹ 孫安石・大里浩秋編『中国人留学生と「国家」・「近代」・「愛国』』東方書店、2019年、高田幸男編『戦前期アジア留学生と明治大学』東方書店、2019年などを参照。

指し、彼ら・彼女ら向けの各種の東京留学案内ともいふべき指南書が出版されていたことを忘れるわけには行かない。そこで、本稿ではのちに中国人留学生が大いに参考することになる東京留学案内書について簡単に紹介することにしたい。

2. 明治時代の「上京遊学」と東京遊学の指南書

明治維新後の近代日本において最も注目すべき改革の一つは、「教育」分野における新たな制度の実施であった。まず、1872年には新しい学制が發布され、6歳以上の子どもが教育を受けることが国民の義務として定められ、1879年には第一次教育令が、1880年には第二次教育令が公布され、学校は小学校・中学校・大学校・師範学校・専門学校に分けられ、富国強兵を担うべき人材の養成が急がれた。

例えば、中学校では、五年制の尋常中学校と二年制の高等中学校が全国に設置され、中でも公費をもって経営する尋常中学校は各府県に一校が設置された。しかし、すべての小学校卒業者が、中学校から、さらに高等教育を受けられる専門学校や大学へ進学することは競争も激しく、狭き門であった。中でも公立学校の他に、多くの私立学校が設置された東京への「上京遊学」は、地方の小・中学校を卒業した少年にとっては憧れの的であった。

吉田昇は、明治時代の教育の全貌を知るためには学校の教育制度や方法を知るだけでは不十分で、その時代の青少年がどのような意図をもって教育を受けていたのかを知らなければならないと指摘している。そして、その手がかりとして明治20年代までの上京遊学の形態を報知新聞社通信部編『名士の少年時代』（全三巻、平凡社、1930年）に掲載された合計169名を分析し、次のように記述している。

この169名のうち遊学を行ったものは154名で90%を超えている。このほか、正規の学校に入らないが家を出て上京したり、遍歴をしたりしたものが13名ある。この後者の場合も、地方に居ては偉くなれないと感じて家を離れ、実生活の修業のために出掛けたのであるから、その動機や年齢においてほぼ遊学と同じである。それ故、青少年が家を出るまでの状況を考える場合に、入学を伴わない遍歴や上京も一緒に含めて考

えて良いと思われる。これを含めると遊学を行ったものは167名で、98%となる。言いかえれば、2名だけが遊学や遍歴の記載を欠いている。しかも、この2名のうち1名は、他の資料によって遊学したことが確実なので、ほとんどすべてのものが遊学や遍歴のために家をでていることがわかる²。

表1 日本の留学案内書（明治時期、一部）

編著	書名	出版年月	出版社
下村泰大編	『東京留学案内』	1885年7月	春陽堂
下村泰大編 和田民之助増補	『増補 東京留学案内』	1885年10月 再版	春陽堂
須永金三郎	『東京修学案内』	1893年7月	東京堂書房
博文館編輯局	『官公立諸学校 改訂就学案内』	1904年7月	博文館
大月久子編	『新撰 東京女子遊学案内』	1904年9月	文学同志会

表2 少年園発行の『東京遊学案内』の各年度改定版

編著	書名	出版年度	発行所
黒川文淵編	『明治23年 東京遊学案内』	1890年	少年園
黒川文淵編	『明治24年 東京遊学案内』	1891年	少年園
黒川文淵編	『明治25年 東京遊学案内』	1892年	少年園
黒川隆一編	『明治26年 東京遊学案内』	1893年	少年園
黒川俊隆編	『明治27年 東京遊学案内』	1894年	少年園
黒川俊隆編	『明治28年 東京遊学案内』	1895年	少年園
黒川俊隆編	『明治29年 東京遊学案内』	1896年	少年園
少年園編	『明治30年 東京遊学案内』	1897年	少年園
少年園編	『明治31年 東京遊学案内』	1898年	少年園
少年園編	『明治32年 東京遊学案内』	1899年	少年園
少年園営業部	『明治33年 東京遊学案内』	1900年	少年園
少年園編	『明治34年 東京遊学案内』	1901年	少年園
少年園編	『明治35年 東京遊学案内』	1902年	内外出版協会

² 吉田昇「明治時代の上京遊学」、石川謙博士還暦記念論文集編纂委員会編『教育の史的展開—石川謙博士還暦記念論文集』大日本雄弁会講談社、1952年、431頁。

ここで、日本の地方から東京を目指すこれら青少年のための遊学案内書が必要になるのは言うまでもなく、その先鞭をつけたのが、下村泰大編『東京留学案内』（1885年）であり（表1を参照）、後に留学案内書のベストセラーになったのが、当時の有力な少年雑誌である『少年園』（1888年に創刊）の版元として知られていた少年園社が発行した『東京遊学案内』であった（表2を参照）。

3. 東京に留学する少年の心得——下村泰大編『東京留学案内』と少年園編『東京遊学案内』

ここでは、地方から東京に留学する少年の心得を論じた下村泰大編『東京留学案内』（1885年）と少年園社が刊行した『東京遊学案内』（1890年）について簡単に紹介する（図1と図2を参照）。

まず、下村泰大編『東京留学案内』はその冒頭において、東京へ留学する若者が注意すべき点から書き始めている。

地方より遠く筈を負ふて都下に遊学せんとする者の心得べきこと様々あり、是等の事柄を一向に頓着せずして、只一東京々々とのみ、口に称へ、心に思ひ、東京さへ出れば、袖手を居るも大学者に成らるるの如く考えるは大いなる誤解にて往々費用と時日とを空しく損耗し去るのみに止まらず甚だしきは将来の目的を誤りて復た如何ともすること能わず³。

それでは将来の目的を達成するために大事なことはなんだろうか。下村泰大は、一日の計は鶏鳴にあり、一年の計らいは春季にあり、一生の計らいは若い時にありという古人の言葉を引用し、とくに、以下の5点に注意しなければならないと説く。

- (1) 地方で学び得るものはなるべく地方において実力を養成すること。
- (2) 遊学した後は、確固不変の「目的」を定め、最後まで進路を維持すること。

³ 下村泰大編『東京留学案内』春陽堂、1885年、1頁。

- (3) 自分が専門とする学校を慎重に選ぶこと。
- (4) 遊びと放蕩に流れないこと。
- (5) 撰生に注意すること。

確かに東京の教育環境がその他の地方に比べれば、良く整っていることは言うまでもない。しかし、下村泰大は、次のような点に注意すべきであるとする。

ことに東京は全国の主府にして、政令法度の之より出る所、民庶衆多、市街殷富実に諸般の人生事業に取りて最も便利の中樞と謂うべし。随て教育の田園、即ち学校に至っても其数甚だ多く、大学専門学校中学校等各所に聳立し、小学校の如きは数百十の多きに至る。即ち、我国文学の淵藪と曰ふも、決して其虚ならざるを知るなり⁴。

ところで、学校の裏の事情を覗いてみれば、その現状は惨憺たるもので、教育の真面目さとはあまりにも距離がある、と下村泰大は指摘する。

蓋し官立若しくは公立に属するものは無論憂慮すべき者なしと雖も、新設の私立諸学校中には往々其設立目的一に射利の点にありて、復た世益の如何は措て問はざるものあり。〔中略〕頃日府下に於て何学院若しくは何学館と称し、新に大館大校を建築し、大いに生徒を募集する如き有様を諸新聞に広告し、或は此度に限り無束脩にて生徒若干名を限り入学を許すとか、又は院外生徒地方独習員を募集するなど広大宣告し、巧みに虚勢を張らんとするものあり⁵。

下村泰大によれば、これら学校は、下宿屋の二階に間借りし、職員兼教師の取次の方が一名いるのみで、その学則を聞けば、本館別課学云々の活版摺り一枚の紙があるのみで、広告は世人を騙し、利益を貪るためのものに他な

⁴ 同上、2頁。

⁵ 同上、3-4頁。

図1 下村泰大編『東京留学案内』
(1885年、春陽堂)の表紙



(出典：日本国会図書館デジタルコレクション)

『増補 東京留学案内』(春陽堂、1885年10月再版)の奥付によれば、同年7月に初版(総頁94)を発行してからわずか3ヶ月後の10月に増補再版(総頁190)を発行していることから一定の反響があったことを推測することができよう(表1を参照)。

『増補 東京留学案内』が発行された1885年から5年後に、明治時代の少年向けの代表的な雑誌を発行する少年園社は、黒川文淵編による『明治23年 東京遊学案内』(少年園、1890年)を発行している。この『東京遊学案内』は、毎年春と秋に改訂しながら1902年まで刊行された。同書は日本国内だけではなく、中国にも大きな影響を与え、章宗祥編『日本遊学指南』は、その参考書目の中に『東京遊学案内』を3種類も参考していることを記しているから、このような留学案内書が日本はもちろん、中国の若者にも大きく歓迎されていたことを窺い知ることができる⁶。

らないという。

それでは、このように派手な広告で学生を騙す、狡猾な学校を見抜くためにはどうすれば良いのだろうか。そこで、下村泰大は、『東京留学案内』の記述を参考にし、学校の詳細な規則を確認し、内部の事実を聞き、慎重に学校を選択すべきであると助言する。

以上、下村泰大編『東京留学案内』(1885年)が紹介する「留学者の注意」を中心に、その内容について触れたが、『東京留学案内』が注目される理由は、同書が指摘するこれらの注意事項が以降、明治時代の日本国内で発行された各種の留学案内書、すなわち、少年園が発行する各年の「東京

⁶ 章宗祥編『日本遊学指南』、浙江省立図書館所蔵版、1901年の「凡例」と「引用書

黒川文淵編『明治23年 東京遊学案内』は、凡例の部分で同書の刊行目的を次のように記述している。

本書は地方少年が東京遊学の際に於て其の心得と為るべき事項を編纂したるものにして、まず、上京の注意を述べて、前途の方針を決定せしめ、次に東京諸学校の規則の要領を掲載してこれが選択就趨に便にし、最後に主なる学校の入学試験問題を掲げて試験科目の程度を示せり⁷。

同書が毎年版を代えながら刊行され多くの少年に歓迎された理由は、実は入学試験問題を掲載していたことが大きいですが、本稿とは直接、関係がないのでここでは割愛し、続いて同書の執筆の方針についてみてみる。

本書は新上京の遊学者の為めに、最も親切痛快に社会の大勢を論斥し、前途の方向は将来の社会の大勢に依て定むべき事、学科の選択は将来の事業の性質に依て決すべき事、其の目的を定めずして漫然上京するの不可なる事、上京の後学校を屢々変更するの不利益になる事、其他今日一般の学生社会の通弊を挙げて是等の覆轍を避くべき事を最も丁寧に論述せり⁸。

黒川文淵は、「第一章 発端」の中で、当時の時代認識として、東京が日本の各地から留学の聖地として注目される理由を、3点述べている。

まず、一つ目は、東京の発展ぶりとすべてを包み込む広さである。同書によれば東京は、西北は本郷、青山から東南は品川に至るまで、市街が繁盛し、住宅は軒を並べ、高樓は雲に交わり、道路は車馬の往来が飛ぶが如く、夜になると不夜城のように明るい。そして、銀行、諸会社、各商店が中央の市街を占め、新しい機会と製造所、工場などは四方に広がり、新奇精練の技巧をどこにでも目の当たりにすることができる場所であった。

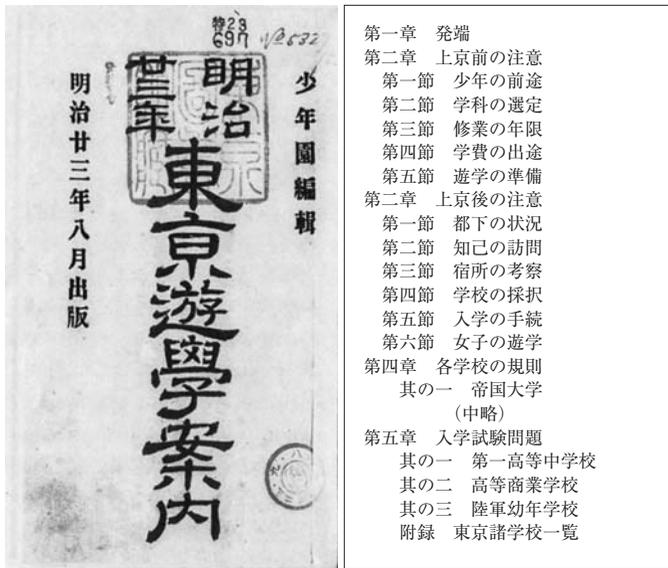
二つ目は、東京が全国の商業の中心地であることである。上野より仙台、

目」の記載を参照。

⁷ 黒川文淵編『明治23年 東京遊学案内』少年園、1890年、1頁。

⁸ 同上、1頁。

図2 黒川文淵編『明治23年 東京遊学案内』の表紙と目次（一部）



(出典：日本国会図書館デジタルコレクション)

高崎に達する鉄道が開通し、東北地方と東京の商況が活発になり、また、新橋から大阪に達する列車が通じ西南地方が結ばれたことで、東京は全国商業の中心となり、工業などの製造業が繁盛することになった。

是に於てか地方より東京遊覧と名を附して伍々参々隊を組み、群をなして上京する者、月に幾万といふ数を知らず。本年に至り四月一日内国勸業博覧会の会場となるや、老を扶け幼を携へ西より東より都下を指して参集する者雲の如く、汽車発着毎に各停車場は殆ど山を築き、博覧会場は見物を以て充滿するの勢い⁹。

この内国勸業博覧会の見学を終えた人々は、東京の見学を終えてそれぞれ地方に帰ったあとは異口同音に銀座の壮麗さを自慢し、上野と浅草の公園の賑わい、帝国大学と愛宕山の遠景、パノラマ、鉄道の便利さを喋々と珍しげ

⁹ 同上、2頁。

に人々に聞かせていたことを考えれば、若者が東京に憧れることがよく分かる。

そして、三つ目は、東京が前項の政治の中心であり、皇城が位置し、華族が居住し、中央政府、内務、外務、海軍、陸軍、司法などから内閣、枢密院、参謀本部が置かれていたことである。これらは地方の人々の眼を驚かすには十分であった。また、帝国議会が開設し、全国各地で選ばれた国会議員が参議院に、貴族院に集まり、帝国四千万の同胞に代わって政務を議論するとなると、若い少年にとって東京遊学へ憧れが夢になったことがわかる。

しかし、部外者からみてこれだけ憧れる東京遊学も注意すべきことは多い。同書はその一端を、「第二章 上京前の注意」として取り上げている。まずは、現在、東京にいる少年諸子、もしくは地方にいる同胞諸子が前途の方向を定め、最終目的を立てて置くことが重要であるとする。一部の人は、明治の時代を実業の時代として、殖産のことに勉めたものの、流行の流れが代わり、政治の景気が盛になると、忽ちこれまでの学科を捨て政治の道に没入する、あるいは文学の流行が凄まじいことをみて、今度は文学家を模倣するが、このようなことがあってはならないと注意する。そして、明治時代の従来傾向をみれば、政治法律の研究を前途の目的にする人が最も多く、文学、理学、医学を志す者がこれに次ぎ、殖産と関係のある農、工、商業の学科を顧みるものはまだ少ないが、一身の利益のために政治を目指しては行けない、とし次のように続ける。

諸君飽迄も国家の為めに大いに経綸の策ありて之を實行なさむが為め其身を犠牲に供するの覚悟ありとせば格別なれども、仮りにも一己自身の為に利達を図らむとする者は決して政治界に身を置く勿れ。昔は政治世界に在る者、食前方丈、肥馬輕裘、封祿豊かにして万民の欽慕羨望する所たりしが、今より以後は代議士たる者、政府の当局者たらむ者は、俸祿過少にして支出百端、其身代を棒に振るの決心あるにあらずむば、〔後略〕¹⁰。

¹⁰ 同上、25頁。

それでは、一時の風潮に雷同し、政治熱に浮かれてはその身を誤ることになり、それを避けるために文学の世界に逃げるのはどうか。若い人は、子供のときから教師、博士、学校の教科書の著述家を目指したり、崇拜したりした経験が皆が有しているから、学者になることを一時期でも夢見る人も多いだろう。しかし、才能がある人であっても将来に必ず学者となり、世界を驚かせる発見ができるわけではなく、学術の世界において真理を追求することは、功名と営利を顧みないことを意味するとして、文学を目指すことについても同じく厳しい評価をしている。それでは若い少年が目指すべき前途はどこなのか。同書は、殖産の事業である平民世界に活路を見出すことを提案する。

維新以来我邦の有為俊秀の士は皆競うて頻りに政府の部内に集り、政府部内にこそ人材を網羅したる勢あれ、広く民間を見渡すに殖産世界は依然たる封建時代の旧組織にして民業日々に簾れ、商況月に衰へ、数年以来、至る処に不景気という歎声を聞かざる所なきが如く、今や其不振の景況はほとんど極端の行きに達して用意に挽回すべからざる危急の形勢なるにあらずや¹¹。

そして、殖産の発展が遅れた原因の一つは、政府に人材が集まりすぎたことにあることを鑑み、若い有為な人材が平民世界に足を踏み入れることを提案し、ワットやスティーブンスンの蒸気機関が世界に与えた利益を思い出してほしい、と論ず。

若い人の前途が定まったならば、次に重要なことは、学ぶ学科を選定することにある。そこで、衣食、機械、物品の一切に関わる分野が経済学であり、経済と産業は供給と分配の二つの系統が重要で、供給には農業、工業などの区別が、分配には国内貿易と外交貿易の区別があるとし、日本を富強にし、大帝国に作る気概がある人は、工科大学、工業学校、農家大学、商業学校などで学ぶことになることと例示している。また、国家防衛のため陸海軍に入門することを目指す人もいるが、志願者は自己の生命を国家のために犠牲にする覚悟が必要であり、医学と衛生の勉学を目指す人は公衆の保護という徳

¹¹ 同上、30頁。

目が、そして、文学と理学を目指す人は、真理を探究する厳正な心構えが、それぞれ必要であるという。

以上、黒川文淵編『明治23年 東京遊学案内』を通して、地方から東京に上京する若者に向けた注意すべき点を主に見てきたが、若者は将来の目標が決まり、学科の選定を終えた時に、東京留学の学費の捻出という難題に直面することとなる。

この学費の問題は実は、同書の「第二章 上京前の注意」においてもすでに指摘がなされていた。そこで黒川文淵は、古来の優れた業績を残した人々の経歴をみれば、幼少のときに苦勞し、辛酸をなめた人が多く、裕福な家庭に恵まれた人はむしろ少ないとしながら、古人の苦学を真似て上京はしたものの、現実は甘くなく、多くの人が糊口の道に窮することになれば、学業を成し遂げることはできない、ことを最も心配していた。なかには東京に上京したあとは、小学校の助教として住み込みの仕事を探せばよいと考えている人もいるが、小学校の教員、または学僕従者というのはその需要と人数に限りがあることはいうまでもないとする¹²。

依て東京に来学の諸子は、先づ第一に学費の出途を充分確かめたる上に於て、長きは七、八年、短くもせめては三、四年の学費を得べき見込みの立たざる中は、軽々しく決して遊学を出掛くべからず¹³。

だからこそ、黒川文淵はこの「第二章 上京前の注意」の「第四節 学費の出途」において、東京での修学中にかかる学費の総額を再び、概算として提示している。それによれば、東京に上京する地方の学生は、次の5項目の留学費用を必要とする¹⁴。

- (1) 東修—または入学金、受講料と呼ぶもので一回の支払いで済むもの。
- (2) 月謝、授業料—毎月、または毎学期に前納すべきもの。
- (3) 下宿料など住宅費—官立学校の場合は校内に比較的廉価な寄宿寮を設

¹² 同上、16頁。

¹³ 同上、30頁。

¹⁴ 同上、45-48頁。

置する場合もあるが、その他は寄宿舍の施設は広さも狭く、不潔の場合も多く、近所の下宿屋を使うと意外と出費がかさむ。

- (4) 教科書の購入費、文房具の新調費など—毎月入用な金額は少なくない。
- (5) その他の各種の活動—小遣い、運動会、寄席、薪炭油料、足袋、シャツ、帽子、冬夏休業中の帰省の費用。

このように東京留学の費用を合計すれば、年額で100円内外が必要で、留学が3年または5年と長くなり、ときに修学に成果なく、帰省することになることを考えると、東京への上京留学が容易なことではなかったことは良く分かる¹⁵。

4. 結びにかえて——中国人の日本留学案内書の底本

以上、本稿では明治20年を前後した時期の東京に留学する地方の少年の心得を記した下村泰大編『東京留学案内』と少年園編『東京遊学案内』を素材にその内容について紹介してきたが、ここで一つ疑問が浮かぶ。果たして、日本の若者向けに発行された東京留学案内書と中国人留学生がいかにして接点をもつようになったのだろうか。

これには中国人留学生らの手による翻訳書の存在が大きい。日本の地方の学生のために出版された各種の東京留学案内、または生活案内、受験案内は、中国人翻訳者の手によって直され、一部内容が脚色されながらも、その多くの内容が翻訳または、要約され、中国人の日本留学案内書として踏襲されたのである。

例えば、下村泰大が東京留学のときに説いた五つの注意、そして、黒川文淵が指摘した「学費」の調達という問題は、20世紀以降に刊行された中国人向けの日本留学案内書にはほぼ間違いなく、同じ趣旨のことが書かれており、このことは大いに注目されて良い。章宗祥『日本遊学指南』（浙江省立

¹⁵ 中国人留学生の経費の問題については、胡穎『清末の中国人日本留学——派遣と経費を中心に』、学術研究出版、2021年。また、孫安石「経費は游学の母なり」、大里浩秋・孫安石篇『中国人日本留学史研究の現段階』御茶の水書房、2002年を参照。

図書館所蔵版、1901年）は同書を著述する時に参考した書籍を取り上げているが、その中には発行年度が異なる少年園篇『東京遊学案内』を三種類、参考としたことを明記していることを見ても、明治年間に発行された東京留学案内書が、後の中国人の日本留学案内書の底本になったことがよく分かる¹⁶。

考えてみれば、日本の地方から東京に留学する学生に最も重要なことはまず、留学する目的を定めることであり、次に留学のための経費を確保することであったが、中国（清国）から異国の地である東京に留学する学生にも同じく、留学の目的や経費のことが重要であった。そして、中国人留学生が参考にすべきものは、日本留学案内書に限らず、日本ででの生活を案内する書籍も必要であった。そこに登場したのが啓智学社著訳『留学生鑑』（啓智学社、東京、1906年、中国語）であったろう。しかし、この啓智学社著訳『留学生鑑』は、堤秋水『學生之寶』（松声社、東京、1902年）を底本にし、その内容をほぼすべてにおいて忠実に翻訳していた¹⁷。

さねとうけいしゅうは、『中国留学生史談』（第一書房、1981年）の「第IV談 日本留学生活」において、1896年に18名の中国人留学生が来日してから1905年には科举制度の廃止とともに日本留学が急増し、1905年には1万名、また3万名という記録があるが、確かなところは8千余名という人数が見えると指摘し、中国人留学生が増加したことで日本留学案内書が次々と出版されたとする。そして、その主なものとして、姚錫光著『東瀛学校挙概』（京師版、1899年、同書の簡略版として『日本学校術略』、浙江書局版）、章宗祥『日本遊学指南』（浙江省立図書館所蔵版、1901年）、崇文書局編『日本留学指掌』（東京、崇文書局、1905年）、啓智学社著訳『留学生鑑』（啓智学社、1906年）、木川加一、田中亀次編『東瀛遊学指南』（東京、日華堂、1906年）を取り上げ、さらに、当時の中国人留学生の生活をうかがう書物として『日本遊学指南』と『留学生鑑』の内容を詳細に紹介している¹⁸。

¹⁶ 章宗祥『日本遊学指南』浙江省立図書館所蔵版、1901年、1頁。

¹⁷ 孫安石『『留学生鑑』（啓智学社、1906年、中国語）を読む』、加藤斗規他編『近代東アジアと日本文化』、銀河書籍、2021年。孫安石「清末の中国人留学生と『昆虫採集』」、そして浙江省『昆虫局』、神奈川大学人文学会『人文研究』、第203号、2021年を参照。

また、天野郁夫は、明治時代を前後した時期の近代日本の受験の世界を論じるなかで、『東京遊学案内』について、次のように紹介している。

明治二三年、現在の受検案内書の元祖とでもいふべき本が刊行された。「少年園」編集の『東京遊学案内』がそれである。以後、この本は毎年のように版を重ね、上京遊学をめざす若者たちのバイブルとなった。いまもそうだが、戦前期、とくに明治期には『文明開化』の中心である東京に学校と学生が著しく集中していた。藤原良毅の研究によると明治三五年の高等教育機関の在学者数全体にしめる東京のシェアは六三%、私学だけをとれば八〇%にも及んでいた。〔中略〕東京は近代的な職業やより高い社会的地位への移動をめざす、野心にもえた若者たちにとっての『聖地』だったのである¹⁹。

天野郁夫は東京が上京遊学を目指す日本の若者にとって「聖地」であったことを短い文章で見事に表現しているが、東京は日本だけではなく、20世紀前半の中国の若者にとっても目標となる「聖地」であったという表現を補う必要があるかも知れない。

¹⁸ さねとうけいしゅう『中国留学生史談』第一書房、1981年、104-105頁。

¹⁹ 天野郁夫『試験の社会史——近代日本の試験・教育・社会』東京大学出版会、1983年、231-231頁。

森卷吉と中国人留学生

高原智史

はじめに

2021年3月17日のシンポジウムでは、「森卷吉と中国人留学生」と題し、1929年から1937年まで一高校長を務めた森卷吉（1877-1939）を軸に据え、東京大学駒場博物館に所蔵されている資料から分かる、森の入学式での式辞や、茶話会での発言など、校内の様子を中心に取り上げた。本稿では、シンポジウム当日の報告をもとに、その後の調査でさらに明らかになったことを補いながら論じたい。

1. 森卷吉の経歴——一高校長になるまで

まず、森卷吉の経歴から始めよう。これに関しては、シンポジウム当日、ディスカッサントを務められた岡本拓司氏が『高校生のための東大授業ライブ 熱血編』¹で森卷吉について書いている記事を主として参考にした。森卷吉は、1877年、福井に生まれた。父は教師の卷耳、母はしげという。卷吉が十歳を過ぎた頃の1888年、眼病が悪化した父が職を辞し、キリスト教

¹ 岡本拓司「第一高等学校校長 森卷吉の生涯——やりゃあやれるんだ」『高校生のための東大授業ライブ 熱血編』東京大学出版会、2010年。

の伝道を始める。尋常中学校は家計の困難もあり中途退学し、両親の希望もあって、卷吉もまたキリスト教伝道を志して大阪高等英学校（現・桃山学院）に転学する。

英学校を卒業する頃には、教育家を目指すべく方針転換し、最終的には金沢の第四高等学校から東京帝国大学英文学科へと進んだ。高等学校では、英語や体操が得意な半面、歴史や地理、理科は苦手だったようである²。1901年の第四高等学校の『北辰会雑誌』29号に、森による記事「詩聖ヲルツァルスにつきて」が見える。これは、ワーズワースの思想と精神について書かれたもので、森の文学への傾倒を示すとともに、父からの影響もあって、すでにキリスト教信仰に目覚めていたものとして、ワーズワースの宗教的方面にも、「宗教に於ける渠が功績」として、触れている。

森は東京帝大でははじめ、小泉八雲の講義に惹かれたらしい。八雲の退職に当たって、夏目金之助（漱石）が東京帝大講師になるが、森は卒業の一年前に漱石の講義を受けている。最初は漱石に違和感を抱いたようだが、次第に魅了されるようになり、ついには漱石の自宅を訪ねて教えを請うほどになっていた。

森は1904年に東京帝大を卒業すると、一高の清国留学生の英語教師を囑託される。このことには、東京帝大と兼ねて一高の講師もしていた漱石の口添えがあったという。こうして一高教師となった森は、1908年には講師、翌年には教授となるが、そうしてからも留学生教育を囑託され続ける。また、森が講師となった1908年には、一高に留学生のための特設予科が設けられるが、森はその整備にも尽力した。その後、1922年から翌年にかけて米英独での在外研究³、1927年に松本高等学校校長として一高から転出ということもあった⁴が、そうして一高を離れていた時期以外は一貫して一高における留学生教育を担当し、1929年に一高に戻って、ついに校長となった。

² 駒場博物館所蔵資料「森卷吉成績表」（請求番号（11）Ⅰ 34）。

³ 1923年9月1日の関東大震災の報に接し、11月にはヨーロッパを離れ、12月18日に帰国している。家族も無事であった。

⁴ 駒場博物館所蔵資料「昭和二―六年 留学生書類」（請求番号（2）Ⅲ 82）。

森の決意

森は駒場博物館に残されているだけでも、1902年の「方針解決書」⁵と、1925年の「決意」⁶で、自らの人生の方針を整理している。1902年は帝大在学中、1925年は留学から帰国してすぐの頃である。岡本氏によれば、それ以前にも二度の決心をしている。一度目は大阪高等英学校在学中に、自ら正義を貫く人生を送ることを志したもので、英学校卒業の頃の1895年には、方針転換して教育家を目指すという決心をしている⁷。

1902年の方針解決書は、「文学的方面」、「政治的方面」、「社会的方面」、「宗教的方面」、「実業・商業的方面」、「教育的方面」の六つの各方面に分け、それぞれを検討した上でこれらの可能性を排除し、「断案」として、「窮境目的」を教育行政官としている。その上で、以後の勉学等の計画も立てられている。「教育方面」の中で学生教育として三つを挙げている。国民教育、中等教育、高等教育の三つである。後二者にわざわざ「女子を含む」とあり、特に高等教育にそれを付しているのは当時としては特異かもしれない。また「附」として廢疾者教育、慈善教育が挙げられているが、留学生教育、外国人教育は挙げられていない。日露戦争以前のこの頃は、日本に留学生が来るのではなく、日本から留学していく時代であったから、森の方針の中に留学生教育が含まれていないのは当然といえるだろう。

1925年の「決意」では、目的をやはり教育行政官としている。そのため的手段として、一に人格の向上錬磨を挙げ、只才気を以てなすべきにあらずとする。自己人格の発露を言い、社会と後進とを教化しなければ長久の精神的生命は維持しがたいとする。人格向上のためには古聖賢の心胆、哲学宗教の真諦に触れ、意識的努力が必要とされて、森の自らの人格高上のための方針は、そのまま、一高での生徒の教育方針に通じているものと思われる。

一高のアイデンティティ——人と場所

森の校長時代の功績としては、1932年の特設高等科の設立と、1935年の一高の駒場移転の二つが特に挙げられる。いずれも一高のアイデンティティ

⁵ 駒場博物館所蔵資料「方針解決書」（請求番号（11）H27）。

⁶ 駒場博物館所蔵資料「決意（1925年）」（請求番号（11）H25）。

⁷ 岡本氏前掲論文、104-105頁。

を刷新する重要な事件だった。学校が場所への人の集まりだとするならば、学校の場所が移転することや、生徒の人的構成が制度的に変化させられることは、学校とその生徒のアイデンティティに大きく関わると言えるだろう。まして、当時の一高というのは、皆寄宿制が基本である。皆が皆、毎日毎日、学校内の寮に籠って共同生活をしている。場所的にも人的にも非常に凝縮された濃密な関係性がそこにはあって、「一高生」という強烈なアイデンティティが形成されていたわけである。

多くの一高生にとって、そのアイデンティティにおいて圧倒的に重要なのは、学校自体ではなく、寮だった。寮生活を共にしているということが一高生のメルクマールとして最も重要であった。寮には、生徒による自治制が布かれていて、その下にあるということが、彼らの誇りの源泉だった。これに対して、駒場移転以前の特設高等科生や、移転後にさらに設置された特設高等科附属予科の生徒は、通学生とされた。寮生でない者、すなわち括弧付きでの「一高生」でない者が、一高に出入りするということは我慢ならないという形で、それを表向きの理由として、反感が留学生たちに向けられたのである。駒場移転後、特設高等科の入試に際しては、志願者に対して寮委員がわざわざ説示をしたようである。用紙に記入をさせ、その多くない欄のうちに、「皆寄宿制度を知れりや否や」、「入学の際には必ず寮に入り得るや否や」と、寮に関する事項が二つもあった⁸。一高生の寮生活に対する並々ならぬ意識がうかがわれる。

2. 支那留学生茶話会でのこと

時計の針を少し戻して、森が校長に着任した翌年、1930年に開かれた「支那留学生茶話会」について取り上げよう。1932年の特設高等科の設立以前のことである。一高への中国人留学生の関わり方としては、特設予科の生徒として在籍するか、それを修了して⁹、一高の本科に進み、日本人と一緒

⁸ 駒場博物館所蔵資料「第百三十九期（下）寄宿寮委員記録」（1936年、請求番号（7）B 2/45）。

⁹ 一高の特設予科を了えた後は、各地の高等学校の本科に進む道が開けていたが、進む先は一高に限られてはいなかった。

のコースで学んでいるかという時期である。さて、茶話会だが、来賓として外務省の職員や、中国人留学生のための予備校や支援団体の関係者が来ていた。留学生受け入れ事業が、文部省に加え、外務省にとっても重要な事業になっていたことは、本書の韓立冬氏論文で対支文化事業等に関連付けて説明されているところかと思う。森校長以下、一高教員が13名、日本人の生徒として寮委員が9名、本科在籍の留学生が9名、予科在籍の留学生が27名で、留学生は合計36名、総計69名が一高の教官会議室に集った。1908年以来、第三十一回の留学生茶話会であった。森は、自身の1904年以来の留学生教育との因縁から説き起こしつつ、今年度は「能力しかるべき方」を多数、すなわちここに参加した予科生27名を収容できたことを喜びにたえないとし、一高に入学した以上、奮励努力し、所期の目的を貫徹するように切望すると訓辞を述べている。生徒の代表格である、山本寮委員長は、友情を尊び、それは国境に隔てられるものではないとし、殊に在寮生は何ら遠慮することなく委員室に陳情してもらいたいとしている。東洋の平和に日中の提携の必要なこと、国情風俗習慣の違いも、寮において寝食を共にすることで、互いのそれを知り合い、握手していかなければならないことを言う。本科理科生の陳礼節は、茶話会に参加するのは三度目だとし、幸いにも落第しなければこれが最後の機会になるとしつつ、国情の違う関係上、入寮しても淋しさを感じるとしながら、外国人としてではなく、一般寮生として取り扱ってほしいと言う。予科生の邱咸仁は、自身が入学した際、寮は乱暴であるから入寮しない方がいいと勧める者もあったが、入ってみるとさほどでもなく、後輩にはむしろ入寮を勧めたと述べている。また、日本語能力や成績よりも、人物を見るべきだとする。本科理科生の張博亜は、予科時代に入寮して、性質上の違いから日本人生徒と話が合わないこともあり、また自分は周りよりも相当年を取っていて、早く寝たいのに、周囲が十二時頃まで話し込んでいたので参ってしまい、いったん退寮したという。しかし、留学生として日本人と生活を共にすることが大事だと思って再度入寮し、皆が歌えば自分も歌い、寮の茶話会などにもきちんと出るようにしたら、寮生も親切にしてくれ、寮生活も面白くなったと言っている。先に一高では、多くの生徒にとって寮こそが重要だったと書いたが、この茶話会の記述を読んでも、日本人生徒、留学生ともに寮生活のあり方について、その良い面も悪い面も含めて、数多く言及し、一高生にとって寮生活というものの比重が大変大き

かったことがうかがえる。

永山寮委員は、向陵精神を第一に養うことを望むとする。向陵というのは、一高が駒場移転以前に位置していた本郷の向ヶ丘を指し、一高を指して「向陵」と呼ぶことが多くあった。永山は、一高精神は国境を以て異にするものではないとし、留学生諸君も向陵精神の修養に努めることを望むとする。あくまで基準は一高側、日本側にあるわけだが、向陵精神、一高精神さえ身につければ、国境を越えて分け隔てなく一緒になることができるという論理である。

井上講師は、英語の授業を受け持つ教員だったが、英語は広く行われる言語であって、英語は外国人との友情を厚くするうえで大きな利益があるとす。英語を媒介に、日中、東洋というのをさらに越えた世界との交流が見据えられている。

最後に、前に取り上げた、予科の邱咸仁を再び取り上げよう。「支那留学生」という言い方について一言している。一高では悪用していないが、特に神田方面¹⁰では、「支那」と悪用して呼んでいる場合があるし、いまは新しく中華民国であるのだから、そのように呼んでほしいと主張している。さらに邱は補足して、「支那」が、特に一高で言われる「支那」は、悪い意味ではないが、それでも、中華民国という新しい呼称を用いてほしいとしており、こうした発言で会を締めようとするときには、新進国を背負う青年としての矜持が感じられる。また、そのような矜持があつてこそ、日本を背負って立つとの矜持を有していた一高生と相並んで、曲がりなりにも（葛藤などあったにせよ）共同生活ができていたのだと思われる。

茶話会という名の通り、会の途中から食事を交えたようだが、メインとしては白十字堂のランチと洋生菓子、それに炉庵の煎餅、大阪屋茶店の茶が出たようである。いずれも本郷区の一高周辺の店で、白十字堂は、その本店が帝大の正門前にあり、また駒場の近くの渋谷道玄坂にも店があつて、本郷時代、駒場時代を通して一高生の御用達だったという。

¹⁰ 神田周辺は中国人留学生の通う学校や住居も多くあり、チャイナタウンの体をなしていた。『東京人 2011年11月号』（都市出版）の特集「チャイナタウン神田神保町」参照。

3. 森の入学式式辞——一高精神の下での日中融和

続いて、特設高等科が設立され、駒場移転が行われる直前の1935年の森の入学式式辞を紹介する¹¹。式辞は全体で21枚のメモに記されているが、

¹¹ 駒場博物館所蔵資料「昭和十年四月十日入学式」（請求番号（11）H26）。

「特設高等科生へ」と題された部分の翻刻を資料として掲げる。本資料の解説に際しては、EAA 特任助教の宇野瑞木氏にご協力いただいた。記して感謝申し上げる。

（特設高等科生へ）

尚ほ最後に特設高等科生に特に一言する。

今迄演べた一高精神と是に関する注意は諸君が矢張り一高生たる以上正に厳守すべきは論を俟たない。

此特殊機関の成立せる所以は、決して御国（？）よりの便宜主義や日本の利得観念よりならず。東亜の事は東亜に於てといふ遠き慮りからである。

近来個人主義物質万能主義の西欧文化が其行詰りに会し其方途を失へる時、我々は東洋のよりよき道徳や哲学に醒め、大家族主義に帰り共存共栄の正しい意味の平和を主旨とする東洋文化尊貴性を再認識し着々新興の意気に燃え、世界は驚異の眼を張つて居る。我々は過去の物欲に則した侵略主義を捨て先づ東亜一致団結により、其結合を強固にし真の平和を将来するやう小乗的立場より大乘的立場に立脚して来たのである。故に先づ満洲国の真の独立を扶翼した（昔なら属国とする）。此大平和主義が遠方の欧人には遽かに理解されざらんも近時血を等しくする隣邦には理解され期望の方途に向いんとして居る。自主的国防。軍縮の根柢も此にある。

所謂東亜の事は東亜に於てだ。而して此大平和主義を以て強き団結をなし、更に世界救済をなすことが吾人の理想と信ずる。

斯る信念の下に、先づ東亜青年が此信念を理解せねばならぬ。此意義に於て未来の中堅人物たるべき東亜青年が氣脈を通じ相理解せねばならぬ。

斯る方途の下、我文部省、外務省ハ此使命を託する事に大に一高を信頼し、予に諾否を需めたのである。現実^ニに於てハ一高本科のみにてあり余る事業と一時逡巡せしも政府当局の信頼も尤もなるものあり予ハ一高式に諸君を養育するを俊偉（？）としてこれを受諾せり。

（左欄外）

苟も管理者が熟慮応諾したる以上是を翼賛し此機関の

進展を相共に計る事ハ当然の事と信ずる

諸子は多少風習を異とする此に來た。而も本校は入学を志望せる以上徹頭徹尾我^マ一高に同化し一高の名譽を毀損せざることを努めざる可らず。

学校は出来得ル限り本校生と無差別に待遇せんと思ふ。而も其親みに思ひ挙つて本

最後の3枚は「特設高等科生へ」とされている。そこで森は、一高で中国人留学生を受け入れているのは、中国にとっての便宜でも、日本の利得からでもなく、「東亜の事は東亜に於て」という慮りからであるとする。個人主義物質万能主義の西欧文化の行き詰まりに対し、東洋文化尊貴性の再認識がなされており、東亜一致団結により、大平和主義を以て、更に世界救済をなすことが理想だと言う。東亜青年がこの信念をまず理解すべきだとし、東亜青年が気脈を通じ、相理解しなければならぬとし、留学生は、一高に入学を志望した以上、徹頭徹尾、一高に同化しなければならぬとして、他方で、学校は出来る限り留学生を日本人生徒と差別無く待遇したいとする。式辞の最後で森は、「願はくば、心を安んじ異国にあるの思ひせず、能く学び能く遊ばれたい」と、特設高等科生に呼びかけ、「本邦学生諸君も…能く親まれ交はれんことを」と結んでいる。以上のような調子で、森は、東亜の一致団結と、日中の分け隔てない交流を言っている。このような、日本人生徒と差別なく分け隔てのない、一高精神の下での団結という、茶話会での日本人生徒の主張と同様な、日本側の態度を快く受け入れた留学生もいただろうが、他方で、日本本位の同化政策だと、違和感を抱いた留学生もまた少なからずいたはずである。実際は、特設高等科への制度移行により、日本人生徒と留学生の学課のコースは別建てにされ、日中両学生の間の交流は以前よりも困難になってきており、それへの不満は一高の一体性を重視する多数派の

科に編入せよとか（言語関係を参観して学課の改正を要求したり）又一高にハ由来ある可らざりし団体的悪行動をよし劇しきは決議者を学校に出す如きは、貴国の学生には由来あつたことも知れぬが絶対に予ハ受附けず、寧ろ教罰を以て臨むことを忘れてハならぬ

若し平和親善の大方針に背く行動あり本校の貴き伝統を傷け忍び難きものあらば予ハ此事業の返還を政府に為す意途なることを記憶せよ。

如上予は此特設科に関する根本義を宣べたり。他具体的、無形の諸般の事項は別に竹田主事より申渡さるべし

願はくは心を安んじ異国にあるの思ひせず、能く学び能く遊ばれたい。

本邦学生諸君も如上本来旨を味得（？）し、能く親まれ交はれんことを。

（原資料はメモ帳に横書き。傍線は、原資料では、赤字の下線。旧漢字は新字体に直し、かなづかいはそのままとした。また、判読に確信が持てない箇所には（？）を付した。）

日本人からも、少数派の留学生からも生じていたのである。

特に問題化したのは特設高等科に附属予科を設置する問題で、「特高問題」として寄宿寮の記録や寮内新聞である『向陵時報』を賑わせていた。特設予科の時代には、予科一年、日本人と共通の本科が三年と、合計四年間の留学生教育が実施されていたが、特設予科を廃止し、日本人のコースと分離して、留学生だけの三年間の特設高等科とすることで、留学生の高等学校段階での修業年限を三年に短縮するというのが特設高等科設立の眼目だった。しかし、入学してくる留学生の基礎学力の補充がなお必要になり、再び、予科段階を、特設高等科附属予科として設置することを学校側が検討し始めた。これに関し、寮にも関わる事項であるのに寮生側に相談のなかったこと、予科生が通学生とされたことを不満として、1936年10月に寮生側は反対の決議をする。それから二か月ほど、寮委員会の会議は特高問題で持ち切りだった。対して、留学生たちはそうした場にはほぼ関わらなかつたものの、棣華会という、留学生相互の親睦と日本人生徒との意思疎通を図るものとして1934年に結成されていた団体を軸に行動したようである。11月には棣華会秋季大会として、留学生と教員、日本人生徒70名余りが集まり、意見交換がなされた。12月に入ると、とうとう寮総代会で附属予科設置が承認され、ひとまず事態は落ち着くこととなる。

むすび——一高精神とはなにか

以上、日本側は生徒も教員も、「一高（生）として」という立場から留学生とそれに関する問題に対峙していたことが分かる。国籍ではなく、一高精神を持して一高の真髄である寮生活を送ることができるかどうかが問題であって、その線を越えてくれば、日中間わず「融和」¹²できるという、ある意味ユニバーサルな姿勢だと評価できるかもしれない。しかし、その一高精神といった基準は、日本側が設定したものでもあったし、「融和」を促す以上に、その外との分断を招いたと思われる。それは留学生との間でだけでなく、一高の外の日本社会との間でも同様である。

¹²2. で取り上げた「支那留学生茶話会」で、特高生徒主事であった竹田復教授が「留学生ハ決シテ融和出来ナイモノデハナイ」としているなど、資料に見える言葉。

最後に取り上げるのは、英字新聞の記事で、附属予科設置問題の最中に出されたものである。*The Japan Advertiser* 紙の1936年10月28日の「SINO-JAPANESE PROBLEMS DISTURB DOMITORY LIFE」という記事で、はっきりと、「一高における民族摩擦」(Racial Friction Among Students of First Higher School)と記されている。この記事は、「民族摩擦」が、寮生活を阻害していると言い、一部のグループは中国人留学生は彼らだけで住むべきだと考え、他のグループは調和の下で両国民が共に暮らせることを願っていると伝えている。一高精神など共有しない外部の目から見れば、日中両国の政治的立場対立からくる一高内での寮生活をめぐる対立が「民族摩擦」として映ったのは当然でもある。現に、一高精神の下に日中分け隔てなく交流するという建前も、日中戦争へと突き進んでいく中にあるのは、困難があったであろうし、1932年以降、それまで両国混合だった日中の生徒の学課コースは別々にされ、頼みの寮でも、必ずしも「融和」は進んでいなかったことが附属予科設置問題の議論の中で日中の生徒の口から言われている。

以上見たように、明治末年以来、日本におけるエリート養成校の最たるものとしての第一高等学校において、制度的に、他者としての中国人生徒との接触、同居があり続けたということは、留学生研究という見地からだけでなく、筆者のように、一高を題材に、近代日本の青年の思想動向を研究しようとしている者からしても大変興味深い事態である。

一般的に言って、他者の存在があつてこそ、自己のありようというのも真に理解される。旧制高校的な読書において、他者との友情や恋愛、師弟関係などについてはよく説かれたが、しかし、そのような教養主義的な枠組みにおいては、外国人との関係というのは(外国と日本との関係はともかく)、さほど説かれなかったように思われる。

他方で、一高生というのは将来、国を担っていく者として、すでに周辺諸国を呑み込みつつ、帝国化していた日本の国家レベルのアイデンティティと、自らのアイデンティティを重ね合わせるところが多かったと思われる。周辺諸国を切り従える東洋の盟主たる日本と、将来、国民を統率していくことになる一高生というイメージは容易に重なるだろう。日露戦争後に一高校長となっていた新渡戸稲造は、一高生に対し、膨張的国民であれとも語っていた。そのような流れの中で、東西文明の調和ということが日本の使命として言われ、森の入学式式辞にもあるように、世界救済ということも言われ

た。同時代の日本で言われた帝国主義的な言説と、一高精神の下での日中生徒の融和というのが相同関係にあるのか、一高でのそれは、国家レベルの帝国主義の学校レベルのミニチュアということにとどまらない意義があるのか、まだまだ検討が必要である。軍事大国、帝国であった日本の時代と、その後の平和国家となった日本の時代とでは、留学生との関係はどのように違っているか、興味は尽きないが、本稿の範囲を超えるため、ここで筆を擱くことにする。

6

橋田邦彦

森卷吉の次の一高校長

岡本拓司

1. 一高校長から文相へ

第一高等学校（一高）特設高等科（特高科）といえば、その制度の確立において重要な役割を果たした森卷吉に関心が集まるのは当然であるが、世間一般にもう少し広く名前の知られているのは、その次の校長であった橋田邦彦であろう。1937年に東大医学部生理学教授をつとめたまま一高校長にも就任した際には、一高とその周辺も意外な人事であるとの反応を示したが、1940年に第二次近衛内閣の文部大臣に就任すると、今度は日本の社会全般が橋田とは何者かと問うことになった。著名であった橋田が一高校長や文相になったわけではなく、一高校長や文相を務めたことで橋田が有名になったのであるが、日中戦争から対英米戦へと向かう時代にあって、教育行政上の要職にあった橋田の言動は、当時の人々にも若干の印象を残すこととなった。橋田の態度は目立たないものであり、発言も、当時からすでに体制迎合的と解される点の多いものであったため、その印象は「若干」であって特段強烈ではなく、また好意的に受け取られるよりはその反対であることのほうが多い。しかし、橋田自身の主張は、一高校長や文相への就任以前から一貫したものであって、本人にはとくに国家におもねっているといった意識はなかったようにも思われる。以下では、一高校長や文相としての橋田の言動やそれに対する周囲の人々の反応を取り上げて、おそらくは自身ではそう強く

意識しないままに、時代の中で割り当てられた役割を担ったこの人物の事蹟を辿ってみたい。

2. 一高生の見た橋田

橋田に関する描写で最もよく知られているのは、高木彬光の『わが一高時代の犯罪』¹のそれであろう。高木は橋田を「軍国主義の濁流」の象徴として描き、「正法眼蔵の権威」であると認めながらも、「白髪のかびしい顔」や「黒のガウン」、そして「敗戦の責任を感じて毒をあおいだ」という最期によってその人物を語ろうとし、「永遠の歴史の流れに浮かぶ、無数の泡沫の一つ」と総括する（9-10頁）。

校長が行う倫理の講義については、「あまりにも深遠な思想」、「難解な表現」であり、「ラテン語でも聞いているように」不可解であったという。友人の解説では「学問と思想の問題」、「生と死の大問題」を『正法眼蔵』の立場から解説していたというが、高木にはその真偽の見定めがつかない。ただし、ふと調子が変わったときに耳にしたその言葉は、一高生徒としての本分を忘れて政治活動にのめり込むようなことのないよう戒め、皇軍が国威発揚のために干戈を交えている「肇国以来の非常時」にあつて、一高生としての自由も、寮の自治も、現下の「国家的制約」の下で初めて認められることを意識せよと訓ずるものであった。「峻厳」、「孤高」ではあつても「狷介」に近く、橋田は、「尊敬されたが、敬愛されなかった」。人格者ではあつても青年の心をつかむ魅力はなく、この点で、前任者の森や、後任の安倍能成とは比較にならなかつた。一言でいえば、「一高の校長たるべき人ではなかつた」（101-102頁）。

体制により批判的であつた加藤周一もまた、国家の方針を受け入れてそれを尊重せよとする橋田の議論を記憶しており、そこでは、「科学と善と「聖戦」の一体となつた円」について、理解しがたい解説がなされたという。わずかに理解できたのは、近衛内閣が余儀なく拡大させていく戦争を橋田が支持しているということ、また学生にもそれに倣えと勧めているらしいことであつた²。

¹ 1951年。以下引用は、角川文庫、1976年より。

実際に橋田が日中戦争に関して語ったことは幾度かあった。そのうち最初のもは、国民精神総動員運動が開始された1937年9月9日の翌日、特高科附属予科の入学式があった日のうち、特高科と予科の授業が行われた時間帯に実施されている。橋田は東洋平和を目指す皇軍兵士の健闘を称え、一高の校旗である護国旗に従って尽忠報国を期する一高生にも自覚が必要であると説いた。ただし、軽挙妄動に奔らず、学生としての本分を尽くすよう戒めてもおり、当時としては特段軍事色の強い内容であったとはいえない³。それでも、比較的自由的な発言が当時もまだ許されていた一高の中で、敢えて国家の方針に従うことを主張した橋田は、特に戦後になって振り返られる際には、異質な存在であるように思われたのであろう。

高木と加藤の両人が回想している通り、主張が分かりにくい点も難点であった。校長就任直後から、橋田は一高生に向けて、直接語りかけるほか、学内紙などに文章を掲載して呼びかけようとしていたが、『校友会雑誌』には「日本文化としての科学」と題する一文を寄せ、日本人としての具体的立場において、文化科学・自然科学に携わり、日本文化としての科学を自発的に創造しなければならないと論じている⁴。従来の橋田の議論を知る者は内容を理解したであろうが、西洋の文化を修得させる拠点として機能した歴史が長く、それが授業時間の配分にも反映されている一高において、日本文化としての科学の創造を説くのは唐突であり、一高生たちも充分には咀嚼できなかったであろう。さらに橋田は、科学は世界の一側面を表すにすぎず、宗教なども修めたうえで人生の活動を「全機」として完成させる必要があるなどとも論じており、説教臭の強さは否めない。

若者の反応は率直である。ついで橋田が道元と生理学を結び付けた文章を『校友会雑誌』に掲載しようとする、編集を担当していた文芸部の中村真一郎らはそれは文学ではないといって拒絶した。中村は、「ぼくなんか向こうみずで平気で校長さんにけんかをふっかけたりした」と回想しており、このあたりが一高の一高たるゆえんであるともいえる⁵。『校友会雑誌』は文学

² 加藤周一「中村真一郎、白井健三郎、そして駒場——思い出すままに」『向陵』40巻2号、1993年、93-98頁。

³ 橋田邦彦「時局に際して」『文部時報』599号、1937年、6-8頁。

⁴ 橋田邦彦「日本文化としての科学」『校友会雑誌』359号、1937年、4-12頁。

作品のみを掲載していたわけではなく、橋田への対応はその場での自分たちの判断に基づくものである。橋田はそれに気づいたかどうか、怒って別途パンフレットを作り、配布したという。

3. 文部大臣としての橋田邦彦

一高生には必ずしも好まれなかった橋田の姿勢は、科学技術の振興を目指しながらも、1935年以降に問題となっていた国体明徴の動きとの両立を図ろうとしていた、政府内外の人々、特に近衛文麿の側近の安井英二や、文部省の伊東延吉などには訴えかけるところがあったようである。自身科学者でありながら、道元や王陽明を引用して、自然に向かう科学者の心構えを説く橋田であれば、国体明徴と科学技術振興の両方を一身で体現しているとも見えたであろう。橋田が第二次近衛内閣で文相に就任するにあたっては、非公式な会合で定期的に顔を合わせていた安井が重要な役割を果たしたようである。

一高校長ではあったが依然知名度の低い橋田を閣僚に迎えるのは冒険ではあったが、近衛はこの種の人事を行うことがまれではない。橋田の場合には、大抜擢が成功したと言えるであろう。就任直後、橋田が談話等で明らかにした指針は、国体の精華発揚や国家方針を優先し、科学振興は行うが、それは国家奉仕・日本文化興隆のためであるというものであった。さらに橋田は、「日本独自の立場から欧米の科学を指導するが如き科学」、すなわち「日本科学」を樹立することを目指すと言い、科学者がその精神をつかんで、科学を国民生活に溶け込ませるようにしなければならないとも説く⁶。国体明徴が叫ばれるなか、軍事面でも産業面でも不利な条件となりかねない、科学への反感が高まっていたが、橋田はこれを回避する論理を、おそらくはそうとは意識せず、提示したことになる。

⁵ 世良田進・氷室吉平・井上司朗・竹内敏雄・氷上英広・高尾亮一・生田勉・中村真一郎・橋川文三・清岡卓行・長谷川泉「一高文芸部の回顧」『向陵』16巻2号、1974年、254-278頁。

⁶ 橋田邦彦「文部大臣談」『週報』199号、1940年、12-13頁；同「所信」『週報』200号、1940年、2-5頁。

橋田の名前とより強く結びついて理解されているのは、しかし、「科学する心」という平易な言葉で表現された主張であろう。科学者がものごとを正しく把握するためには、人間としてよく生きなければならず、また動きをもつ自然を「機」としてとらえなければならぬと橋田は主張し、これを『中庸』や『大学』に言及しながらさらに解説する。日本であれば「道としての科学」や「行としての科学」といった発想に至るのは容易であるが、西洋にはそうした心構えはないようであり、日本人として、功利的・実利的な観点からの科学の推進ではなく、「皇基」を「振起」するために、行や道や徳としての科学を築くべく世界に知識を求め、「世界的日本として日本的に世界を把むこと」が肝要であると橋田は言う⁷。

橋田は、自然の構造や、特定の学問的方法に言及せず、科学の性格に関する議論を、それに携わる人間のところに焦点を当てて展開したのであったが、これは、日本人が優れた人間であることを主張するための材料に事欠くことのなかった当時の日本の状況からすれば、科学推進と国体明徴を両立させるにあたって最適の主張であった。ここでも橋田は特に時流への迎合を意識したわけではなく、従来自身の見解に、文相としての立場への配慮をわずかに含ませて展開したに過ぎなかったように思われる。当人には作為も外連味もないのであるが、本然の主張が偶々時代の要請に正確にこたえていたのである。そのために、その時代や要請が後に否定されるに至ると、体制迎合的であるかのように回想されざるを得なかったともいえる。

4. 「日本的性格」と「日本的把握」「東洋的把握」

国体や日本精神を重視する文部省・内務省とは異なり、大日本帝国の影響圏に存在する資源に着目し、それを軍事・産業において利用するのに適した科学技術の必要を説く人々も、政府内外に数多く存在した。国体や日本精神は、遑れば明治維新の基本的理念に根拠があったため、それらに基づく主張を無視することはできなかったが、戦争を遂行しつつある国家が現実に必要なもの注目すれば、ごく当然のように単純な科学技術振興路線に行きつく。革新官僚と呼ばれる人々は、このような現実的な科学技術支持の姿勢

⁷ 橋田邦彦「科学する心」『教学叢書』9輯、1940年、279-328頁。

を保持していたが、彼ら、たとえば技官の中の指導者的存在であった宮本武之輔にとっては、大東亜共栄圏は資源であり、その資源の利用に適した科学技術、すなわち「日本的性格」をもつ科学技術こそが、現下で目指されるべき対象であった⁸。橋田が、日本人の作る科学は原理からして西洋のものとは異なると言いかねなかったところ、宮本は、基礎理論は世界共通であり、各国の利用可能な資源や、各国が置かれた環境によって、応用科学や技術の領域で必要とされるものが異なり、日本の場合には「日本的性格」が要求されると、至極常識的な主張を展開している。

対するに、橋田が好んだのは、語感はあるものの内実は全く異なる、科学の「日本的把握」という指針であった。自然に人間が対峙する際の態度を重視し、学を全人格的な道として捉える必要を、儒教や仏教の伝統に連なる東洋の先哲に依拠して説く橋田は、大東亜共栄圏の建設が国家の指針となるのに並行して、「日本的把握」を「東洋的把握」へと拡張させるようになる⁹。とはいえ、従来から王陽明や『中庸』などに依拠して議論を進めてきた橋田にとって、日本から東洋への拡張はごく自然な流れであったものと思われる。

官僚たちにとっては資源の供給元であるにすぎなかったアジアは、橋田にとっては、科学をも含む文化全般を導く指針を仰ぐための、精神的な遺産の宝庫であった。その主張においても、特に特定の意図や作為はないように思われるが、これも無意識のうちに、橋田は、大東亜は資源であるのみではないと、指摘しているかのようにも思われる。振り返れば、一高特高科の確立にあたっては、橋田は前任の森ほどは貢献することはなかったが、文相の職に就いたのちには、東亜の精神文化の意義を強調するという役割を果たすことで、戦時ではあっても、その特有の状況に拘束されることのない視野を開こうとしたともいえる。

5. 時代状況の中の橋田

敗戦後、戦犯として裁かれることを嫌い、橋田は服毒して自ら命を絶つ

⁸ 宮本武之輔編『科学技術の新体制』中央公論社、1941年、3-27頁。

⁹ 橋田邦彦「自然科学の東洋的把握」『科学文化』2巻3号、1942年、1-8頁。

た。生きて裁判を受けたとしても、文部大臣が死刑に処せられたとは考えにくい。教育の場に戦意高揚のための様々な施策を取り入れ、学徒を戦場に送り出した側の当事者としては、敗戦の後も生き永らえる恥辱には堪えられなかったのであろう。

橋田の主張は、一つ一つを取り上げてみれば、難解ではあれ特に注目すべき新しい点があるわけではない。しかし、全体としてみれば、意図したようには見えないにもかかわらず、時代の要求に正確に応えている点に驚かされる。科学と国体・日本精神が衝突しようとする時期であったために、他の時代であれば物静かな求道的科学者として平穏な生涯を終えたかもしれない橋田が、一高校長や文相に抜擢され、特に文相としては、作為のない自身の本来の主張が、そのまま文政の指針たりうるほどの、いわば無意識のうちの有能ぶりを発揮した。自身の主張が時代の要請に正面から応えるものであったことは、橋田も実感はしていたであろう。自殺を選んだ動機の一つはこうした事情にあったのかもしれない。体制への迎合に見える橋田の姿もまた、橋田自身の言動と時代状況の協働によって生じたものであったと考えるべきなのであろう。

閉会の辞に代えて

東アジア藝文書院と一高プロジェクト

石井 剛

1. 東アジア藝文書院の理念

東アジア藝文書院（East Asian Academy for New Liberal Arts, EAA）が旧制第一高等学校に併設されていた特設高等科に関する研究を始めた直接のきっかけは、その駒場オフィスが置かれた駒場キャンパス 101 号館がかつての「特高館」、すなわち、一高の駒場移転にあわせて新たに建築された特設高等科校舎であったからだ。ここでは、EAA の理念を紹介しながら、EAA がなぜ、「一高プロジェクト」に注力するのかについて簡単に紹介したいと思う。

EAA は 2019 年度に発足した新しい研究教育プロジェクトであるが、その最大の特徴は北京大学と東京大学とのジョイント・プログラムであるという点にある。設立の経緯に関しては、『駒場の 70 年』（東京大学出版会、2021 年）の中で詳しく述べたので省略するが、そのエッセンスをまとめると、日本と中国を代表する二つの大学が「特別な関係」を築くために、新しい東アジア学を共に創造することがこのプログラムに託されているということになる。

EAA の理念はそのロゴマークに集約されている。全体の意匠は「魚尾」（線装本に閉じられた一葉一葉の紙の中央の折り目に附された目印）を象ったもので、左側の赤と右側の青がそれぞれ火と水を表し、それらを下で支え



る土色とともに、三色の基本カラーを構成している。赤と青はまた北京大学と東京大学のスクールカラーを模したものであることにも、両大学の事情に通じている人なら容易に想到することだろう。火と水のイメージは、現在 EAA 院長を務める中島隆博さんと小林康夫さんによる対談形式の共著書『日本を解き放つ』（東京大学出版会、2019年）のなかで、小林さんが放った「火と水の不可能な結婚」ということばがそのままヒントになっている。

火と水はお互いに打ち消し合うものだから、それらが「結婚」することはふつうに考えれば不可能であろう。しかし、両者は共に、わたしたちが生きる宇宙を構成する基本的な要素であることもまた、古代の賢人たちが認識していたとおりだ。東アジア漢字圏の伝統にそれをたどってみると、漢代には、陰陽の二元的作用に加えて木、火、土、金、水という5要素（五行）がお互いに打ち消しあい（五行相克）、またお互いに生じ合う（五行相生）という陰陽五行説が盛んに行われていたことに思い至る人も少なくないだろう。また、宇宙の生成要因として火と水の作用をより端的に表したのものとして、例えば、『淮南子』がある。その中で「天文訓」においては、道（不断の生成変化プロセスを繰り返す宇宙の全体）における天地生成のプロセスが述べられており、天地に充満する陰陽の精（エネルギー）の作用について次のように述べられている。

天地の精が合わさると陰陽となり、陰陽の精が集まると四時となり、四時の精は散らばって万物となる。陽が積もってできた熱気は火を生じ、火気の精なる者は日となった。陰が積もってできた寒気は水となり、水気の精なる者は月となった。日月がながれでた精なる者は星辰となる。天は日月星辰を受け、地は水潦塵埃を受ける。（『淮南子』天文訓）

陽と陰という二大エネルギーが作用することによって火と水が生じ、それらは太陽や月、さらには星々となっていく。そのみならず、火と水は天地を満たしていくというのである。

思えば、わたしたちがその生を受けている地球の表面には、天上の太陽光

と地表の水とが相互に作用して巧みな大気の循環システムが成立している。「火と水の不可能な結婚」は、この地上において実は最初から果たされていたのだ。一方、今日、人類が地中に閉じ込められていた化石燃料を掘り出して大量に消費することによって、その循環システムは異状をきたし、人類の生存そのものを脅かすまでに深刻化している。そして、人類はこの加速する気候変動を生き抜くべくテクノロジーを駆使しながら「持続可能な発展」の可能性を追求している。だが、そこで真に問われているのは、事ここに至ってなおかつ「発展」への信仰を疑うことなく、テクノロジーによる生命と物質の止めどない改変を試み、中国哲学にいうところの「道」そのものを我がものとして思い通りに支配せんとする意志と欲望の是非そのものであるはずだ。これを問うためには、少なくとも、近代と呼ばれ、また人新世とも呼ばれる、わたしたちの産業文明そのものをもう一度見なおさなければならないだろう。EAAは、こうした世界的課題、人類的課題を見据えながら、北京大学と東京大学が協力し合って次世代の若者と共に新しい学問のあり方を模索する研究教育一貫プログラムである。

「火と水の不可能な結婚」は、一見するとお互いに打ち消し合い、反発し合っているかのような両者が、実は共にその持てる性質を活かし合うことによって、世界の循環的平衡を保つ動力として機能し合っているのだということをおわたしたちに気づかせてくれる。これを日本と中国という二つの国の関係に当てはめた場合、その寓意が示唆することの意義深さについては贅言するまでもないだろう。近代以降の両国の歴史は「友好」（一高時代はしばしば「親善」と称された）というトーンを一方で維持しながら、現実の関係においては著しいきしみ音を立て続けてきたと言うべきである。両者の平和な結合はつねに望まれ続けてきたにもかかわらず、蜜月期間が長かったとは到底言えない。そうした不幸な現実がその間に横たわっていることを否定することは、いかなる意味においても不可能だろうし、倫理や正義にも反する。それは、産業文明の副産物でもあったのかもしれないが、物質の問題であるよりも、より人間の思想の近代によって産み出されたものである。そうであればこそ、わたしたちは、もう一度、この「不可能な結婚」に挑んでいく必要がある。そうすることによって、わたしたちは、近代を否定するのではなく、それを負の遺産ともども受け継がなければならない。新しい平和と善の生成的循環に寄与する未来は、その先において初めて切り拓かれていくだろう。

う。

2. 一高プロジェクト発足の経緯

こと駒場キャンパスにおける一高時代とそこでの特設高等科に対して視点を向けることは、第二次世界大戦から今日に至るまでの複数世代の歴史を経て、今日まで受け継がれている遺産をわたしたちがいかにして清算し、かつ未来の礎に転換していくのかという課題を直視することを意味する。かくして、特設高等科と中国人留学生の記憶を掘り出すことは、まるで運命に導かれるように、EAA のオフィスが101号館に定められて間もないころに、わたしたちにとって取り組むべき最初の、しかも根源的な研究テーマとなった。

当初、目指すところはより単純なものだった。実際に訪れてみるとわかるように、北京大学のキャンパスや建物の中には随所にその歴史が刻み込まれ、通りがかる人々が、キャンパスを彩ってきたかつての校友たちの気配を自然に感じ取る仕掛けが施されている。そのような仕掛けが駒場キャンパスにも欲しかった。101号館をその手始めにして、特設高等科時代をしのばせる写真や資料を壁に展示できないかと思ったのである。

駒場キャンパスには1935年の一高移転に併せて築かれた建築物が今もなお残り、また、一高時代を彷彿とさせる校章や遺構なども保存されている。だから、ここに暮らすわたしたちは、知らず識らずのうちにこのキャンパスに沈澱した歴史のおいを感じながら日々の仕事に携わっているということができる。古いものが残っているのはただ自然に残っているのではなく、誰かがそれらを残そうと努力してきたからだ。しかし、実はわたし自身は、EAAが発足するまで101号館がそのような歴史のある建物であることを知らなかった。駒場の同僚たちに聞いても、このことを知っている人は決して多くはないようなので、こと一高時代に築かれていたはずの中国と日本の「特別な関係」の記憶についてはいつの間にか風化して久しかったということなのだろう。折しも、田村隆さんと折茂克哉さんが一高校長を務めた狩野亨吉が残した文書（駒場図書館所蔵）の調査研究を行い、その成果を駒場図書館で公開しているところだった。わたしたちが早速協力を仰いだところ、お二人ともたいへん快く応じてくださることになった。また、藤本文書については、今は同志社に移られた村田雄二郎さんが、故並木頼寿氏の遺品とし

て歴史学部に保管されている箱詰め書類が特設高等科に関する貴重な史料であることを知らせてくれた。こうした偶然が機運を醸成し、素人のわたしたちが素朴な願望と共に始めたこのプロジェクトを一気に前に進める大きな原動力になった。

キャンパスの歴史を知ることは、わたしたちの想像力を開放し、その結果として大学生活そのものを豊かにしてくれるはずだ。とくに、このキャンパスを巣立っていった数知れない先達たちがその後いったいどのように生きていったのかについて、このキャンパスにいながらにして感じることは、これから社会を目指す学生にとっていかに重要であることか。大学で行われる学問は、まず直接的にそこで学ぶ学生のためにはあるはずだ。この基本は東大のような研究型大学であっても変わらないだろう。そして、学生はわずか数年間の大学生活を経た後は、そこで得た学問の基礎を携えて、その後に始まる長い人生を歩んでいく。そうした彼らの生活の拠点であるキャンパスは、彼らがそこにいながらにして歴史の息を感じ取ることができ、それを無形の栄養分として、彼らが自らの未来に対する豊かな想像を膨らませる場であるべきだろう。未来に対する豊かな想像力を養うこと自体は学問の立派な目的であるにちがいない。だとすれば、キャンパスにおける生活もまた、学問の不可欠な構成要素であるのだ。EAAが「新しい学問」を担う組織である以上、駒場の歴史を現在化しようとする努力に呼応し、かつその力的一端を担うことは必然的ですからある。

では、101号館の歴史は、かかる意味での学問に対してどのように寄与していくことができるだろうか。くり返しになるが、101号館の歴史、とりわけ特設高等科の歴史は必ずしも、この駒場キャンパスで学んだ多くの先人たちにとって共通の記憶とはなっていない。それは、特設高等科の存在自体が一高生にとって周縁的なものであったことを如実に表している。駒場の一高時代における特設高等科のそうした周縁性については、本論集の中でも触れられているし、この研究プロジェクトの中でも次第に明らかになって行くであろうから、ここでは詳述しない。1936年に一高に入学した加藤周一は、「とめどなく進んでゆく軍国主義的風潮」に懐疑的な一高生たちが、日本の植民地主義と「国民精神総動員」とに対する強い批判を、講演に招いた横光利一に向かって容赦なく浴びせかけるさまを克明に記している。だが、その『羊の歌』には、同じキャンパスで同じ時期に学んでいたはずの特設高等科

生について、遂に一言の言及もない。大正教養主義とエリート主義のもとで「選良」たることに高いプライドを隠さなかった一高生たちの目に、特設高等科生はいったいどのように映じていたのだろうか。一高から東京帝国大学経済学部に進み、文化大革命後には中国社会科学院経済研究所の教授を務めた朱紹文（一高時代は朱朝仁）について、彼と親交のあった田島俊雄さんは、彼が一高から東大へ進んだことについて「胸を張って」いたと回顧している¹。朱紹文にとっても、一高は加藤周一にとってと同じくらい、青春の時代に学問の基礎を固めたかけがえのない場所だったにちがいない。しかし、彼らが駒場で見えていたものは同じではなかったのかもしれない。いや、「一高精神」を称揚し、寮生活とともに一高アイデンティティに誇りを見いだしていた当時の一高生たちにとって、特設高等科は努めて意識しようとしないうちに、自分たちの生活との接点が乏しい後景の存在でしかなかったのかもしれない。

101号館と特設高等科の歴史を掘り起こすことは、したがって、一高生たちの歴史記憶の背後にある時代の無意識をあぶり出すことにつながる。1935年に当時「向陵」と呼ばれていた弥生キャンパスから駒場に移転する際の勇ましい行軍の姿が、101号館エントランスに展示されている（「一高中国人留学生と101号館の歴史展」会場1）。翌年には二・二六事件が起こり、さらに移転3年目の1937年には盧溝橋事件（七七事変）が勃発し、日本の対中侵略が本格化する。同じ年の12月には国民政府のあった南京が陥落したことで全国に慶祝気分が盛り上がったこともわたしたちがよく知るとおりだ。だが、その陰で、7月以降、多くの中国人留学生は帰国の途につき、中には延安の抗日革命運動に身を投じていった者もいた。また、朱紹文のように敢えて留まって学問を継続する選択をした者もいた。その後は、東亜新秩序建設の政策に呼応して再び来日留学生の数は増加に転じる。特設高等科にもそうした学生はいたであろう²。1943年から一高の留学生課長を務めた日本史研究者の藤木邦彦は、特別高等警察の留学生に対する警戒が厳しくなっ

¹ 田島俊雄「朱紹文研究員（1915-2011年）とその時代——戦時下の日本留学と戦後の中国」『経済志林』87（3・4）、2020年、305頁。この論文は、一高プロジェクトを知った田島氏のご恵贈くださったものである。この場を借りて感謝の意を表したい。

² 同上、273-275頁。

たころに、自身も取り調べを受けたことがあるという³。

一高の駒場時代に対する回想は数多ある。しかし、その中で特設高等科に言及しているものは少ない。そして、この事実は、ともすれば、当時における時代の無意識だけではなく、戦後の無意識を構成し、そして今日にまで続いているのではないだろうか。東京大学と北京大学がEAAを介して「特別な関係」を構築しようとするとき、その具体的なプロセスに携わるわたしたちが、真に東アジアから「新しい学問」を希求し、「火と水の不可能な結婚」に挑もうとするのであれば、この無意識の歴史に光を当てる必要がある。

さらに付言するならば、「火と水の不可能な結婚」が地球の循環的平衡を可能にしているのは、火と水が単に結合していることによるのではない。それらが「不可能な結婚」という逆説的な「結婚」関係にあるからこそ、地球上に暮らす万物の生命が保証されていることに留意しなければならない。そのような関係が東アジアから築かれ、わたしたちがそれに寄与していくのであれば、日本と中国の関係だけに留まることのない、東アジアのそこかしこに刻まれた近代の負の遺産に向き合うことが自ずと求められることになる。101号館を中心としながら一高の駒場時代を振り返るとは、このキャンパスから東アジアの近代を反省的に振り返ることにほかならないのだということもここで強調しておきたい。

3. 一高プロジェクトのこれから

偶然の機縁から始まった一高プロジェクトがこうしてEAAにとっての最重要研究課題になるまでに時間はかからなかった。現在、一高中国人留学生と101号館の歴史を繙く作業は、二つのまったく異なった角度から展開している。一つは、上述の藤木邦彦が遺した特設高等科関連の資料を整理する作業であり、わたしたちはこれを「藤木文書アーカイヴ」プロジェクトと名づけて、特任助教1名（宇野瑞木さん）とリサーチ・アシスタント5名（高原智史さん、日隈脩一郎さん、小手川将さん、横山雄大さん、宋舒揚さん）の体制を組織し、田村隆さんと折茂克哉さんの指導を仰ぎながら、2021年度末を目標に一応の目鼻を付けることを目指している。もう一つは、101号館

³ 笹山晴生「藤木邦彦先生の思い出」『史聚』41、2008年、14頁。

と特設高等科にフォーカスを当てながら、駒場の学生生活自体を一つのフィルムとして作品化する「映像制作ワークショップ」プロジェクトである。こちらは特任助教1名（高山花子さん）にリサーチ・アシスタント3名（高原智史さん、日隈脩一郎さん、小手川将さん）でチームを構成しており、同じく2021年度末までに短編の映画作品を制作する。

わたしたちは、この二つのプロジェクトが両輪となることによって、特設高等科をめぐる歴史の輪郭を明らかにすると同時に、その背後にあって今日のわたしたちをも規定している時代の無意識に姿を与えることを目指している。どちらも容易に完成させられるものではないどころか、克服すべき多くの困難を含んだプロジェクトであろう。それらを積極的に担おうとする次世代の研究者たちの尋常ならぬ努力こそは、「新しい学問」の一つの実践のかたちであるにちがいない。彼らの奮闘に心から期待したい。

また非常にありがたいことに、一高プロジェクトが発足して以来、駒場、そして東大の教職員の皆さんや、かつての一高生や駒場の卒業生、そして本論集にも原稿を寄せて下さっている学内外の研究者など、わたしたちの想像を超えた広がりの中で多くの方々が、さまざまなかたちで手を差し伸べてくださっている。こうした大きな社会的期待に応えるべく、わたしたちEAAは今後も誠実に努力していきたいと思う。

あとがき

宇野瑞木

「一高プロジェクト」が始まった当初、ここまで大きなシンポジウムを開催し、さらにそこから展開を遂げていくことになろうとは思ってもよらなかった。それが実現できたのは、一高時代の留学生関連の資料調査を進めるにあたって、さまざまな形で後押ししてくださった EAA の先生方や同僚たち、東京大学の諸先生方、さらに学外の専門の諸先生方、そして一高卒業生とその関係者の方々のお蔭であると改めて感じている。

また、それはパンデミックという巡りあわせとも無関係ではないと思われる。「一高プロジェクト」は 2019 年春から進められていたが、2020 年の年明けから、次第に移動や対面で集まることが制限されて国際的な学術交流が十分な形でできない状況になっていった。そうした中で、一方では、今いる建物に刻まれた日中交流の歴史や足元にある一高時代の資料へと遡るといふ、いうなれば垂直方向の移動へと自ずと向かったからである。それと同時に、大学や教育現場の意義の厳しい問い直しとともに、教師と生徒、生徒同士の関係性が形作る学びの環境と体験の豊かさが見直される契機にもなったこともあった。キャンパスの環境や建物が学びを形作る上で担ってきたもの、それ自体が物語る歴史の価値についても再考させられたのである。

かくして、わたしたちはかつての駒場、そしてこの特設高等科教室（現在の 101 号館）がいかなる場であったのか、という問いに向かって、より深く掘り下げていくことになった。ひとつは 2021 年冬から始まった「映像制作プロジェクト」であり、2022 年 3 月に公開予定の本格的な映画『籠城』を制作するに至った。もうひとつは、2021 年 6 月に立ち上がった「藤本文書アーカイヴ」である。戦時下の特設高等科関係の資料、通称「藤本文書」の

整理は2019年に開始し、駒場博物館への寄贈に至った後、しばらくそのままになっていたが、むしろコロナ禍にあって、足元の資料として再び見いだされたのであった。

「藤木文書」は、1943年に一高に設置された留学生課長という任務について一高の日本史の教員（のちに教養学部教授）の藤木邦彦（1907-1993年）が遺したと思われる文書類である。本シンポジウムでは一高が清国留学生の受け入れを始めた清末頃から駒場へ移転した1935年前後くらいまでが主として扱われたが、この文書は、さらにその後の1941年に太平洋戦争に突入し、特高科の生徒の受け入れが「大東亜共栄圏」へと拡大していき敗戦に至るまでの留学生教育の現場を伝える資料ということになる。戦局が厳しくなるにつれ、留学生が帰省したまま休学したり、非常措置として集団疎開が実施されたりしたことも窺え、奇しくも現在の感染予防対策のために大学内に学生がいられなくなっている状況と重なる、あるいはより際立った非常時のキャンパスの姿を示すものでもある。

ところで「藤木文書」は、東京大学駒場キャンパスの歴史学部会で長い間保管されてきたが、文書が入っていた段ボールには「並木」とマジックで書かれていた。すなわち、中身は藤木の所持品であるが、なんらかの経緯で、その後故並木頼寿先生（1948-2009年）が引き継がれた資料であったようである¹。汪婉氏のご講演にもあるように、並木ゼミにはかつて汪婉氏と孫安石氏がいらっした。また大里浩秋氏とも留日学生史関係の科研をご一緒されており、本シンポジウムとも大変縁が深い。汪婉氏が、ご自身の博士論文を一字一句全て並木先生が直してくださったことは一生忘れることができない、とおっしゃったことは、たいへん深く心に残っている。このように留学生を指導した駒場の教員として、おそらく藤木もいたのであろう。藤木はなぜこの文書類を大学に置いていったのか、そして、並木先生がどのような思いで引き継がれたのか、そして今、不思議な巡り合わせで、この文書をEAAで本格的にひも解くことになったことを、どのように受け止めるべきだろうか。このようなことを改めて考えさせられるのである。

もうひとつ、ここにどうしても記しておきたいのは、本プロジェクトにお

¹ 山口輝臣「東京大学駒場博物館所蔵「藤木文書」の来歴」『日本歴史』888号、2022年5月号掲載予定。

いて、当時の一高を知る方々を中心に、多くの方にインタビューに応じていただいたことである。インタビューを始めたのは、2021年4月からであるが、すべての方々が驚くべき真摯さと情熱でもって快く応じてくださった。故藤木邦彦のご長男で、藤木文書をご寄贈くださった藤木成彦氏、一高（本科）卒業生の天野文彦氏（昭24理乙）、中川昭一郎氏（昭24理乙）、渡部武氏（昭18文乙）²、工藤康氏（昭26理甲三）³、また教養学部初年度入学生の田仲一成氏⁴、戦中戦後の特高生である林義春氏（昭24特理乙）、鄭廣良氏（昭23特文）、大原弘氏（昭25特文）、一高生の行きつけであった菱田屋の四代目・菱田憲昭氏、そして一高生を紹介くださった詠帰会の谷田和夫氏に、この場を借りて心よりお礼申し上げる。一高の卒業生の方々は、既にご高齢で様々なご不便やお身体の不具合もお有りであったのではと想像するが、ご協力を惜しまずに最大限応じてくださった。特に戦時下の一高を経験された方は既に九十歳を優に超えていらっしゃるが、当時の記録を語る言葉の豊かさに驚かされるばかりであり、改めて一高の凄みを実感した。そして、戦中戦後の混乱に翻弄されながら一高生として過ごしたこと、その体験を語ること、後世に残すことへの強い思いも感じられた。また奥様をはじめ、ご家族にも大変お世話になった。一高本科生、特高生の肉声で、または書面でも直筆によって当時のことを伺うことができたことによって、駒場の一高資料を読む行為が、より立体的で豊かな経験となったように感じている。

現在、こうしたインタビュー内容も参考にした駒場博物館での展示「もう

² 一高のア式蹴球部で張華榮と周幼海と一緒にであったことを文章にも書かれている（工藤氏が運営するWebサイト『一高玉杯会便り』第169号、2018年9月9日、および第171号、2018年10月2日（http://blog.livedoor.jp/ichikou_gyokuhaiikai/archives/cat_410568.html）。また彼等に対する思いについて伺った際、「一高生にとって独善的になりがちな傾向を是正する点では大いに役立ったと思う。教室をのぞいて、住食を共にするので、おのずからさそいあって行動し人間関係は深まった」と答えてくださったことが印象深かった。

³ ブログ記事「工藤康氏へのインタビュー——昭和23年、一高最後の入学生として」（<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/report-20210719-ichiko-3/>）参照。

⁴ ブログ記事「田仲一成先生へのインタビュー——一高から教養学部への過渡期について」（<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/report-20210719-ichiko-2/>）参照。

あとがき

ひとつの一高——戦時下の一高留学生課長・藤木邦彦と留学生たち」に向けて準備中である。2022年3月22日から6月24日まで開催する予定であるので、ぜひ足を運んでいただけたら嬉しく思う。

いま、この展示に向けて準備を進めていく中で、本プロジェクト始動時に石井氏が投げかけた、建物に刻まれた歴史をどう受け止めるかという問いが、具体的な形をもって、わたしたちのなかに反響してきているように感じる。当時の一高が理想として掲げた「善隣」と、EAAが信念として掲げる学問が育むことのできる「友情」の共通点と差異は何であろうか。当時の時代性の関与と誤りをも見定めた上で、互いに尊重し、希^{のぞ}む未来というものが、いかに想像／創造できるのだろうか、と。駒場キャンパスにおいて生き証人のように立つ「101号館」、そして駒場に眠る留学生資料とともに、もう一度、一高が行おうとした全寮制による教養教育の意義を考えてみる必要があるであろう。

そうした問いを抱くと同時にまた、この三年間のプロジェクトを遂行する中で確信したのは、国家同士の関係としてではなく、人と人の学問を介した学びあいの場としてある、という点にこそ、いかなる時代においても希望があるのだ、ということである。

ここまで、本書の編集にあたって、同僚の高山花子さんには大変お世話になったことを、ここに記して謝意を申し上げたい。また改めて、本プロジェクトでお世話になったすべての方々に深謝申し上げる。

最後に、わたしたちが一堂に会した記録として本書を未来に残すことで、この書が新しい学問とそれが育む友情の種となることを心より願って、ここに拙筆を擱くこととする。

2022年1月22日 横浜にて

宇野瑞木

執筆者プロフィール

中島隆博 (NAKAJIMA, Takahiro)

東京大学東洋文化研究所教授・東アジア藝文書院院長。研究分野は、中国哲学、世界哲学。著書に、『共生のプラクシス——国家と宗教』（東京大学出版会、2011年）、『思想としての言語』（岩波現代全書、2017年）、『危機の時代の哲学——想像力のディスクール』（東京大学出版会、2021年）、編著に伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編『世界哲学史』全8巻＋別巻（ちくま新書、2020年）など。

太田邦史 (OHTA, Kunihiro)

東京大学大学院総合文化研究科教授。研究分野は分子生物学。著書に『自己変革するDNA』（みすず書房、2011年）、『エピゲノムと生命』（講談社、2013年）、『「生命多元性原理」入門』（講談社、2018年）、編著に『生命デザイン学入門』（岩波書店、2016年）。ほか論文多数。

宇野瑞木 (UNO, Mizuki)

東京大学東アジア藝文書院特任助教。研究分野は東アジア説話文学、表象文化論。著書に『孝の風景——説話表象文化論序説』（勉誠出版、2016年）、編著に『和漢のコードと自然表象——十六、七世紀の日本を中心に』（島尾新・亀田和子と共編、勉誠出版、2020年3月）、共訳著に『海東高僧伝』（小峯和明・金英順編訳、平凡社東洋文庫、2016年）、論文に「元・郭居敬撰『全相二十四孝詩選』系諸本の成立と展開について」（『東洋文化研究所紀要』177号、2020年3月）など。

大里浩秋 (OSATO, Hiroaki)

神奈川大学名誉教授。研究分野は、中国近代史、日中近現代関係史。論文・著書に、「日本人の見た秋瑾——秋瑾史実の若干の再検討」（『中国研究月報』453号、1985年）、『留学生派遣から見た近代日中関係史』（孫安石と共編、御茶の水書房、2009年）、『近代中国・教科書と日本』（並木頼寿、砂山幸雄と共編、研文出版、2010年）、『東アジアにおける租界研究——その成立と

展開』（内田青蔵、孫安石と共編、東方書店、2020年）など。

汪婉 (WANG, Wan)

中国社会科学院近代史研究所研究員、北京大学国際戦略研究院理事、東京大学グローバル・アドバイザー・ボード委員。研究分野は、近現代中日関係史。著書に『清末中国対日教育視察の研究』（汲古書院、1998年）、論文に「直隸省における「査学」の設置と巡視活動（上）」（『中国研究月報』723号、2008年5月）、「直隸省における「査学」の設置と巡視活動（下）」（『中国研究月報』724号、2008年6月）など。

韓立冬 (HAN, Lidong)

北京語言大学漢語国際教育学部講師。研究分野は中日教育文化交流史。著書に『近代日本における中国人留学生予備教育』（北京語言大学出版社、2015年）、訳書に『山水思想』（松岡正剛、中国友誼出版公司、2017年）、論文に「天津中日学院及び漢口同文書院の中国人留学生教育」（『年報 地域文化研究』15号、2012年3月）、「日本高等教育機関のチューター制度について」（『中国高等教育』20号、2019年10月）など。

田村隆 (TAMURA, Takashi)

東京大学大学院総合文化研究科准教授・東アジア藝文書院リサーチ・ユニット（世界文学）メンバー。研究分野は日本古典文学。著書に『省筆論——「書かず」と書くこと』（東京大学出版会、2017年）、共著に『高校生のための東大授業ライブ——学問からの挑戦』（東京大学出版会、2015年）、『知のフィールドガイド——異なる声に耳を澄ませる』（白水社、2020年）、『東京大学のアクティブラーニング』（東京大学出版会、2021年）など。

薩日娜 (SA Rina)

中国上海交通大学科学史・科学文化研究院教授。研究分野は科学技術史。著書に『日中数学界の近代——西洋数学移入の様相』（臨川書店、2016年）、『東西方数学文明的碰撞與交融』（上海交通大学出版社、2016年）、共著に『中国科学技術通史』（江曉原主編上海交通大学出版社、2016年）、『術数学の射程——東アジア世界の「知」の伝統』（臨川書店、2020年）、「A comparative study of the Huangyu Quanlantu and Takebe Katahiro's Kyoho Map of the Whole of Japan」（“Mathematics of Takebe Katahiro and History of Mathematics in East Asia”、岩波書店、2018年）など。

孫安石 (SON, Ansuk)

神奈川大学外国語学部教授。専門は中国近代史、日中関係史。編著に『近現代中日留学生研究新動態』（中国、上海人民出版社、2014年）、『戦争・ラジオ・記憶』（増補、勉誠出版、2015年）、『上海モダン——「良友」画報の世界』（勉誠出版、2018年）、『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代』』（東方書店、2019年）、『東アジアにおける租界研究』（東方書店、2020年）など。

高原智史 (TAKAHARA, Satoshi)

東京大学大学院総合文化研究科博士課程。研究分野は、近代日本思想史、高等教育史。論文に「学生が雑誌をつくるということ」（東京大学比較文学・文化研究会編『比較文学・文化論集』37号、2020年）、「古典に向かう愛と論理——日本思想史学の方法論としての「フィロロギー」について」（同、2020年）、「明治37年の腸チフス流行と一高自治寮」（同38号、2021年）など。

岡本拓司 (OKAMOTO, Takuji)

東京大学大学院総合文化研究科教授。研究分野は科学史、技術史、高等教育史。著書に、『科学と社会——戦前期日本における国家・学問・戦争の諸相』（サイエンス社、2014年）、『近代日本の科学論——明治維新から敗戦まで』（名古屋大学出版会、2021年）など。

石井剛 (ISHII, Tsuyoshi)

東京大学大学院総合文化研究科教授・東アジア藝文書院副院長。研究分野は中国哲学。著書に『戴震と中国近代哲学——漢学から哲学へ』（知泉書館、2014年）、《齐物的哲学》（華東師範大学出版社、2016年）、編著に『ことばを紡ぐための哲学——東大駒場・現代思想講義』（白水社、2019年）、共著に『世界哲学史6——近代I 啓蒙と人間感情論』（伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編集、ちくま新書、2020年）など。

編集者

宇野瑞木（EAA 特任助教）

編集協力者

高山花子（EAA 特任助教）

EAA Booklet 26

EAA Forum 17

一高中国人留学生と 101 号館の歴史

[2021 年 3 月 17 日]

編 者 宇野瑞木

発 行 日 2022 年 2 月 25 日

発 行 者 東京大学 東アジア藝文書院

製作協力 一般財団法人東京大学出版会

デザイン 株式会社 designfolio / 佐々木由美

印刷・製本 株式会社 真興社

© 2022 East Asian Academy for New Liberal Arts,
the University of Tokyo



EAA Booklet - 26

EAA Forum 17

一高中国人留学生と101号館の歴史



E A A
EAST ASIAN ACADEMY
FOR NEW LIBERAL ARTS